作者に非ずして作を場に入れたるを以て稱讃せられたり。されど尚外題を『那智瀧誓文覺』と改め、竹柴其水作と署せさるべからさりき。後者は『名歌譽』の後日にして史實を重んずる事前者に等し。學海と寶岑との外、尚二三の新作を出しゝ者あれども、皆注目を價せず。各劇場は依然繼承作者の似而非脚本を演じ、東京の河竹新七、竹柴其水、大阪の勝能進、同諺造等、古院本新小説或は講釋種の一節を取りて飣餖補綴せるのみにて、毫も戯曲の約束に從はさる陋作のみ行はれたり。

二十四年の比、學海の説益極端なる考古主義に傾き、團十郎亦默阿彌の史劇に活歷を標幟せし時、櫻痴居士往年政論の筆を止めて梨園に投じ、團十郎と協力して史劇の創作と之か上場に勉めぬ。是より先き、團十郎と學海とは、所見の骨髓に於て一致せしも、學海の直截急激なる、實行の上に於て遂に藝壇に容れられさりしが、櫻痴は急激なる改革の到底行はれ難きを見て漸進の穩なるに從ひ、一旦團十郎と意氣相投ずるや、能く梨園の關門を破り、歌舞伎座の立作者として其所見を實行するに至りぬ。是實に明治の演劇脚本史上に於ける一變動にして、文壇と藝壇との調和に一歩を進めし功迹沒すべからず。且其の史劇や新作にても改作にても舊來の不自然背實を除き、多少泰西性格劇の趣を參し、以て默阿彌の史劇に一轉進を與へたり。爾來二十六七年に至るまで、劇界は宛ら櫻痴團十郎の史劇時代たるの觀あり。新作改作多かる中に『春日局』『關原譽凱歌』『大久保彦左衛門』『日蓮記』等最名を得たり。然れども櫻痴か劇部に容れられしは、彼の革新意見の全部か行はれしによるに非ずして、新脚本を舊劇に調和するに勉め、團十郎の活歷的腹藝的趣味に迎合せん事を計りしに因るなり。されば一方に於て不自然背實の名の下に所有舊劇の夢幻的妙所を除き、他の一方に於ては未だ十分なる性情劇的新脚本を上場する事能はず。爰に一種沒趣味なる折衷劇を生じたり。是に於てか障害は二方面より起りて櫻痴の努力と團十郎の活歷とを失敗に歸せしめぬ。

二方面よりの障害とは即ち舊劇に慣れたる觀客の不評と、新思想を抱ける評論家の非難と是なり。當時猶觀客の多大數を占めたる俗衆は、舊劇の夢幻的美觀に慣れていたく、櫻痴の改作を喜はず、彼等歡樂の中心を奪はれしを見て團十郎の活歷を斥けぬ。又彼の識者社會の櫻痴に期待する所甚大なりしも、其の爲す所未た新劇の美を發揮するに足らず、新作も改作も往々默阿彌に若かさらんとするを見て

いたく失望しぬ。即ち觀衆は彼か破壞的方面に、評論家は其の建設的方面に、各少からさる不滿を懷けるなり。果然舊劇崇拜の潮流は社會を動かして折衷史劇に對する反動をなし、二十年以來の改良論の精神も全く行はれさるに至りぬ。是に於てか文壇の先覺坪內逍遙、夢幻劇論を『早稻田文學』に掲げ、性格劇の新標準によりて史劇を論じ、評壇新に波瀾を揚げたり。時恰も二十六年以後二年間に當る。此論は劇界の『小說神髓』といふべく、曩日の改良論以外、一新思潮を文壇に導きし者なれば、其の內容及之に伴うて起れる新脚本は、之を次期に說かんとす。

終に臨みて此期に於ける戲曲の飜譯を記さゞるべからず。此の方面に於ける活動は固より小說に於けるか如くならざるも、猶二三の西劇の、鷗外と其弟にして劇評家たる三木竹二との手に譯せられたる者ありき。二十二年『讀賣』に出でし『調高矣洋絃一曲』と、同年『柵草紙』に出でし『折薔薇』と是なり。共に『水沫集』に收む。前者はカルデロンの『サラメヤ村長』後者はレッシングの『エミリヤ、ガロチイ』にして、飜譯に取りし用意は、原文に忠實ならんよりは寧ろ邦語の調に近からん事を求め、其の句の如きは勉めて戲曲慣用の語勢語彙に從はんと試みたり。然れとも是等譯筆の劇壇に殘しゝ影響は、小說の飜譯の如く大ならず舞臺に上る事固より是なく、之に續く飜譯も亦出づる事なかりき。

第三期

第五章　新文學の勃興　其二

第一節　文運興隆の因緣

思想界の進運につれ、文學思潮革新の事成り、玆に新文學の活動を起してより殆ど十年、明治二十七八年の交に至りて思想界は再び一大轉進をなすへき時機に際會せり。勿論思想界の事は一晨一夕忽然面目を改むへき者に非ず。其の由て來る所甚遠く、其の根さす所甚深し。十年の間、冥々の裡徐に發展し來りし斯界の芳蕾、會々二十七八年に於ける國家的大事件に遭遇して玆に煥然たる美觀を現じたるなり。

日清戰爭は本邦文明史上の一大現象なり。思想界に第二の革新を促したる動機、國民の自覺を普遍ならしめ、信念を確固ならしめし大勢力なり。げにや自覺は國民思想の至寶にして精神的活動の生氣と發展とは常に其の裡より湧く。蓋し第二期初頭の盛觀は專ら國粹主義の勃興に伴へる國民自覺の賜なりき。而も當時國粹思想の影響する所は社會の全般に非ず。從て其の自覺も亦比較的範圍の狹きを免れざりき。然るに日清戰爭の影響は殆ど社會の隅より隅に亘り、津々浦々、貴きも賤きもおしなべて新なる自覺を喚起したり。且つ自覺に伴ふ國民の信念は、前期に在りては多少不安なりしに反し、今や確固不動の者となれり。自覺の賚賜なるべき精神界活動の、前期に比して一層の隆盛を來しゝは亦宜ならずや。

而して此の精神的活動の根底は、言ふまでもなく一般學術界の進步に在り。二十年以來、博物窮理の諸科學より地理歷史宗敎哲學に至るまで、日に月に面目を改め、研究的精神は學界の全般に亘り、不斷の飛躍長足の進步、精神的生活の狀態を一新せり。斯くして醞釀し來りし斯界の盛運、一朝國民の大自覺に遭ふ。華彩燦たる發展を遂けさらんと欲するも得べからさるなり。

明治思想界の、國家思想の發動によりて動されし事前後二回なり。而も第一期なるは國內に於ける歐化思想に反動して起りし者なりしが、新に起りし第二回のは國外に對して國民の存在を自覺するに起りしなり。前者は理論又は主義より

して起りしが、後者は國家の運命に關する嚴肅なる事實と國民の力量を證明せる嚴格なる實驗とよりして起りき。是に於てか從來海內に跼蹐したりし眼を轉じて廣く世界に注ぎ、世界に於ける我大日本の地位を觀察し、此國に賦與せられたる至高至大の天職を意識し初めたり。斯の自覺斯の自信は所有方面の活動を促し、思想界に空前の偉觀を與へたり。元良外山諸學者か國家的色彩を帶べる宗教上の新信仰を提出したるが如き、井上元良木村等同志の士が新神道或は日本主義を唱道し、國家至上主義現世主義を標榜したるか如き、皆此の國民的意識の發現の一端なり。されば等しく國家主義と言ふとも、二十年代の國粹主義とは大に其の面目を異にし、悉く世界的觀察より出で丶、特に飛躍せんとする國民の意氣を表示せる者なりき。

思想界の活動既に斯くの如くなれば、社會萬般の事象一として進步せさるなきは固より言ふを俟たず。況んや精神的活動の一として思想界の消息に密接なる關係を有する文藝界の現象に於てをや。且つ文藝評論の進步と共に、之が根據たるべき美學美論の發達を來し、曩に鷗外等二三の評家がハルトマン等に立脚して評論の筆を執りし頃は、文壇未た普く此智識を享受するに至らず、唯彼等評家か論爭に資するのみにて未だ一般作品に影響するに及はさりしが、二十七年の比に至りては新智識を有する作家評家相續て現れ、嚴正なる美學の規矩を應用して詩歌小說の批評を試る者漸く多く、從て作家の間に思索的傾向を生じたり。是に於てか戰勝後の文壇は著しく活氣を呈し、二十八年より二十九年に亘る斯界の盛觀は、前期二十二年より二十三年に亘る其れにも增して花々しかりき。

今や筆を新にして戰後文學の盛況を詳說せんとするに方り、前期末葉の衰へたる文壇を承けし戰爭當時の文學を一瞥するの要を見る。所謂戰時の文學は此の兩期の推移する中間に在ればなり。夫れ戰爭の文學に及ほす直接影響は由來悲觀的の者なり。されば二十四五年頃より漸次衰へ來りし創作界は茲に至りて其の衰を極め、小說界に在りては紅葉の『隣の女』『冷熱』、露伴の『有福詩人』、浪六の『安田作兵衞』、樗牛の『瀧口入道』、脚本に在りては櫻痴の『日蓮記』、等の外、見るに足るへき者殆と無かりき。之に反して戰爭を題目とせる新體詩小說脚本、及戰記書報等踵を接して起り、小說には鏡花、天外、水蔭、篁村、松葉、南翠を始め、弦齋、湖處子漣柿櫻痴等

の諸作、脚本には櫻痴の『豊島嵐』『松葉の『昇旭朝鮮太平記』等、新體詩には外山正一の『我海軍』『旅順口のヒロー可兒大尉』殘花の『亞臘高千穗』を始め、佐々木信綱、湖處子半月等の諸作、數へ來れば枚擧に暇あらず。然れども是等の文學は果して戰時の文學として誇るに足る者なりしか。あらず。當時の戰爭文學は悉く一場の際物に過ぎざりき。國民戰爭熱の昂上する所、鬱結して詩歌小說となる者なれば、描寫諷詠する所天眞流露、往々至情の聲をなす。然れども戰爭文學は固と其性質に於て優秀なる文學たり難き要素を具ふ。戰爭文學は歲時と方處とに狹隘なる制限を有する特殊差別の文學にして、彼の古今東西に通して謬らず悖らざる平等普遍の大文學に非ず。一國民一時の好尙に投するのみにて、長く其價値を保つ事難し。況んや二十七八年の戰爭文學の如き、强て時好に迎合せんとする膚淺沒趣味の者むしろ多きを占めたるをや。評壇之に命するに際物の名を以てしたるは極めて恰當の稱呼なりき。

然れども斯くの如き大戰爭の思想界に及ばす影響を考察すれば、國民の精神的活動の一時に雲蒸し來るに伴ひ、文學界の新旗幟亦動かんとするを看取すべし。

即ち思想界を通して文學界に及ぼせる戰爭の間接影響は、其の直接影響の悲觀的なるに反し甚樂觀的なり。戰後文壇の現象は、啻に特殊文學の繁榮のみに非ずして、普く諸般の文學の興隆なり。思ふに二十七年の沈衰は寂滅に近き其れに非ずして、將に大に起らんとする前の其れなりき。戰捷の報連りに至るや、膨脹的國民、世界の日本、東洋の經綸、清韓の輔導等の言辭は天啓の如く國民の胸裡に閃き、二十年この方蓄積し來りし潛勢一時に勃發して、或は大博覽會に於ける繪畫界の活動となり、繪畫協會を組織せる新進畫家の出現となり、白馬會を開ける洋畫新派の運動となり、或は彫刻鑄金の術、陶磁染織の技の進步となり、或は洋樂の振興演奏會の成功となり、更に進んで文學の興隆となりぬ。小說は一轉進をなし、新體詩戲曲は全く面目を新にし、俳句と和歌とは維新以來の舊風を打破して明治の新風を起し、紅紫燦爛無前の盛觀を呈したりき。以下次を追うて其詳細を述べん。

第二節　俳句の革新

新文學思潮の革新運動は今や本邦文壇の最短詩に及びぬ。新思潮の赴く所、あ

らゆる、舊文學を革新せすんば止まず。既に小說を一新し、新體詩を起し、戯曲の面目を改め、今や進んで舊俳諧と舊和歌とを打破せんと試み初めぬ。就中俳壇の運動特に目覺しく、一時文學界を聳動したりき。

然れども斯界の革新は洵に後れたり。小說新體詩等は十年以前既に革新の緒に就きしに係らず、俳諧に在りては今日始めて其の氣運に向へるなり。其の根本に於て相一致する二者の運動が、其發現の年代を異にする事十年に及べるは何の故ぞや。之を解かんには、革新の原動力たる新文學思潮其の物の性質と俳諧其物の特性とを檢せさるへからす。

思ふに新思潮の根本は明に泰西の文學思潮、否寧ろ泰西文學其の物に在り。革新の運動に與りし詩人文士は一として泰西の文學を味はさるなく、其の創作せる文學は一として泰西文學玩味の餘に出てさるなし。故に本邦文學の中、先づ革新の鋭鋒にかけられたる者は、模範の泰西に存する者、即ち我邦と泰西とに共存する種類なりき。逍遙四迷か小說に目を注げる、演劇改良の主張者が脚本に手を下せる、外山丶山等が新體詩を起して從來の和歌に代へんとしたる、何れか泰西の粉本に其の革新思想の萠芽を養はれしに非ざる。是を以て俳句の如き、泰西諸國に其の類例を見るへからさる一種の短詩は、範を取るへき者固より存せす、西洋審美學の尺度も之に適用すへき方法を解せられさりしかは、革新家の勢力範圍外として長く取り殘され或は短小取るに足らすとして一概に斥けられたり。

而已ならず、俳句其物の性質にも亦彼等革新家の手を下すへからさる者あり。蓋し俳句は世界に於ける最小の詩形にして、其の含める意義と其の現す趣味とは全く特異の者なり。勿論用語は平易なり。吟咏の對象は卑近なり。平民文學の名洵に空しからすと雖、滔々たる非文學的駄俳句を棄てゝ、眞に文學の稱を價すへき佳作を取れは、十七音の小篇よく深大の意義を湛へて、間々寸鐵人の詩想を穿つ者あり。且其の着想に於て、詩材の配合に於て、詩想表示の方法に於て、はた語格修辭に於て、他の諸種文學に決して見るべからさる一種の特徴あり。殊に其の全體に磅礴する趣味は俳句獨得の者にして門外漢の易く窺ふべきに非ず。蕉門の寂栞の如きは其の一例たるべく、此の傾向一歩を進むれは一種宗敎的の色彩を帶び俳道に遊ぶ者は此の趣味の門に入るによりて一種解脫の境に至るを得べし。此

らゆる、舊文學を革新せずんば止まず。既に小説を一新し、新體詩を起し、戯曲の面目を改め、今や進んで舊俳諧と舊和歌とを打破せんと試み初めぬ。就中俳壇の運動特に目覺しく、一時文學界を聳動したりき。

然れども斯界の革新は洵に後れたり。小説新體詩等は十年以前既に革新の緒に就きしに係らず、俳諧に在りては今日始めて其の氣運に向へるなり。其の根本に於て相一致する二者の運動が、其發現の年代を異にする事十年に及べるは何の故ぞや。之を解かんには、革新の原動力たる新文學思潮其の物の性質と俳諧其物の特性とを檢せさるへからず。

思ふに新思潮の根本は明に泰西の文學思潮、否寧ろ泰西文學其の物に在り。革新の運動に與りし詩人文士は一として泰西の文學を味はさるなく、其の創作せる文學は一として泰西文學玩味の餘に出てさるなし。故に本邦文學の中、先づ革新の鋭鋒にかけられたる者は、模範の泰西に存する者、即ち我邦と泰西とに共存する種類なりき。逍遙四迷か小説に目を注げる、演劇改良の主張者が脚本に手を下せる、外山ゝ山等が新體詩を起して從來の和歌に代へんとしたる、何れか泰西の粉本に其の革新思想の萠芽を養はれしに非ざる。是を以て俳句の如き、泰西諸國に其の類例を見るへからさる一種の短詩は、範を取るへき者固より存せず、西洋審美學の尺度も之に適用すへき方法を解せられさりしがは、革新家の勢力範圍外として長く取り殘され或は短小取るに足らすとして一概に斥けられたり。

而已ならす、俳句其物の性質にも亦彼等革新家の手を下すへからさる者あり。蓋し俳句は世界に於ける最小の詩形にして、其の含める意義と其の現す趣味とは全く特異の者なり。勿論用語は平易なり。吟詠の對象は卑近なり。平民文學の名洵に空しからすと雖、滔々たる非文學的駄俳句を棄てゝ、眞に文學の稱を價すへき佳作を取れは、十七音の小篇よく深大の意義を湛へて、間々寸鐵人の詩想を穿つ者あり。且其の着想に於て、詩材の配合に於て、詩想表示の方法に於て、はた語格修辭に於て、他の諸種文學に決して見るべからさる一種の特徴あり。殊に其の全體に磅礴する趣味は俳句獨得の者にして門外漢の易く窺ふべきに非す。蕉門の寂。栞。の如きは其の一例たるべく、此の傾向一歩を進むれは一種宗教的の色彩を帶び俳道に遊ぶ者は此の趣味の門に入るによりて一種解脱の境に至るを得べし。此

の點に於ては泰西の如何なる文學も之に比ふべき者あらず。又泰西の如何なる詩人評家も之か詩想と趣味とを正當に解する事難し。故に輓近本邦の短詩を味うて之を評出する泰西詩文の士少からずと雖、手を俳句に下せる者に至りては失敗せさる者稀なり。或は句を解して意を誤り、或は意を解して趣を失ふ。思ふに俳句の趣味は恰も禪宗の如く、又文人畫の如く、純東洋的にして、西洋美學の則を以て律すへからさる一種の東洋詩美なり。啻に西人のみならず、本邦文藝の士と雖或は鑑識を謬り或は謎語として之を斥く。されば明治二十年頃の革新家が遂に指を此の方面に染むるに至らさりしは、其の思想の泰西より得たりしよりすれば寧ろ當然なりといふべきか。

然らは舊俳の内部より之か革新を計る者あらざりしが。從等宗匠商賈の門流にも亦二三新智識を有する者なきに非ずと雖、一度其の門に入るや、依然舊俳の渦中に陷り、遂には啓純然たる宗匠商賈の繼承者となりにき。故に當時の俳句は依然第一章に述べたる狀態に在り、永機幹雄等所謂宗匠商賈の輩、徒に正風の虛名を呼號して祖翁の精神蕩然と空しく、穿ちを求めて理窟に陷り風情を求めて晦澁に流れ、要するに詩の何たるを知らず、詩境と非詩境の別を悟らす。相率ゐて非文學の畛域に赴けり。而も其の流を追うて俗俳を弄ぶ者、三都を始め諸國に滿ち、宗匠の門に集りて社中を成し、月に幾卷の集を作り、發句聯句に點を乞ひ、謝禮馳走をなし、又花景物を置き、圍棋雙六と同樣なる消閑の遊藝となす者、所として存せさるなし。俳諧の墮落殆と極れり。『俳諧古選』總論に「作者年々に多く風格日々に乖き門戶競ひ開けて多岐羊を失す、所謂盛極つて衰兆す」といへるは、明和以前の俳壇を評せし言葉なから、移して以て明治の舊俳を評すべし。

俳諧の革新は二十年頃の文學革新家に望むべからさると共に、到底舊俳の門に望むべからず。斯界若し革新すべくんば之を別種の新人物に望まさるべからず。果然革新の曉鐘は、夙に泰西文學思潮に浴し、而も自國文學を研鑽して俳諧固有の趣味を解し、且つ舊俳以外に立ちて其の門に入らさりし新俳人によりて撞き出されたり。正岡子規尾崎紅葉の徒即ち之か巨擘なり。

既に述べし如く、俳諧革新の標準は之を泰西に求むべからず、而も一代俳諧の墮落救ふべからざる者ありしとすれば、新俳人の取るへき道、唯標準を過去に求め現

代非文學的傾向を打破して之を文學の地位に進むるに在るのみ。されば當時舊俳の門を避けて新風を起さんとし、或は文學として價値ある俳諧を創めんとせる新作家は、期せずして古人の作に就き、其批判の標準など、從來俗俳の徒が稱ふる僻說的の其れを取らず、自己の新見識を以て之か妍醜を分ち、新に妙句名吟を其の間に求めて之を研究の材、創作の師となせり。或は談林を採り、或は蕉風を採り、或は蕪翁を取り、其宗とする所にこそ差あれ、天保以後の俗俳を斥けて天明以前の古俳に活眼を開きしは蓋し一なり。

古俳復活の先鋒たる子規と紅葉とは、其の年齢を同くし、其の學校を同くし、共に大學國文科に入り、共に半途退學し、而も等しく俳諧に指を染めたり。且つ子規か其の著『獺祭書屋俳句帖抄』に言ふ所によれば、彼か俳事を始めたるは十八年の頃なるが如く、硯友社員の紅葉追憶談によれば、彼の俳諧も亦子規と同年『我樂多文庫』と共に始まりしか如く、而も二者共に、舊俳と何等門流の關係なくして直に古俳の趣致を得んとしたりき。然れども二人相互の間には何等の交通なくして各獨立の發展をなし、其俳に入るの動機と師宗とする作家とを異にす。『俳句帖抄』に

依れば、子規が身を俳句に投するに至りしは全く『俳句分類』の編纂に因す。曰く『俳句分類』の研究が昔の連歌時代より始つて、貞德派の無趣味なる滑稽時代を過き、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を見とめながら、猶五里霧中に迷うて居る有樣であつたが、春の日荒野などゝ漸く佳境に入り始めて、猿蓑を繙いた時には一句々々皆面白いやうに思はれたこれが俳句に於ける進歩の第一歩であつた」と。時に二十四年なり。知るべし、子規の俳に入りしは古俳句の歷史的研究に基し、其の宗とせし所は『猿蓑』を中心とする蕉風の一派に在るを。紅葉は即ち之に異なり、其の俳句は素と文才の餘技にして、狂句川柳に近き諧謔の調を弄するに止りしが、既にして小說に於ける西鶴崇拜は延て俳諧に及び、遂には西鶴の屬する梅翁一派を宗として之に趣き、未だ『猿蓑』以下には及ばざりき。時正に二十二年なり。知るべし、紅葉の俳諧は西鶴摸倣に始り、宗とする所は談林の一派に在るを。斯くて同時に起りし二作家、一は直に談林に復歸し、他は一歩進んで蕉風に適從しぬ。

爾來紅葉は硯友社一派を率ゐて紫吟社を結び、子規は所謂日本派を率ゐて新聞『日本』に據り、兩々步武を進めて流風世に布けり。此の間紅葉は談林の奇調より

尾崎紅葉

漸く平淡の調に入り、子規は元祿より一進して天明の俳風を追ひ、以て二十八年の盛時に及べり。兩派の趣く所同じからすと雖、之を復興俳諧といふ大旆の下に一括圖と見るを得べくんば、吾等は江戸時代文學史に於ける梅翁以來蕪村に至る前後百年間の俳諧史がさながら最近五六年の間に縮寫せられたるを覺ゆるなり。されば兩派時を同うして立てりと雖、之を歴史的發達の跡に見ば、紅葉派は即ち俳諧復興の先驅にして、子規派は即ち之か主力なりといふべし。

紅葉か俳諧は詼謔の奇調を以て始り、小波(漣山人)思案、眉山、水蔭等紫吟社の一派頻りに談林風又は虚栗集風の發句を吐きぬ。一時恰も小説勃興の機運に際會し、硯友社の聲望江湖に布ける折なりしかば、其俳風も亦青年文客を動かして一時の流行を作りぬ。舊派は驚いて之を排斥し、書生俳諧と冷罵しぬ。既にして文學の進運小説をして戲作の境を脱せしめ、紅葉か作風亦滑稽詼謔の戲作者風を擺脱するに及んで、其の俳諧もおのつから格餘の戲筆たる境界より出でゝ、眞面目の文學的作品に入り、華麗より一轉して平淡に移り、想も調も漸く談林を離れぬ。時に二十七八年の交なり。然れども新に起せる俳調は談林の其れの如く青年俳客を動かすに足らざりき。凝り性なる江戸氣質に洒脱を求むる餘り、平淡益々平淡となりて遂に主觀的醇化の極に達し、從て其の趣味著しく個人的となりしかば、文壇多數に容れられて一世の流行をなすべき性質を失ひ了んぬ。蓋し紅葉か俳諧は決して明治文壇を飾るに足るべき者に非ず。之を創作せし事實は決して文學者としての彼の價値を增す所以に非ず。彼が『太陽』『秋の聲』等の雜誌、及『煙霞療養』と題する紀行文の中に收めたる吟什の如きは、決して小説の手を停めて之に從事すべき程の者に非さるなり。

紅葉に次きてこの紫吟社中の作家を大江小波即漣山人となす。紅葉門下には鏡花風葉最優る。此派作家の特徵を擧れは、趣向に時間と事件とを含める小説的の者を喜ひ、多少複雜なる人事を取らんとする傾向ありといふべし。

正岡子規

俳壇革新の先驅たりし談林復興の一派は、普遍的傳播をなすに至らずして其の勢力を失ひしに際し、蕉風復活の子規一派、革新の主力として文壇に現れたり。正岡子規は伊豫松山の人、若うして東都に遊學し、高等中學に在る頃恰も紅葉か同窓の人々と文社を結びしが如く、同鄉の內藤鳴雪、竹村黄塔、五百木瓢亭、新海非風、藤野

古白等と文會を組み文集を編めり。二十四年大學國文科に在り、始めて俳句分類に志し、古來の俳諧を歷史的に研究して元祿の絕調に及び、茲に斯道に於ける活眼を開きて爾來一身を俳事に委ねたり。翌年の初「燈火十二ヶ月」「男女句合十二ヶ月」を始め連りに一題十二ヶ月の俳句を作りしは即ち此の時頃の事にて、調未だ整はず、句尙幼しと雖、縱橫の俳才爵勃の活氣おのづから其の裡に現はる。同年又俳論を『日本』に投じ、遂に大學の業を抛つて日本新聞社に入り文苑の一隅に俳欄を設けて同人の句を載するに至りしかば、新聲始めて斯壇に上りぬ。爾來東西に旅して句作に耽り遂に『猿蓑』に私淑して俳句の寂を悟り、蕉翁か自然觀察に眼を開きて古池の吟を得たりし如く、客觀叙景の一門を立て丶、俳句の領域を擴張したりき。『はて知らずの記』『高尾紀行』等に出てたる者は即ち當時の作句にして、以て彼の格調を窺ふべし。

斯る格調は當代の俳壇に見るべからさりき。舊俳の俗調は勿論、談林復興の一派と雖、此の淸新に遵ひては一瞬を輸せさるを得ず。而して子規と步調を一にせる者には前記鳴雪瓢亭等あり、之に加はりし者には佐藤肋骨藤井紫影伊藤松宇等あり、來り學べる者には高濱虛子、河東碧梧桐、佐藤紅綠等ありて、新俳風漸く起り、二十七年『小日本』を發刊して句を江湖に募るや、應募者連りに出で、勢力愈張る。加之一方にては子規俳話俳論を公にして益此の運動を進めたり。されば今、新派の句品を詳論するに先ち、暫く子規が俳論の主旨を畧述せん。

「芭蕉雜談」

嚢に硯友社の俳家は非文學の極に達せる當代俗俳を斥けて談林を取りしが、子規は談林の格調思想を以て尙非文學的なりとなし、『虛栗集』を以て尙幼稚なりとなし、『曠野』『猿蓑』に至りて始めて文學として推稱すへき俳諧を認めたり。彼の俳話は此の論を以て始まり、爾來論述する所少からず。就中新思想宣傳の上に最力ありしは即ち二十六年に出てたる『芭蕉雜談』を以て始となす。こは實に明治新思潮を以て俳諧を論じたる嚆矢といふべく、芭蕉を藉り來りて宗匠者流の沒詩眼を指摘し、進んで新詩眼の標準を示しゝ者なり。曰く、芭蕉の人格は偉大なり。五十年の短生涯能く一代の崇拜を博して俳道の宗と仰がれ、恰も宗教の祖師の如く後世に神視せられたり。然れども人格の偉大は直に文學者としての偉大を證する料とはならず。彼の俳諧を以て完全無缺超批評の靈物となしゝは即ち憐むべ

き舊俳者流の無識に出づと。乃ち斷案を下して曰く、彼か俳句一千餘首、過半は惡句駄句にして、古來整句として傳へたるか中にも、宗匠者流が金科玉條とせる「古池や」「道のべの」「枯枝に」等は一として凡句惡句ならさるはなし。彼等が此等の句を尊ぶは批評眼の明なるありてするに非ず、唯文學上何等の價値なき傳說によりて之を神視するのみと。該句を擧けて縱横に批判し、以て二百年來の盲目的信仰を破りぬ。次に新に芭蕉の眞價を闡明せんとし、新審美見を以て集中の名句を精査し、芭蕉の芭蕉たる所以を發揮せり。曰く、本邦詩歌に雄渾豪宕の致を缺けるや久し。此の間に介し、獨り豪壯の氣を藏め雄渾の筆を揮ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を敍し、直に萬葉を追ひ實朝に及かんとせる者は即ち芭蕉なり。試に「夏草」「最上川」「荒海」「大井川」「野分」等の諸吟を見るに、老健雄邁殆と空前絶後なり。而も彼の技倆は之に止まらず、或は自然なる、或は纖巧なる、或は華麗或は幽玄、其他奇抜滑稽蘊雅、行く所として可ならさるなく、格調亦必しも一格に拘せず、凡百の姿態皆く包容して滯るなし。芭蕉の偉大なる所は即ち爰に存すと。是れ子規の芭蕉論の概略なり。

芭蕉論は當時に在りては實に空谷の跫音破天荒の論評なりき。其の直接の目的は千載誤られたる芭蕉の眞價を發揮するに在りきと雖、其の結果は舊俳折伏と新俳顯揚との二者となりて現れたり。勿論子規の說多く獨斷に傾き、且つ連俳の第一句たる發句を評するに獨立せる一個の文學に對する標準を以てし、而も其の批評は彼自らの趣味見識に依據して疑はさる嫌ありと雖、彼の趣味は明治の新趣味に養はれ、彼の見識は明治新思潮に養はれたる者なり。『芭蕉雜談』一篇小なりと雖、俳壇革新の曉鐘として長へに耳傾けらるべし。此點に於て之か俳史に於ける地位は『小說神髓』の小說史に於けるに似たり。子規か宗匠者流の神聖視せる幽玄主義寂栞主義を打破して新蕉風を發揚せし態度は、即ち逍遙か馬琴一流の勸懲主義を排斥して心理主義を鼓吹せし態度なりき。『雜談』及其他の俳論を收めたる『獺祭書屋俳話』一部永く明治文壇の珍たるべし。

子規の古俳研究は歩を進めて安永天明の中興俳傑に及び、『猿蓑』の高古を喜んで他を知らさりし彼は、是に於てか蕪村等豐麗の趣味を解するに至りぬ。二十七年より翌年に亘る彼が俳論と創作とは、即ち此の間遷移の消息を表す者にして、作

句に著しく妖艶雄健等積極的趣味を帶び來れり。當時蕪村の俳壇に於ける價値未た世に知られず、畫人の名のみ獨り高うして其の句集の如き殆ど坊間に存せざりしが、子規等類題集中蕪村の句の散在せるを見て其の異彩に驚き、乃ち故紙堆裡に一寫本を搜索し得て始めて其の全豹を窺ひ、之を研究する益深うして之を評價する益高く、遂に漢語を含める一種詰屈の異調はいたく『日本』の俳句に影響を與へたり此變遷は子規一人に止まらず、延ては普く彼の一派に及び、『小日本』の募集に應する者、『小日本』廢刊して『日本』の俳欄に投稿する者、亦悉く之に倣ひ、相率ゐて夜半亭の格調を追へり。此時に方りて、斯派の俳風天下に布き、新思潮に養はれたる靑年競うて子規の麾下に趨りぬ。世稱して日本派と言ふ。『日本』に據りて立てるを以てなり。

日本派俳句の内容は爾來、又多少の變遷をなしたりき。『俳句帖抄』に依れば、子規か蕪村の眞相を解して眞の蕪村調を創り出てしは、二十九年『新花摘』を讀めるよりなりきと。然り、子規を始め日本派一羣は、蕪村に得る所多かり。然れども、思想と聲調と、必しも蕪村の模倣に終らず。思想に明治の特色を帶び、聲調に長短拘

河東碧梧桐
高濱虛子

る所なき異格を加ふ。此傾向の極端に發達して宛然當時の風潮を代表する者を虛子碧梧桐の二人となす。二人は鄕貫を同うし、修學の徑路を同うし、俳句に入りて其步武を一にし、各特色ある思想聲調を以て斯壇の急先鋒となりにき。思ふに碧梧桐は冷靜に事物を觀察し、虛子は熱情を以て事物に同感す。從て前者は客觀に傾き後者は主觀に傾き、一は寫實的、他は理想的なり。碧梧桐は寫實に傾くを以て常に印象の明瞭ならん事を求む。十七字の短詩形の中に印象の明瞭なる詩想を盛らんとするか故に、其の描寫の對象は範圍極めて小なり。虛子は然らず。彼は理想に傾くを以て或は主觀を詠じ、或は複雜なる人事時間を含める事物を描く故に彼の句は印象の明瞭碧梧桐に及はすと雖、餘韻あり、時間の延長あり、間々大景畫を描かんと試みぬ。

斯くの如きは子規か認めて以て古人以外の新調となし、蕪村に出でゝ一歩を進めたりとなしゝ者なり。蓋し二人の爲せし所、悉く粉本を蕪村に求むべく、蕪村の企畫を紹ぎ來りて之を極度に發展せしめたるなりき。而して此事實は思想よりも意匠よりも、句法聲調に於て一層甚しきを見る。彼等は先づ五七五の格を破り

内藤鳴雪

十九字二十一字の句を敢てし、漢語漢文の句法を用ゐ、虚字を省きて實字を充てたり。且つ句切れに於て從來見るへからさる新工夫あり。極端に走るや、虚栗集にも求むへからざる奔放自在の異調を取り、一時評壇の物議を招けり。斯る詰屈の調破壊の調は、動もすれは韻文の美を失うて散漫無味の語句とならんとす。要するに永續すべからざる一時の變象なり。

是等の點に於て鳴雪の俳風は虚碧二人と反對に立てり。鳴雪は弱冠の青年のみなる日本派に於ける唯一の老俳人にして、子規に次て該派の有力者たり。彼は思想に於ては純客觀の事物にして餘韻の長きを喜び、形式に於ては五七五の正調を固守して虚碧の變調を斥く。彼は又、用語は雅言を好みて虚碧の漢語を取らず。詩材は過去社會の事物を用ゐ、總て優美典麗若くは幽寂清雅の趣を愛す。

其他當時日本派に重きをなしゝ者には、東京に佐藤紅綠石井露月あり。伊豫に村上霽月柳原極堂あり。熊本に夏目漱石あり。就中、紅綠は碧梧桐に似て、而も變化の才あり、露月は漢語調を好む事虚碧に同じくして而も藻思多面なり。霽月夙に蕪村調の眞を得、極堂は巧緻清新の作をものし、漱石は嶄新警拔の句を吐く。共に一方の雄なり。以下、下村牛伴福田把栗坂本四方太等數ふるに暇あらず。

秋聲會

筑波會

此時に方りて俳運大に起り、舊俳家角田竹冷は戸川殘花と共に秋聲會を起し(二十八年)紫吟社雪人派を包容して新俳の一部と舊俳の一角との大連合を企て、雜誌『俳諧秋の聲』を刊して之か機關となし、帝國文學會の佐々醒雪大野酒竹等、筑波會を立てゝ(二十九年)作句を『帝國文學』に掲けたり。筑波會の俳人は論評の精透なるに比して作句未だ熟せず。秋聲會は數十の會員を擁し、新舊調和の標榜を掲けたれども新派の粹と舊派の粹とを招致する事能はずして、唯準新派準舊派の多少趣味を同うする者のみを集むるに止まりぬ。何れにしても俳社俳人の增加夥しく、俳書俳誌の發刊亦盛に、新聞雜誌は競うて俳句を載せたり。當時都下新聞十六種の中之を載せさる者六種に過ぎず、雜誌にては苟も文學にたつさはる者一として之を收錄せざるなし。

然れとも日本派以外の俳人俳社は、其の活動常に受動的に出づ。彼等は日本派が一切の異趣味一切の異色を拒否して只管自派擁護に勉むる反撥的排他的態度に、其競爭心を激發せられて是に至りしのみ。故に其の活動や概ね末頼もしから

『ほとゝぎす』『新俳句』

す。加ふるに彼等が俳句研究に於ける熱心は到底日本派に及はす。彼等が俳句を作るは閑人の閑事業の如く、日本派の之に於ける、純然たる文學者の態度を以てし、研鑽推護至らざる所なし。是を以て二者が斯壇に於ける進歩は頃刻にして著しく懸絶し、日本派獨り其の進歩を續けたり。三十年に入りては紫吟社振はず、雪人派潜み、秋聲會亦衰へて『秋の聲』も倒れたり。之に反して日本派の傳播、各地方に亘り、極堂松山に俳誌『ほとゝぎす』を發刊し、爾來俳會の起る者各地相次ぎ、根岸子規庵の會衆益多きを加へ、翌年遂に一派の選集『新俳句』を刊行し、次で『ほとゝぎす』を東京に移して虚子之に當るに至り、斯派の勢力牢として抜くべからざるに至りぬ。

斯る間に日本派の俳句は内容に於ても少からざる進歩をなし、二十九年に於ける變調漸く捨てられて平正の常調に復し、奇想を弄する事少くして着眼を平淡の境に求め、絢爛の趣致漸く減じて淡泊の情趣加はらんとす。而して蕪村の研究益々歩武を進め、子規は「俳人蕪村」を『日本』に連載して縦横剖拆、所論精緻、俳人としての蕪村を天下に紹介し、更に鳴雪等と『蕪村句集』を研鑽講評して之を『ほとゝぎす』に連載したりき。是に於てか斯派俳句の趣致傾向格調句法乃至文學上の地位、社會の批判、大體に一定の境に達し、俳壇の優者として一般に認めらるゝに至れり。故に吾人は『新俳句』の刊行『ほとゝぎす』の東遷を以て、俳句革新の事業の略完成せる時期と見做し、乃ち筆を三十一年以後に進むるを停め、顧て明治俳句の高潮たる日本派の作を撿し、古人以外明治の特色の如何なる者を含めるかを究めんとす。

三十二年の初、子規『ほとゝぎす』に論じて曰く、文明が簡單より複雜に、粗大より精緻に、散漫より緊密に趣くと共に、美術も亦同一の傾向を取りて進み、俳句亦從て此の迹を追ふ。多樣と變化とは進歩の階段なり。明治俳句の進歩も亦此の中に攝せらる。明治俳句に古人以外の特色ありとすれば、其は即ち古人より一層複雜精緻緊密なるに在り。元祿は天明に進めり。天明は更に進みて明治となる。新興の特色は常に純粹なる新分子を含む所に存せずして概ね複雜精緻緊密の度を増す所に在り。碧梧桐の「强力の清水濁して去りにけり」は蕪村の「二人して掬べは濁る清水かな」に比し、虚子の「繪踏して生殘りたる女かな」は蕪村の「御手討の夫婦なりしを更衣」に比して一層時間的複雜を加へ、印象の明瞭ならん事を勉めたる碧梧

桐等の句は概ね描寫の精緻を見るべく、一句充實勉めて冗漫の嫌なからん事を期せる虛子等の句は句調の緊密遠く古人の外に出でたり。若し夫れ明治俳句の新趣味に至りては、當時洋畫界及小說界にも現はれし如く、濃厚に非ず高遠に非ず、むしろ淡泊平易、元祿天明に發達するを得ざりし一種の新俳味なり。此の俳味や實に三十年以後の發達に屬し、虛子の「宿借さぬ蠶の村や行き過ぎし」の句に見ゆる如く、蕪村の「牡丹ある寺行き過ぎし恨かな」と恨を言ひ出でしに似ず、又「宿借さぬ火影や雪の家續き」とて其の光景を辯りしに異なり、唯前村後村の間中途に在りて步むを言ふのみ。此の間の趣味は新俳人にして始めて味ふを得べし。明治俳句に於ける古人以外の特色は蓋し之に盡く。是に於てか明治俳界の進步の小說界の其れに比して著しく遜色あるを覺ゆ。元祿化政の小說と明治の小說との間に存する如き鴻溝は遂に之を安永天明の俳句と明治の俳句との間に見る事能はざるなり。

俳句革新の運動は一段落を告げぬ。乃ち顧て其の主唱者たる子規に就て再說する所あらしめよ。子規既に蕪村調に入りしより其の作句絢爛の域を過ぎて平淡の境に入り、彼の所謂新趣味は最早く彼其人の句に現れたり。『俳句帖抄』に曰く、『新花摘』を讀むに、蕪村の頭を悩まして修正したる句は概ね好句ならず。又自慢の意を洩せる句も餘り好き句に非ず。最感服する句は多く一題七八句の中に在る極めて無雜作に成りきと思はるゝ句なり。蕪村の大才を以て尙且かくの如くなるを見て俳句の如何なる者なるかを始めて悟りぬと。子規の句か平易淡泊の趣を得たりしは、蓋し之より後なりしならん。「大爪に近よる蕊もなかりけり」「夏川や中流にして顧る」『椎の木を切り倒しけり秋の空』「夕烏一羽後れてしぐれけり」「水の仙の莟に星の露を孕む」などの如きは此の期に屬するものか。然れとも子規の俳才は一格に拘泥するか如き小なる者に非ず。一派の俳人、虛碧を始め、一として一時の俳調に走らさるなき中に立ちて總ての格調を容れて餘裕綽々、常に進步の先登に立ちて一派を指導したるは即ち子規なりき。彼は多樣の變化を一身に集め思想聲調行く所として可ならさるなし。二十六年『日本』に揭けし「古人調十二ヶ月」及二十九年同紙に出しゝ「俳句二十四體」の如き子規自身も其の杜撰なるを言へりと雖、とにかく變化の才を見るべし。思ふに多數を率ゐて一派の指導者たらん者

は常に此種の才なかるべからず。而も其の蕪村に悟入するに方つてや、變化の裡おのづから子規獨得の俳風を生じ、遂に獨立して其の新趣味を宣傳するに至れり。而して彼の俳才は啻に俳句に止まらず、聯句にも現はれ、夙く二十五年以來時々試みし者少からず。然れども是れ固と彼の餘技、深く究むるの要なし。

子規は又小說に指を染め、夙に「月の都」を草して『小日本』に掲げ、三十年又新小說に「花枕」を出し、又新體詩を試み、二十九年以來『日本人』『ほとゝぎす』等に載せたり。然れども是亦格餘のすさび、鬱勃たる詩想の十七字詩の中に收むべからざる者あるに方りて是等大詩形を試みしに過ぎず。唯短歌に至りては、三十一年『日本』紙上之が革新に着手せし者にて子規に取りて甚異面目の事業なれば、重ねて後節に說くべし。

文學者としての子規はかくの如く多方面なり。而も其の事業の最赫灼なるは言ふまでもなく俳句復興の一事に在り。彼は俳句を墮落の深淵に救うで文學の境域に引き上げたり。詩歌の何たるを解せざる非文學者の翫に弄はれし俳句をして學識ある文學者、趣味卓越なる詩人の手に移らしめたり。此の點に於て彼の事業は頗る小說界に於ける逍遙紅葉等の事業に似たり。若し古今俳史の上に其の儔を求むべくんば蓋し蕪村か。蕉翁後百年にして其の遺業を起しゝ者は蕪村にて、蕪村以後百年にして俳句を暗黑の中に救ひし者は即ち子規なり。然れども一派の俳人を率ゐ、一流の俳風を以て世を動かしゝを以てすれば、孤獨なる蕪村の如きに比すべきに非ずして、むしろ蕉翁其人に比すべし。其の俳才の大なる其の俳徒の普遍なる、はた多數の子弟をして各其の才を盡さしめたる、略其の面目を移せり。加ふるに子規が梅室蒼虬等俗俳の勢力を排斥して審美眼を發句の上に開きしは、頗る芭蕉が貞門檀林の勢力を打破して自然美の上に活眼を開きしに相似たり。然れども是は俳史上の位置、俳人としての彼等を比較せしのみ。其の性格に於ては必しも相同じからず。子規は熱烈の人なり。俳壇の革新に着手して以來之を畢生の事業として身命を献じて悔いず。斯壇擁護の爲には如何なる外敵も排擊殲滅せずんば已まず。常に陣頭に立ちて一派の爲に長城となれり。師弟の道全く其の面目を改めたる今日に方り。文壇稀有の佳話を殘せる者、主として彼の性格に出づ。此の點に於て蕉翁の稍閑寂冷靜なると趣を異にす。子規の句集

「俳句帖抄」

は『俳句帖抄』と題し、三十五年に至りて上卷を公にせり。二十五年より二十九年までの作を收む。不幸續卷を公にするに至らずして止みにき。

第三節　和歌の革新

歌壇革新の思潮は夙く國學復興の際に萠し、國文敎育家落合直文等の運動に其の泉源を有す。彼は二十五年淺香社を結びて文章和歌及新體詩を研究し、門下数を受くる者少からさりしが、特に盛なるは即ち和歌の研究なりき。然れとも彼の歌は固と御歌所一派の孱弱に反抗し、桂園末流の卑俗を排斥して起りし者にて、即ち純乎たる復古なり。勿論彼の創作は必しも議論に伴はす、歌格常に古調たるを得ざりきと雖、とにかく純日本想を以て古歌の粹を明治聖代に發揮せんと志したりき。彼は猶紅葉の元祿小説に於けるか如く、子規の元祿俳句に於けるか如く、近代俗惡の文學を捨てゝ直に古文學の靈泉に汲まんとする者、門流を率ゐて能く後進を導きたるも亦二家と蹟を同うす。而も復興の文學は常に多少の新氷あり。淺香社の和歌亦然らさるへからす。假令秡の家其人は泰西の詩美思想に緣遠き人なりとするも、新思潮の文學界に於ける勢力至らぬ隈もなく、四圍の物象皆新詩美思想によりて進める今日に方り、國外等『柵草紙』の徒と交り、紅葉子規等の目覺しき革新運動を目にするに及んでは、彼か和歌に對する態度も亦漸く變せさるへからす。彼か門下を敎ふるに和歌は時代の進遷に伴ふべしとの主義を以てするに至りしは即ち此時に在り。

當時歌壇を支配せる潮流は言ふまでもなく舊派の其れなりき。俳壇の宗匠か天下に遍きか如く、歌の師匠も亦津々浦々到る所に存し、詩歌の何たるを知らず、詩美の何たるを解せず漫然「心に思ふ事を見る物聞く物につけ言ひ出せる」者即ち和歌なりと考ふる固陋無識の徒が、恣りに子弟を取り詠草を集め、膊を收めて點を加へ其の俗了せる事、點取俳諧者流と擇ふ所なかりき。是を以て所謂歌人なる者多士儕々として其多きに堪へず。廟堂の有司亦多く歌人なり。所有國學者は即ち歌人なり。所有公卿は悉く歌人なり。而して皆流を競ひ派を立て或は會を組み社を結び、各類を以て集り、門を開きて風を布く。當時斯界の中心たる御歌所には、高崎正風、小出粲、植松有經大口鯛二等あり、其他鈴木重嶺、阪正臣、黑川眞賴稅所、敦子、本居豐

海上胤平

纈等、或は某園或は何酒舍と稱する者頗る多かりき。然れども彼等は、其流派の如何に係らず、畢竟桂園の末輩に非されば則ち四大人の糟粕に止り、想形共に陳套相襲ひ、千年の舊型を墨守して詩歌に對する根本的誤謬を悟らず、歌詞を制し、嫌忌を定め、範裡に籠居して井蛙の見を固持したりき。獨り海上胤平の和歌は一種の異彩を此間に放ち、其の萬葉集模倣の作、頗る豪健の趣を帶べり。然れども彼の議論と製作とは萬葉集の外に一歩も出づる能はず唯加茂眞淵が百年以前になしたりし懿歎を再せしに過ぎずして、其製作の如きも固より橘曙覽に比ぶべくもあらさりき。特に詩歌に對する根本思想に至りては依然傳來の誤謬を繼承し、從て當代歌壇に何等の事蹟を殘さゝりき。

新思潮を餘所に見て、歌界の狀態が今日に至るまで其の舊樣を存する事斯くの如くなりしは何故ぞ。和歌革新の獨り大に後れたりしは何故ぞ。思ふに和歌は三千年の傳統を有する本邦最古の文學にして、前代以來小說以下の平民文學に對し、貴族文學堂上文學として立ち、因習の久しき、革新を以て破壞と考ふる傾あり、新思潮の奔流も之に加ふるに由なかりき。否、之に加ふる能はさりしに非ず、革新の手を下す價値なしとて之を拋棄せるなりき。蓋し新體詩の創始者は其精神に於ては即ち和歌の革新家なり。彼等は泰西詩歌の精神を本邦詩歌に加へんとするに方り、和歌なる者の到底複雜清新なる新詩想を容るゝ能はさるを知り、乃ち去つて新體詩を起しゝなり。故に斯道の先覺は夙く十年前に存し、詩歌に對する觀念の更新も亦既に成就せられたりき。然れども之を和歌其物に及ぼし、短詩としての發達を促しゝ者未だ之あらず。即ち和歌は長く新思潮に見捨てられたるなりき。さばれ御歌所一派の歌は依然斯壇の牛耳を取り『國光』『明治會叢誌』等保守的國家的主義の雜誌に其吟咏を載せ、堂上的の和歌尚跋扈せり。淺香社は實に斯る時に現はれたるなり。

落合萩家

淺香社は歌壇革新の先驅をなせり。萩の家の歌を敎ふるや舊型に依らず、舊樣を追はず、歌題の如きも新を取り陳を避け、其の新しきも唯大體の着想の方向を示すのみにて、極めて自由なる態度を取り、學弟をして各其の才を盡さしむ。『萩の家遺稿』收むる所の日課歌題を見るに從來月並的の題とはいたく趣を異にし着眼嶄新にして題目奇拔、材料豐富にして吟咏の對境甚しく廣濶となれり。是を以て創

作も亦たのづから舊套を脱して清新掬すへき者少からす。而も彼れの和歌に對する愛慕は無限にして、其の熱心や殆と献身的なり。我歌をあはれと思ふ人ひとり見出てゝ後に死なんとぞ思ふと述べしは實に彼が素懐なるべし。彼は猶紅葉子規等の如く、自己の文學を以て其の生命となしたりしなり。彼か斯界革新の先驅となり、其の事業を果すべき幾多青年の歌人を養成し得たる洵に故なきに非す。然れども萩の家の思想は其根底に固有思想の牢乎たる者あり。飽くまで新思想を容れて着想聲調に大膽なる更新を加ふるに至らさりき。かの「夢に見し女神の跡を慕ひ來てけさ我見たり白百合の花」の如き理想的の和歌は、蓋し彼れの本領に非す。萩の家の歌は、猶其新體詩「孝女白菊歌」等の、動もすれば七五調の長歌たらんとする形跡あるが如く、全然舊様を擺脱する能はざりき。彼はげに最妥當なる意義に於て過渡の歌人と稱すべく、革新の事業は渾て之を其の門下に附囑しけり。

今や文運興隆の機熟し、各種の文學競うて其の面目を改め、俳諧革新の事業も亦着々成功しぬ。和歌界のみ豈獨り舊態を存すべけんや。曩に和歌を以て改良するに足らすとなし、之を捨てゝ新體詩を創めたりしも、詩人胸裡に存する詩想は必しも長大の詩形を俟つて發露すへき者と限らす。或は三十一字詩に表はすを以て最も適切なりとなし。或は十七字詩に表はすを以て最妥當なりとなす。詩想無限なり。豈和歌に盛るべき恰好の者無からんや。況や新詩想の流入詩材の増加、詩語の擴張特に著しき今日に於てをや。是を以て新體詩起るも和歌は爲に倒るへきに非す、兩々相並びて別個の發達をなすへき充分の餘地あるなり。

淺香社中の青年歌人は、萩の家の鼓吹の下に斯壇に新風を導かんと努力しぬ。與謝野鐵幹、金子薫園の徒即ち是なり。就中鐵幹年少の鋭氣を以て新調を皷し革新の先頭に立ちて健闘最力めたり。

與謝野鐵幹

與謝野の鐵幹は京都の人、萩の家に學びて和歌新體詩に一新調を出し、剛氣旺にして常に豪健の風を喜べり。二十八年征清の役中、韓國京城に在り。病んで重きや、歌うて曰く、韓にしていかでか死なん我死なばをのこの歌ぞ復すたれなむと。以て從來婦女的和歌に反抗し、自ら男子の歌を以て任せる彼が意氣を想見すべし。二十九年長短各種の詩歌を集めて『東西南北』を出し續いて三十年『天地玄黃』を刊行する

や、一種の特調を帶べる短歌及新體詩は、其想形の粗放擬拙にして圓熟渾成に至らざるに係らず、いたく文壇の注意を惹き、佐々木信綱と共に最有望なる青年歌人と目せられたり。彼の新體詩は別に之を論ずべし。今特に短歌に就て之を見るに萩の家の詩風を承けて温雅の情、清新の致掬すべき者、亦なきに非されとも、是等はむしろ其特調に非ず。所謂鐵幹調は、年少の客氣、世を憤り俗を恨める慷慨の歌、若くは、太刀、虎、鷲等の豪語を連ねて剛快の情景を叙べし歌に於て最善く現る。蓋し鐵幹古今集以後の繊弱と優美とを嫌ひ萬葉集の雄壯と剛健とを喜び、乃ち粗豪の一風を立てゝ斯壇の沈靜を破り、從來新體詩に壓倒せられて評論界の問題とならざりし和歌をして復好箇研究の對境たらしむるに至れり。然れとも彼れの萬葉を學べるは、雅樸高古の詩想莊重なる五七の詩形に非ずして、單に其の雄壯の姿致のみ。唯夫れ雄壯ならんとす。故に往々衒氣あり、强て粗豪の語を連ねて佚宕を粧ひ、眞情の流露却て見るべからず。之を要するに、鐵幹の和歌は革新の急先鋒たりし歷史的價値に於て重ずべき者にして、之に取るべき所は即ち才氣縱横、大膽なる詩風を試みたる點に存するのみ。

佐々木信綱

鐵幹と流派を異にし、詩風を異にしながら、同時に新詩人として評壇の注意を惹きし青年歌人を竹柏園主人佐々木信綱となす。二十一年大學古典科を出で、爾來竹柏會を立てゝ和歌を門生に敎へ、『日本歌學全書』『歌の栞』等斯道に關する編纂出版をなして其の弘布に益する事少からず。二十九年其の詠草を『めさまし草』に出すや、漸く世の注目を惹き、聲調の流麗なるを以て稱せられたりき。彼の和歌鐵幹の覇氣なき代りに其の俗氣なく、鐵幹の衒氣なき代りに其の意氣なし。唯かの舊時代の發達に屬する和歌を以て新時代の事物に調和せんとし、多少清新の趣致を得んと勉むるに至つては、亦新歌人たるを失はず。試みに『めさまし草』所載の歌を捻するに、

星一つみ空に高くきらめきて空しき谷に木枯の吹く。

鐘の聲さ霧に消ねて天地に到りわたれる夜の色かな。

菓實る家の門べをたゝく子が髮ふきみだす夜嵐かな。

等、從來歌人に比して想像の範圍廣く、彼等に見るべからざる清新の趣致あり。其の調の流麗暢達なるは、十年來専門の宗匠としての竹柏園か獨得の壇場にして、鐵

幹の遠く及はさる所なり。然れども、竹柏園は用語に於て保守的の主張を有し、新事物新思想を詠するに、總て雅語を以てせんと擬するか故に、斝や流れて牽强となり、往々笑ふべき滑稽に陷る。思ふに彼の長所は宛轉たる聲調と千篇立ろに成る達腕とに在り。而も短所亦玆に存し、動もすれば平弱無力の凡調を出し詩趣索然として空しきあり。歌壇革新に對する態度も、頗る穩和にして、新派と言はんよりむしろ新舊調和派と稱するの妥當なるを見る。從て新文學界に於ける勢力も亦おのづから鐵幹等の下に在るを免れず。

此時に方りて、正岡子規は俳句革新の餘勢を振うて和歌革新に着手しぬ。三十一年の初『日本』に掲けし「歌人に與ふる書」は、即ち子規か斯壇に討つて出てたる名乘の聲にして、續て「百中十首」の創作を同紙に掲げ、爾來竹の里人の名を以て一種の新調を詠みて出でぬ。

　　椽先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺の椽手水鉢を掩ふ。

　　病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりて尙病みて臥す。

　　立並ふ欅も槻も若葉して日の照る朝を四十雀鳴く。

の如きは當時の歌壇に見るべからさる異彩を帶べり。而も其異彩は鐵幹信綱と趣を異にし、調子歌題の上よりもむしろ一首に磅礴する趣味の上に存す。思ふに子規の和歌を讀みて先づ感するは俳趣味の掩ふべからさるに在り。本邦の文壇短歌ありてより、歷代の歌人によりて養成せられたる和歌の趣味は、遂に特立して一種固有の者となり、漸々發展して玆に文壇一方の趣味を代表するに至れり。竹の里人の短歌は即ち之に加味するに俳句の趣味を以てせるなり。此の特色や、漢語を含めるを指して言ふに非ず。萬葉調は鐵幹も之を用ゐたりき。漢語は海上胤平も之を用ゐたりき。又間々萬葉の古調を交ふるを言ふに非ず。げに此の事は俳人にして和歌に末に在らすして根本の趣味に於て存するなり。用語句法のたづさはらん者の、必ず然るべき傾向にして、芭蕉蕪村の徒が指を之に染めたりしならんには夙に斯の風體を得たりしならん。而も前人之を成さず、竹の里人乃ち本邦文壇に於ける和歌趣味と俳句趣味との調和者として之が創始の譽を負うたり。

俳趣味はげに竹の里人の異彩なり。而も尙第二の特色として調のしまりて一

點のたるみなきを擧ぐべし。彼は從來の和歌の一大通弊として調のたるめるを指摘し、斯る歌を以て調とゝのはぬ歌となし、語の配置、句の連續に於て冗漫弛廢の病なく、飽くまで緊張勁健なるを尙ぶ。竹の里人は此の點より古來の和歌を通觀して萬葉集の卓逸せるを喜び、其以後に於ては源實朝を推し、田安宗武を擧げ、井手曙覽を稱し、更に備前の歌人平賀元義を暗黒の中に救へり。斯くして彼は從來歌人の纖弱にして弛廢せる聲調、陳腐依樣の思想を排斥し、溯つて萬葉集の剛健にして緊張せる聲調を取り、自然及人事に對する新しき著眼より得來れる詩想若くは彼の旣に得たる俳想より形作れる新歌想を詠み出でたりき。

三十二年以後の作歌も、大體に於て前條所說に異ならずと雖、唯萬葉崇拜の度の益加はり、啻に剛健の趣緊張の調のみならず、延て句法用語を模し、更に長歌旋頭歌等の形體を模し、進んで思想さへ學はんとするに至れり。然れども之旣に加茂眞淵等に見たりし如く、萬葉崇拜の極、皮相に走りし一時の變象にして直に以て竹の里人の本領となし難し。其の歌想漸く神に入れる頃の作『曇』五首、『雨中庭前の松を見て作る』十首、『風』八首、『星』九首等の如き、重厚勁健の古萬葉調を以て明治の新詩想を詠じ、詩味津々として清新の氣溢きさる者あり。且つ一題數首乃至數十首をものして各其趣を得たるは、本と俳句にて養ひし手腕なるへしと雖、亦彼れの詩想の富贍なるを見るに足る。唯事彼が晩年に屬し、一臥起たさりし病牀の執筆なるか故に其詩材題目概ね病室乃至庭前の小範圍に限られ、動もすれは同一の歌想を繰り返さんとする嫌あるを恨とす。

竹の里人か『日本』紙上歌論創作を載せしより、麾下に集まりし者に、香取秀眞伊藤左千夫等あり。三十二年春根岸短歌會を起し作歌は常に『日本』『ほとゝぎす』『心の華』等に載せ、歌論亦之に伴ひ、頻りに革新の說を稱へたり。

竹の里人の期する所は蓋し短歌革新の事業を成就するに在りしならん、然れども其運動の文壇に及ぼしゝ影響は到底俳句に於けるか如く雄大絢爛なる能はざりき。思ふに是當時和歌界の革新は旣に萩の家竹柏園の徒によりて其の幾分をなされ、加ふるに革新の大勢力たるべき青年好文の徒は、多少貴族的女流的なる和歌よりも平民的男子的なる俳句に趣く傾向ありしを以てなるべし。況んや竹の里人の病漸く篤く、意氣復當年の如くならず論壇筆を振ふ事旣に絕えたるをや。

三十三年鐵幹新詩社を結びて雜誌『明星』を發刊し、和歌を主として新體詩俳句其他一般文學を收錄し、以て自家一流の和歌を擴布するに勉め、遂に所謂明星派の一團を形作りぬ。次に根岸派は又機關雜誌『馬醉木』を發刊して斯派宣傳に勉めしが其の靑年の間に於ける勢力は遂に『明星』に及ばざりき。

玆に暫く和歌に關する筆を擱き、翻つて上述の運動が文壇に殘せる結果を列擧すれば、從來單に志を述ぶる要具となし、又は風を移し俗を推す方便となされし和歌を一箇の美術品として取扱ふに至りし事、其の一なり。花鳥風月に限られし歌想著しく擴張せられ、蘆庵景樹等が夢想だも及ばざりし無數の題材新に入り來りし事、其の二なり。古來歌人の最得意となし、枕詞掛詞及緣語の類漸く其姿を隱し勉めて虛字を去りて實字を充つる傾向生じたる事、其の三なり。古來制定せられたる歌詞の小範圍を脫して新詩想を述ぶるに足るべき總ての言語を用ゐるに至りし事、其の四なり。從來の和歌を評する者、槪ね作者の感想の仔細に表章せられたるか否かに標準を置きしに反し、藝術の本義よりして該作物が讀者に與ふる詩的効果に就て論ずるに至りし事、其の五なり。其の他新現象一にして足らずと雖とにかく、一時新文學界に顧られざりし和歌が、再び新文人の手に保育せらるゝに至りしは、複雜なる詩想中、又此の可憐なる小詩形に寓すべき恰當の者存するが故なるべし。然れども、革新の事業は今尙試驗の際に屬し、當時の新壇未だ明治の特調を見る能はざりき。

第六章　文學の轉進

第一節　小說　其の一

一　觀念小說

前記末葉に方り甚しく沈衰せる小說界は、文運興隆の機に乘じ俄然として頭角を揚げぬ、累年蓄積し來りし潛勢力爰に勃發して桃李一時に花咲き、而も前期の小說に比して一段の進步をなしぬ。小說專門の雜誌『文藝俱樂部』は二十八年新に發刊せられ、創刊の『太陽』亦小說に盡し、『國民の友』の小說に對する推挽も從前に劣らず、其の他諸新聞殊に『讀賣』『國會』『朝日』等、競うて小說を載せ、單行本の新刊益多きを加へたり。翻つて作家を見れば紅葉露伴等前期の大家復び振ひ、柳浪眉山等、未

た大名をなさゝりし者著しく發達し、加ふるに鏡花一葉宙外天外等新進の作家踵を接して起り、各特有の詩想を鼓して斯壇の一方に雄視せり。二十九年に入りては、此の傾向益甚しく、專門雜誌『新小說』新に發刊せられ、創作出つる者愈盛なりき。而して此の間最早く其の萠芽を露し、小說界大轉進の陣頭に立ちし者は、即ち觀念小說の一派なりき。

曩に論せし如く、第二期に於ける淺薄なる寫實小說は長く文壇の聲譽を繋く能はす、代つて起りし歷史小說は成功の域に至らずして衰へ、撥發小說は粗笨淺薄、在來の寫實小說にも過ぎたり。小說內容の進歩は二十五年以來全然停止せりと言ふへかりき。是に於てか意義內容の一層深刻なるを求むる傾向文壇に生じ、之に應する新進作家相次て寫實小說の部內に出でぬ。彼等の作たるや、之を在來の寫實小說に較ぶれば、結構單純にして篇章亦短小なりと雖、其の心理描寫の精緻なる其の性格表出の刻劃なるに至つては遙に從來の者に勝り、而も概ね一定の觀念若くは傾向の上に立ち、人物の性格心理の發展主として之に出づ。故に是等の人物の性格及心理は從來の小說に於けるよりも更に複雜、更に微妙にして、其發展の如きも因果關係一層確然たり。作家か斯る描寫を試みんとするや、特殊の人物を取り特殊の舞臺を取り、以て特殊の觀念思想を寓し、特殊の心理現象を描き、所謂寫實以外に或物を捉へんとせり。事二十八年に起り、世に稱して觀念小說といふ。眉山の『裏表』鏡花の『夜行巡査』『外科室』等の如きは、即ち此種の小說の代表的製作なり。

川上眉山

川上眉山は硯友社中の才筆と稱へられしも、前期に於て未だ名をなす能はさりしが、二十八年に至りて、從來の纎麗妖冶の筆に加ふるに一種深刻の觀察着想を以てし、いたく在來の西鶴的寫實と趣を異にし初めぬ。『太陽』に出せる「書記官」は實に此の傾向の萠芽にして、『國民の友』附錄に揭げし「うらおもて」は即ち之か精華なり。「書記官」は、純潔の處女が父の名利の爲に一身の貞操を犧牲に供する一種悲慘なる社會現象に着想せし者にして、世間往々存する、名利の繫累を利用して處女の純潔を弄ぶ惡むべき行爲を提け來り、之を描くに一箇清新なる具象的作品の形を以てせるなり。

「うらおもて」

次に「うらおもて」は、同じく社會の罪惡に着想し、德行家として知られし者が冷酷なる世人に其の慈善心を飜弄せられ、遂に財産を蕩盡し、はては社會に突き放さるに至りて始めて社會の無情なるに驚き、漸々世相を觀察して我利私慾の世

泉鏡花

「夜行巡査」

となし、遂に自らも盗賊となれる順序を描き以て、社會を痛罵せるなり。斯くの如き趣向は從來の小說に見るへからさりき。大詩才にして筆を此の方面に向け、複雜なる心理變化の剖拆を試みる事あらば、沈痛深刻人の肺腑を穿つべき異彩出色の作を得べし。然れども作者、理想を表すに專にして事件甚自然に遠く社會觀を體現するに急にして心理變化の徑行甚分明ならず。僅かに其の一端に觸れしのみにて未だ優秀なる藝術たる能はさるを憾となす。唯小說題材を一新せし功績小ならずといふべし。

斯くして眉山は觀念小說作家の一代表者となりぬ。然れども此の作風を文壇に捲き起して之か陣頭に花々しく戰ひし者は即ち紅葉門下の新進作家泉鏡花なりき。眉山の如きはむしろ後れて此風を學びしか如し。鏡花は二十六年紅葉の門に入り、夙に峻峭の筆を以て『讀賣』に異彩を放ちしが、二十八年春、先づ「夜行巡査」續て「外科室」を『文藝倶樂部』に掲くるに及び、彼の名は俄然として評壇の論題となりにき。

帝都の夜を守る一巡査あり、職務に忠實なる事類なく、夜行巡査の職務を行ふに一點の懈怠なく、又一點の假借なく、宛然たる職務の權化なりき。然れども彼も亦木石の無情漢ならず。熱情を傾けたる一個の愛婦を有せり。其の冷々氷の如くなるは職務の觀念强烈にして凡百の私情暫く屛息するのみ。偶々愛婦の父泥酔し、彼の女に扶けられて夜を歸り、彼を嘲罵誹譏して兩者の愛を割かんとす、巡査は默々として醉漢の後に從へり。忽然醉漢誤て濠に陷りぬ。巡査は身を躍らして續て濠に入りぬ。彼は人民保護の職掌を行はんか爲に、惡むへき戀の妨害者をも救はんとするなり。憫むべし、氷の如き濠水は此の職務の權化をして長へに逝かしめぬ。斯くの如きは「夜行巡査」の大旨なり。蓋し鏡花義務の觀念を寫さんと欲し、戀愛の私情に對する此の觀念の勝利を描き、以て人生悲劇的の一方面を深刻に體現せんとす。故に巡査か職務に忠なれば忠なるだけ、彼の情熱の高けれは高きだけ、戀愛の妨害の大なれば大なるだけ、作者の成功は其れだけ光榮ある者となりぬべし。此篇固より渾成の名什に非されども、其の題材着想全然創始に出で筆致亦幽峭にして詩趣に富み、洵に小說一轉の機を云せりといふべし。「外科室」の醫學士と伯爵婦人との間、亦這般斷腸悲慘の趣を盡し、遂にわりなき戀に一身を献するに

至る所、更に人生の恨事を體現せり。

此二小說出でゝ、鏡花の名文壇に普く、奇峭の想、俊爽の氣、沈痛の筆相俟つて人生の或物を描出せんとする彼の作は、教養ある讀書社會に多大の歡迎を受けたり。同年の「鐘聲夜半錄」二十九年の「琵琶傳」「化銀杏」「海城發電」の如きは皆此の系統を引ける者、構想益慘憺、筆法益瑰奇、「化銀杏」に至りて特に此の傾向を示せり。然れども物一度新傾向を帶ぶるや、往々極端に走り、從て其の弊に陷る。鏡花亦此の弊竇を承け、着想奇に過きて恠に流れ、筆力玄に過きて趣を失ひ、其の極不自然非人情の域に落ち、人物の如き、往々常識を超え常情を離れたる奇癖の恠物となる。故に其の事の悲慘なる讀者の胸を剳る者あるに係らず、惻々として人を動かす事なく、特に主人公の悲劇的沒落以外、屢殺人の慘事を仕組みたれば、中には却て不快の感を起す事なきにあらず。

吾人は鏡花眉山の二人を以て小說界に於ける新傾向の唱首となせり。爾來或は社會の罪を寫さんとし、或は人生の目的としての戀を描かんとし、其他倫理上心理上の種々の觀念或は概念を捉へ來りて之を作品の上に體現せんと試みたる小說續々出で來れり。批評家は概ね之を觀念小說と呼べるも、何時には概念小說と稱し、或は其の傾向より名けて深刻小說悲慘小說とも言ひ、又は心理描寫を主とする點よりして漠然心理小說とも言へり。然れども心理小說深刻小說などよりも範圍廣く、所謂觀念小說は小說全體の心理的傾向の一部なり。一部先づ起りて種々の部類之に繼ぎ、遂に各種の心理小說競ひ起るに至る。此現象は獨り小說界に存するのみならず、文藝界の全部を通じて現はれたり。國民の自覺學術の進歩と共に、從來比較的淺薄なりし思想界の比較的深厚となるや、文藝界に於ても一種深刻幽玄の新思潮起り、世態人情の機微を捉へて直に人の靈界に觸れんとす。繪畫界に於ける心もち主義印象主義の如き皆此の思潮に出づ。特に小說に於ては、或は作者自ら泰西小說に接し、或は小說の理想觀念などを論せる批評家の論議に鑑み、從來の小說の輕浮單調に對して漸く不滿足を感せるか上に社會生活の現狀は人をして人生の嚴肅なる方面を經驗せしめたりしかば、愈益此の傾向を助長せるなり。

廣津柳浪

觀念小說に次て現れたるは、即ち廣津柳浪の深刻小說悲慘小說なり。彼は前期

に在りて既に一種人生の機微を寫すに長したりしが、今や新興の氣運に乘じ、二十八年「黑蜥蜴」「變目傳」を出し、其他翌年に亘りて「白百合」「龜さん」等を出し、愈其の本領を發揮し來れり。就中「黑蜥蜴」は、隻眼痘面の醜婦にして而も貞實至孝なる大工の嫁が、貞操の爲に無慈悲酒亂の舅を黑蜥蜴にて毒殺し、己亦自殺すといふ悲慘なる脚色、「變目傳」は侏儒變目の醜貌に生れて而も心尋常の情を解する心身不調和の男が、性格境遇の否なるに激成せられて遂に殺人の大罪を犯すに至る凄慘の事象を描き、其の他概、之に類せる病的人物の憫むべき忌むべき運命を叙せり。此等の作出でゝ、柳浪の名大に揚り、鏡花等と共に新派と稱せられたり。

柳浪は概ね筆を人生の暗黑面に着け、性格と肉體と境遇との關係より凄絕なる破綻を來すに至る徑路をば、極めて痛切に寫し出さんとせり。其の主人公が常に肉體上精神上の不具者、若くは強度の神經家なるか如き、はた其の大破綻の結末が概ね殺人自殺等鮮血を以て染めなされしか如きは、即ち此目的を達せんが爲に外ならず。鏡花を以て之に比するに、彼に在りては觀念或は概念といふべき者全篇を支配するも、此に在りては必しも然らず、唯世相の悲慘なる一面を深刻に描き出さんとするを見るのみ。彼は又理想に馳せて超人間の不自然界に入る事ありと雖、此は決して然らず、人生一部の寫實として特殊の場合に於ける心理自然の徑行を寫せり。而も人の靈界に觸れて其消息を描き出てんとせるは二者等しく新派小說家たるを失はず。唯惜む、柳浪の小說往々殘酷に流れて不快の感を惹起するを。

觀念小說深刻小說一たび出でゝ文壇爲に活氣を生じ、讀書社會は其の新奇の色彩に眩して頻りに之を謳歌せり。然れども、少しく思慮ある批評家は潑溂たる新彩の裡に潛める幾多の缺點を見て屢之を難せり。蓋し是等小說の失とすべきは主に、規模小にして觀察概ね主觀に偏し、從て不自然病的に陷る事多きに在り。是を以て一時の革命的現象として心理的傾向を小說界に殘しつゝも、漸次勢力を文壇に失へり。

吾人は叙述の順序として當時續々起りし心理小說の新進作家を擧げ、觀念小說悲慘小說以外如何なる發展をなしゝかを論すべき場合に立向へり。されど上述三作家の作風も亦之と同時に多少の推移發展をなせるを以て、便宜上暫く他を差

措いて三作家其後の作を見ん。

眉山が「裏表」以後の作に在りては、二十九年作「松風」翌年作「朧富士」と「絃聲」と稍見るに足る。「松風」は詩人は狂に類すといふ思想を體現せる者と見るべく、「朧富士」は葛藤ある戀愛と悲慘なる運命とを叙して、女子心理狀態の一方面を描き、「絃聲」は人心の奥妙を寫すに夜半おのづから起る絃聲を以てせる幽玄の作なり。是等の作、聲譽固より前年の作に及はすと雖、觀念小說の矯激なくして心理小說の自然的なる分子著しく加はり、作風の推移鮮少に非ず。唯其の筆力未だ眉山の名を高うするに足らざるを恨となす。

鏡花は怪奇に過ぐると人情に遠きとの故を以て、一時評壇の批難を受け、爲に二十九年の主たる作「一の巻」より「六の巻」に亘る長篇を『文藝倶樂部』に掲けし時も、苦心の作なるに係らず、世の視聽を惹く事少かりき。然れども鏡花の鏡花たる所は、幽玄神秘の詩的風韻に在りて寫實的筆力の精細に存せず。鬼才益幻怪を逞うして「龍潭譚」となり、「照葉狂言」となり、「風流蝶花形」となり、「化鳥」となり、「清心庵」となり、「髯題目」となり、三十一年に入りて更に「辰巳巷談」「笈草紙」「梟物語」等となり、一方より性に遠ひ情に悖るとの貶評、邪路に入れりとの警策を受けながら、兎に角才筆斥くべからざる者ありき。

「龍潭譚」は薄暮一幼童の魔に魅せられて夢幻に入るを描き、「風流蝶花形」は怪蝶を材として遊女の咀死を寫し、共に凄婉の致に富む。「化鳥」は落魄の佳人半狂して夫の形見の一塊肉を抱き、世を恨み人を罵りて己れ獨り天女なりと言ふに至れる悲痛の物語、「清心庵」は貴人に嫁せし美女が幼馴染の少年に邂逅して其零落に同情し、遂に相共に一草蘆に止りて其家に歸らずといふ奇矯の筋、共に幽玄の詩趣を認むべし。「髯題目」と「辰巳巷談」とは、一は藝人の末路、他は女郎の末路を描きて嶄新又凄涼、「梟物語」は眞宗寺院の内部を寫して怪奇なる人物性格を集め、幽玄蒼涼人をして悚然たらしむ。而して作家か是等の趣向を筆にするや、獨得の省筆法を以て含蓄餘韻あらん事を求め、隱約の消息を讀者の想像に一任す。是を以て彼の小說を讀むや、先づ神秘的の想髓と脚色とに魅せられ、文字の怪奇、詞章の凄愴とは之を助けて恰も幽界に赴くか如き思あらしめ、次て此の省筆に遭ふや、益其の想像を逞うして夢幻の怪境に走せしめらる。蓋し鏡花は人情世態の機微を寫す作家に非ずし

て、神秘界の消息を穿たんとする作家なり。彼れの立脚地は正に玆に在りといふへし。

然れとも斯る特色を發揮して渾成の域に至らんには非常の修養を要す。鏡花の筆力惜むらくは未た圓熟せず、堂に上りて未だ室に入らず。其の人物と事件とは、一面に於て現實を超て幽性の畛に入ると共に、他面に於て未だ超自然の神秘界に觸れず、徒に結構の不可思議と詞章の幽玄とを弄して思想の神秘を裝はんとす。故に形式に於て多少の成功を見ると雖、内容に於て意外の空虛に驚く。彼の讀者を魅する所以の者は主として脚色の不可思議なるによりて催起せらるゝ探偵的の好奇心と、詩味津々たる描寫の往々幽玄の高調に達する箇處あるか爲に惹起せらるゝ感情の昻上との二者に在るべし。思ふに鏡花の作、全體としては散漫の失あると共に、局部に於て緊密周匝、及ふべからざる者あり。是に於てか作者の名復び揚り、模倣する者少からず。盛名當年の如くならざれども、筆力の發展決して尠少に非ず。又以て後進作家の冠冕たるを失はず。

悲慘小説の名家柳浪は、其の深刻の筆鋒を以て心中物を作り初めぬ。二十九年『文藝倶樂部』に出でし「今戸心中」『新小説』に出でし「河内屋」『小説六佳選』に出でし「淺瀬の波」の如き是なり。皆情海に浮沈する男女の複雜なる關係と葛藤ある戀愛とを描き、結ぶに悲慘なる情死の現象を以てし、即ち元祿の昔、巣林子の靈筆に詩化せられし心中を取り來りて一篇の主眼となし、之に戲曲的結構と心理の解剖とを經緯せりき。

「河内屋」

就中「河内屋」は當年の傑作にして、所有柳浪の長所を集めたりと稱せらる。げに寫實小説心理小説在りてより此作程人情世態の自然なる現象を描ける者少く、人物の氣稟性質に應じ、其の境遇の上に凡百の色彩を與ふる狀況も明瞭に描かれ、特に對話の如きは作者獨得の筆力其巧妙を極む。げに此作は啻に柳浪をして名を當代に高からしめしのみならず、明治の文壇に重きを爲すに至らしめし傑作なり

爾來柳浪は「信濃屋」「段々染」「異り種」等、創作少からず、皆深刻の觀察を恣にし、陰森の氣に滿つ。げに柳浪獨得の擅場は即ち人の思ひ至らぬ一種疾痛すべき人生問題を捉へ、一種深刻なる詩題を自然界より擇み出して、之を讀者に提供する手腕に在り。此の特質は『殘菊』以來の者にして、慘憺の境遇と悲痛の運命とに飜弄せらるゝ

情的人物を描いて其の心裡の苦悶を叙する所、人の腸を九回せしむ。唯描寫の筆力惜むらくは之に伴はず。對話の巧にして隙なき、當代を驚うするに係らず、心情流動の迹を寫すや、往々説明の疎筆を以て忽々叙し去らんとす。讀者か斯る文章を讀みて、尙無限の妙味と一種の魔力とを感するは、詩題結構其の物が極めて奇拔にして、讀者の想像をして文筆の形似を脫して直に事象の中心に突入せしむるか故なり。彼の長所は結構の戯曲的發展に在ると共に、對話を以て始終すべき戯曲的形體に在り。此點に於て三十年『太陽』に掲けし「畜生腹」の如きは最よく作者の特色を現せる者といふべし。「畜生腹」は「河内屋」と共に柳浪一代の傑作にして、畜生腹の一婦人苦惱の餘り惡婆の勸誘に應じ一兒を暗に送りてより悔恨と恐怖とに身を悶ね心を勞し、夫の疑惑と惡婆の强迫とに挾まれて懊惱憂苦、遂に夫婦の間長へに疎隔するに至りし始末を寫し、通篇讀者の感興を緊張して一點の弛みを與へず凄慘の氣人に迫りて卒讀に堪へ難し。作者嘗て曰く、深夜燈下に非ざれば小說の作をなす能はずと。其の能く凄婉なる脚色と筆致とを得來るは孤燈暗影の下に思を凝せばか。然れとも事利あれば必ず弊を伴ふ。柳浪の如きも往々慘酷に過ぎ殘忍に流れ、刺激强烈に過きて間々不快の感を起す。此の傾向は彼を驅りてかの精神上肉體上の不具者を寫さしめ、然らさるも下等の人物社會に想を構へ、延て殺人自殺心中等、衝動の强烈なる結果を取らしめたり。之を以て彼の作には詩想の高尙脫俗なる者なく、寫す所の戀愛概ね汚れたり。かの情死の如きは愛情發動の最美しき者なるも、之を狹斜の巷に求めんは、品位あり見識ある詩人の爲すへき事に非す。階級の嚴制ありし昔に在りては、人情の自由にして自然なる活動を現じ複雜にして曲折ある戀愛を構成すへきは、獨り楊臺柳巷の間に在りしを以て詩人の着想亦此の地に向ひし事爭ふべからずと雖、明治の新天地に入りて尙且つ遊女漂客に非されば戀愛を語るに足らすとは言ひ難し。

同年の作の可なる者には、尙「あにき」「靑大將」「七騎落」あり。手腕漸く老熟して强て悲慘を求めず。作風漸く中正に赴き、歩一歩自然派の領域に近きつゝあり。三十一年「羽拔鳥」『新著月刊』「女仕入」『新小說』等を出すに及んで益此の步趨を取り、前者は從來の悲慘小說に比して、結構性格の自然なる、結末の光明的なる點に於て大なる差異を現し、後者は多少悲慘小說當年の面影を存すと雖、心理自然の徑行を描いて

一糸亂れず、好箇戯曲的發展をなせり。此の自然派的心理小説は、當時の小説界を風靡せる者にして、柳浪實に此の間に重きをなし、多作縱横彫琢を用ゐずして直ちに稿を脱する所、亦異才なりといふべし。

斯くの如く新潮流の擴布に最力ありし三子者の作風は、一時極端に走りて其の反動を受くるに至りしかば、翻つて多少の變更推移を其の間になし、概ね中正折衷の風に赴けり。獨り鏡花は自然派的寫實を離れて幻怪の境に入りしも、眉山柳浪、特に柳浪は其の心理小説益自然的となり、比年大に奮ふ。而して三子者皆明治寫實小説の祖門たる硯友社に出でしを見れば、斯壇の進歩に對する該社の因縁蓋し淺からず。況んや江見水蔭大に振ひ、小栗風葉新に起りて之に貢獻する所ありしをや。此の時に方りて後進作家踵を接して起り、文壇之を歡迎するの聲高く、二十九年創刊の『新小説』『世界の日本』翌年創刊の『新著月刊』等、皆之を標榜せり。既に新進作家あり。乃ち之に對して從來の作家を先進作家又は老大家と呼び、二者是非の論喧しく、反動又反動、後進奇帩の氣は先進老熟の風に宥和せられて極端に奔逸する事漸次少かりき。此の先後新舊融和の潮流は夙く女作家一葉に萠し、早稻田專

門學校出身の諸作家に至りて其の勢を逞うせり。以下序次を追うて是等新進作家を叙すべし。

二　心理小説

觀念小説深刻小説の天下を風靡するに方り、筆は露伴を學びて氣骨ある西鶴風を取り、想は心理的主觀的の最新思潮に出でたる一新作家の、忽焉として文壇に現れ、佳作連出盛名一時に世に布けるありき。樋口一葉女史是なり。一葉は東京の人、二十五年始めて筆を小説に執り、爾來二十九年、其の病沒に至るまで文壇に於ける生命僅に四歲、而も其の間作る處二十餘篇皆傳ふるに足る。沒後蒐輯發刊せられし『一葉全集』に就て見るに、其の處女作は『闇櫻』にして、二十五年の中に得たりし短篇總て七種ありと雖、世に公にせられしは『都の花』に出でし『埋れ木』などや嚆矢なるべき。其後『文學界』『文藝俱樂部』等に揭けし者數篇あるも未だ作家の名を高うするに至らざりしが、二十八年一代の傑作『たけくらべ』『文學界』に出で、續いて『行く雲』『太陽』に、『濁江』『文藝俱樂部』に、『十三夜』『閨秀小説』に出で、翌年『わかれ道』『國民の友』に、『われから』『文藝俱樂部』に出づるに及び、才筆忽文壇を動かすに至りぬ。

「たけくらべ」

「たけくらべ」は楊臺近き大音寺前、一臠の風俗餘所と變りて少年少女のませかた恐しき市井に人となり、春は櫻の賑ひ秋は仁和賀の折々に、迭にくらべ來し振分髮の間にも情、意氣地、戀無常、種々の世相の幼きながらに見らるべき情味ある舞臺に筆を着け、全盛の華魁を姉に持てる十四の少女美登利を主人公となし、界隈種々の少年少女を之に配し、以て美登利の快活勝氣なる性格を彫り浮め、此の如き氣象者のいつか物恥かしく人なつかしくなるに至れる心理變化の微妙を躍動せしめたり。

「濁江」

「濁江」は場末新開地の銘酒屋菊の井の出女お力が嘘のありたけ串戯に其の日を送る中、怨の刃にかゝりてお寺の山の人魂と化するに至りし筋を叙し、遺傳と境遇と閲歷と相倚りて成る人生の複雜なる徑行を描きて筆力最深刻、平和快活の大海の下奔激悲慘の暗流あるを示し、絃歌嬉笑の裡悲壯の涙の潛むを寫して筆鋒熱烈を極む。『十三夜』は貧乏士族の娘お關が夫の虐待に堪へ兼ねて夜私に親里に趣きしに、殘し置きし一子の愛やら物堅き父か訓戒やらに思ひ返して歸る途中、十三夜の月影に、處女なりし昔思をかけたりし男の車夫とまでなり下りしに遇ひ、浮世に辛きは一人と思ふなとて相別れ去るといふ筋、憂きは互の世に思ふ事多き世相の一部を描破して凄婉痛惻人を動かす。其の他「行く雲」「別れ道」「われから」等、皆夫々の人情の機微に觸れ、世相の凄慘を表せり。斯くの如くにして一葉の名は文壇賞讃の中心となり、或は誠の詩人といふ稱を贈るを惜まずと言ひ、或は當今の小說界は一葉時代なりと呼ぶに至りき。かゝる過大の讃美は勿論才華一時に煥發せる強烈の光彩に眩惑して冷靜なる鑒識を誤りしに出でしならめど、亦是れ從來觀念小說悲慘小說の奇怪慘酷に嫌惡の情を生じたりし時に際し、比較的自然溫藉にして而も意義の深刻なるを失はざる新小說を得たりしに因らすんばあらず。尙其の全集に就きて觀察せん。

一葉の見たる社會は、冷酷無情個人の發達を抑壓する意地惡の者なりき。まゝならぬ憂世とかこつは一葉の社會觀よりすればむしろ穩和に過ぐ。社會は個人と對立して屈せさる者に非ずして、個人の上に翻して之を埋沒せんとする者なり。「行雲」の中に「二葉の新芽に雪霜の降りかゝりて是でも伸びるかと抑へるやうな仕方」と言へるは正に社會か個人に對する態度を說けるなり。社會果して斯の如しとすれば、此の間に生を享けし者、醉生夢死の徒に非さるよりは如何で平穩無事なる

べき。苟も一節あらん者誰か社會の冷酷無情に萬斛の憤涙を濺ぎ、之に抗し之に逆ひ、當つて摧けざらん。一葉の小說に於ける人物は即ち是なりけり。

斯る性格を以てこの意地惡の社會に處せんには忽ち起るは衝突なり、葛藤なり熱涙なり。續いて起るは悲むべき大破綻、恐るべき大破壞なり。然らば則之に繼て來るべき結末は何ぞや。正に是れ一葉の小說の主眼とする所、全集二十餘篇は即ち此の間の消息を描かんと試みたるに外ならず。思ふに古來の文學にして此の消息に觸るゝ者、概ね自殺若くは遁世を以て其の結末となせり。然れども是等は一葉の小說の結末たらんには餘りに淺薄、餘りに古風なり。深刻の思潮文界に橫溢せし當時に在りて斯る陳腐なる人生觀の容れらるべくもあらず。是に於てか一種沈痛なる人生觀を生じ、萬斛の憤涙を揮ひ盡せる後に於ける異常の諦めを生せり。一葉か甚深の同情を以て氣骨ある筆を揮ひしは即ち此の恐ろしき諦めを生するに至る消息にして詩人として成功せし所亦茲に在り。而して男女人物の中全幅の同情を傾倒せしは勿論女性に在りとす。蓋し弱きにつれなき冷酷の社會は人の中の最弱き女性に向つて特に其の橫暴を逞うす。持つて生れし一ふし。あらん女の、涙を揮ひ盡して所有强情我慢に恐しき決心を示すに至るはむしろ憫むべからずや。一葉は即ち是等無告の女性の爲に萬丈の光焰を吐ける者、明治文壇に在りて當代の女性を描く事かくの如く痛切なるあらず。紅葉一派の寫實家か創れる女性の如きは、之に比すれば尙未だ淺薄なるを免れず。

吾人は一葉の小說を通觀して略其の特質を盡しぬ。顧みて之を思ふ、全集二十餘篇悉く同一人生觀の上に立ち、同一性格を描けり。女史の小說は大自然を描かんが爲に人生の種々相を寫せるに非ずして、一定の人生觀を表現せんか爲に、人生の特殊相を寫せるなり。換言すれば各篇其の結構を異にするに係らず、畢竟同一問題を解決すべき實例の蒐集に過ぎず。是を以て主觀の基彩は全作品に亘り、篇中の人物動もすれば作者其人の影子たらんとし、而も其影子や、作者の人生觀の明晰直截なるだけ、所謂寫實派の其れに比して甚しく明瞭著大なり。故に其の筆に上る所、狹隘なる社會に限らるゝ代りに、描寫の深き、奥底に徹し、單調なる性格に限らるゝ代りに、刻劃の生采、躍動の妙を極む。此の點に於て一葉の思想筆意は所謂深刻小說に似て其の奇怪と慘酷と無く、却て同情の人を動す者あり。且夫れ一葉

の自然を重んじ、背實を忌む事必しも所謂寫實家に劣らず。女史は即ち寫實家の心を以て深刻小說を作る者、從來の寫實派と觀念小說一派との最善き調和家折衷者なり。

一葉は小說に師事する所なかりしかど、私淑せるは蓋し露伴に在りき。人物の性格の如きは頗る露伴のに類似し、特に「埋木」の主人公の如きは全く露伴固有の人物なり。從て文章亦露伴を學べる者少からず。蓋し一葉の文、初め西鶴を師としたりしが、西鶴を脫して一家をなせる露伴を見るに及び、更に之に私淑するに至りしなり。「埋木」の如きは元祿の大家を模倣せる跡沒すべからざると共に、頗露伴の初期の文章に類す。然れども「濁江」「十三夜」に至つては既に獨立して一新體を創始し、精練にして才氣縱橫、雅俗の言語句法を驅使するの妙一世に秀づ。特に「たけくらべ」の一篇は、文情清婉文氣老熟、洵に渾成の名什たり。且つ從來等閑視せられし小說中の敍景分子著しく增加し、特に「行雲」の末段「たけくらべ」十回に於ける情景雙敍の一節の如きは、清新簡淨にして趣味溢るゝか如し。不幸にして詩想文章並に成熟の境に至らずして病に伏し、一臥遂に立たざりき。年僅かに二十五歲。大橋乙羽齋藤綠雨等『一葉全集』を編纂發行し、以て紀念となす。

『一葉全集』

一葉文壇に出てし比、女流文學者の筆を小說に染むる者一時に輩出しぬ。從來女流文學とし言へば和歌に限られたりしが、文運の興隆以來往々小說飜譯新體詩等に及べり。三宅花圃の小說に於ける、若松賤子、小金井喜美子の飜譯に於ける、夙に才筆の目ありしが、是に至りて一葉を出し、北田薄氷を出し、田澤稻舟を出し、大塚楠緒子を出し、二十八年末遂に一部『閨秀小說』の出版を見るに至れり。收むる所の作家は上揭數人を合せて總て十二、就中花圃は嚮に「露のよすが」を『太陽』に、今は「萩桔梗」を『閨秀小說』に出し、共に無垢の娘心、可憐なる處女の情を寫して溫籍の姿致を極む。作者は當時に於ても、又其の前後に於ても、作品多からずと雖、さすが女流小說家の先蹤として、老練の筆ぶり一葉と共に當代閨秀の首班たるに足り、一葉の悲觀的厭世的なるに對し、樂觀的光明的の觀察に富めり。げに二人の特質は好箇の對照にして、一葉の社會の缺陷を指摘するや秋霜烈日の嚴しさを以て之を冷罵し、花圃は其の缺陷を認むるも、其の裡又一點の調和を求め、春風滋雨の溫さを以て之を謳歌せんとす。一は人生の暗側を寫し、他は其の明側を描き、一は文章の奇拔を以

三宅花圃

て勝り、他は其の温和を以て優る。故に二者の觀たる社會は等しく不調和缺陷の集合なりきと雖、人物の性格は大に差あり、從て個人對社會の葛藤は、其の終結に於て甚しき相異あり。「露のよすが」の露子姫、何一つ不足なき身ながら與はらぬ容色に赤縄結び難く、千行の紅涙强て抑へて唯醜草の疾く枯れよと祈るは好箇人生の悲劇、一葉をして材を此に取らしめば、正に一個世のすね者を描き出でしならん。而も花圃の露子姫は無情なる子爵の筆意に倣うて靜に富士を畫く餘裕と和平とあり、末段一點の光明を示して慰藉する所少からず。「萩桔梗」の浪子亦失戀の恨を懷いて傷まず狂はず、曩昔一時の夢を忘れて和平の局を結べり。斯くの如く二作家の人生觀は根抵より異なりと雖、各人生の一面を寫して雙璧の價値ありといふべし。

北田薄氷
田澤稻舟

薄氷と稻舟とは之に次ぐ作家にして、前者の作は「鬼千疋」あり「黑眼鏡」等あり。結構着想共に人生の悲觀に出で、而も道理女作家の温藉を見る。後者は「白薔薇」等の作あり。筆熟せずと雖、才氣おのづから現る。山田美妙齋に配して二三の合作ありしが、二十九年一葉に先ちて歿しぬ。『閨秀小說』に漏れし作家の中、田中夕風は亦有望の名ありき。

心理描寫の潮流は、一方に於て江見水蔭と田山花袋との散文詩的小說を出しぬ。二人は共に深刻なる寫實、高遠なる理想の筆を缺けりと雖、其代りに津々たる詩趣に富み、縹緲たる詩韻を藏する事群作家に超ね、鏡花の怪奇柳浪の悲慘一葉の沈痛以外、別に一異彩を新作家の間に放てり。

江見水蔭

水蔭は漣山人と同じく獨乙協會學校に出で、硯友社初期以來の社中たり。所作概ね小說なれども夙に脚本に指を染め、且つ艶筆を鳴れる社中、比較的氣骨ある文章を屬し、同人間の異色と稱せらる。早く『中央新聞』に入りて小說をものし、戰爭酣なるや數多の軍事短篇小說を出しぬ。然れども第二期に在りては特に注目すべき作なかりしが、二十八年短篇集『水車』を刊し、「女房殺し」を『文藝俱樂部』に出し、二十九年「炭燒の煙」「泥水清水」「絕壁」等を出すに及び、詩想の頗る見べき者ありて忽ち文壇の注目を惹き、就中『水車』の中なる「兜の星影」「斷橋」「温泉」「狂詩人」等、及「女房殺し」「炭燒の烟」の二篇は其の傑作と稱せられたり。而して彼の文章は多樣多變或は雅俗折衷、或は言文一致或は對話體或は獨語體、行く處として可ならさるなしと雖、其の長所は蓋し言文一致の說話體に在るべし。

水蔭の小說は、世相を描き人情を寫す小說としては成功の域に遠き者なりと雖、之を詩篇として見る時は、優に散文詩の境に入る。彼は硯友社中獨り理想小說を以て任じ、從て其の詩題は多く理想界に生活する人物、即ち藝術家に關し、然らざるも之に類似せる抒情詩的題目を選べり。彼の好める人物は畫師詩人巡禮漁夫山樵旅客等にして、從て都門塵俗の風よりもむしろ山海林野の趣を愛す。「炭燒の烟」に於ける炭燒男の愚直にして一圖なる性格及行爲「絕壁」の主人公たる詩人が身世の不遇と戀愛の失敗との爲に破壞し盡されたる半生の生活の如き、共に作者が着想の傾向を覗ふに足る好例といふべし。「女房殺し」は當時一葉の「濁江」と並稱せられ、可憐の賤女に同情して所謂社會の罪を鳴らし、人生の迂餘曲折を盡して深刻小說の畛域に入り、文章亦精練にして緊張せる所以て當代傑作の一に數ふべきも、是實に水蔭作中の異色にして、以て他の篇を推すべからず。彼は飽くまで理想界に遊ぶ人物を描くを特長となす。而も其の藝術家を描くや、必しも露伴と趣を一にせず。露伴の藝術家は一向專念にして、意志强健道念高潔なり。水蔭のは之に反し、信念堅固ならずして世間の毀譽に惑ひ、道念確固ならずして或は墮落の淵に陷る。斯の如きは水蔭が理想として描き出しゝ詩人に非ずして、正に當時の詩人に模本を取りて其の憫むべき運命を寫さんと試みしなるべしと雖、要するに理想派の小說家として未だ至らざる所少からざるなり。

飜つて之を詞藻の方面より見るに水蔭は詩人としても亦未だ至れる者に非ず。其の文辭精練を缺き其章句推敲を缺き、遂筆一過復顧ざる趣あり。「女房殺し」さすがに清婉の氣難すべき所少しと雖、其の他の諸什可惜詩想を傳ふるに足るべき十分の詩筆なきを憾となす。

田山花袋

花袋は二十七年頃に現はれし新進にして、二十八年作「山家水」「水車小屋」「小桃源」翌年の「無名草」「忘れ水」等皆幽婉純清、無韻の抒情詩なり。描く所槪ね青春の純潔なる戀愛にして、之を綴りなすに優美なる山色水光を以てし、之を行るに詩趣饒き雅俗折衷體の文章を以てし、情景錯綜する所限なき韻致を含む。花袋の戀を描くや、其の成立の因緣順序を細寫せんとはせず。直に成立以後の心狀に及び、思內に溢れて而も言ひがてにする年少初戀の情、又は獨り片戀を胸に懷きて人知れず煩悶する狀を寫せり。之を嵯峨の屋が描ける青春の戀に比するに、其の純潔なる點相似た

り。其の煩悶の態相似たり。其の人物の性情相似たり。然れども、情感の熱烈に於ては花袋到底嵯峨の屋に及はざると共に、着想の自然にして描寫の妥當なるは花袋固より嵯峨の屋に超えたり。蓋し花袋に取るべき所は一篇を掩ふ詩的情緒に在り。之を外にしては彼の小說は稚氣滿幅、脚色單純にして篇章概ね短く、從つて小宇宙としての小說たるに甚遠し。「忘れ水」の如きは、彼の所有特色を代表すべき好作例といふべし。要するに花袋の作より大なる敎訓を得、深き戀愛を味ふ事難しと雖、清く美しき戀を味うて青春の慰籍となすに足るべし。

硯友社の後進作家として鏡花に接踵して起りし者を小栗風葉となす。風葉は紅葉の門人にして、二十九年「寢白粉」「龜甲鶴」を出すに及んで、忽ち評壇の注目を惹きぬ。「寢白粉」は人情自然の徑行を描いて着筆亦輕妙、紅葉の面影を模し得て才藻見るべき者あり。唯着想奇矯、强て人生特殊の一方面を描き出でんとせしが爲め、一時評壇の批難を招きたりき。思ふに斯かる紛糾せる逆境の戀を描きしは、從來戀愛の單調を破らんか爲に葛藤烈しき者を求めんとしたると、葛藤を個人と人倫との衝突に取りて悲劇の効果を大ならしめんと企てたるとに由る。かくの如きは、企畫必しも非ならずと雖、取材の奇を弄するに過ぐるを誡むべしとなす。「龜甲鶴」の著想かゝる弊なくして、詩趣に富み、才氣を見るべし。然れども彼の發展は尙未來に在り、後章に說くべし。

紅葉門下にして當時世に出でし者には、尙柳川春葉德田秋聲等ありと雖、未だ特に說くべき者なし。飜つて硯友社作家の全體に就きて其作風を思ふに、概ね逸氣奔放所有試驗企畫を敢行して常に小說界新潮の先頭となりにき。かの中和自然なる折衷的手腕は遂に早稻田派作家に俟たざるべからざりき。

新作家勃興の氣運熱するや、坪內逍遙の指導せる早稻田專門學校文學部は、多數の創作家を簇出せり。就中小說の作家としては後藤宙外、水谷不倒、島村抱月、三木天遊、繁野天來、伊原靑々園等あり。『早稻田文學』を始め『文藝俱樂部』『新小說』等に其の作を揭げ、遂に三十年自家の經營に成る小說雜誌『新著月刊』を發刊するに至り、新進の銳氣旺盛なる事、恰も前期初頭に於ける硯友社の如くなりき。是に於てか評壇此の二者を對比論評する者多く、所謂早稻田派は小說界に於ける一大勢力となり、硯友社と角逐して新進の文壇を二分するの觀ありき。且彼等は概ね相當の學

後藤宙外 「ありのすさび」

識素養ありて、一方に於て批評家たる能力を有したりければ、硯友社の才人等が默々と語らざるに反し『早稻田文學』を中堅として諸種の刊行物に、逍遙流の記實的論評又は精到平正の議論を掲げ、以て重きを評壇になせり。

批評家としての彼等を論せんは暫く措き、創作家としての方面より見れば、彼等の先頭は宙外不倒の二人なるべし宙外の現れしは蓋し二十八年作「ありのすさび」に始る。此の小說は翌年『青年小說』に收められ、失敗落魄の實業家家庭の圓滿を破りて懊惱遂に發狂し、妻亦煩悶病を發して死すといふ筋を叙し、煩瑣に流れ說明に過ぐるの弊ありと雖、人情分析の筆機微に入り、心理變化の描寫精緻を極む。次て「闇のうつゝ」を『新小說』に掲けぬ。教育もなく節操も辨へぬ勝氣一方の孤女が、零落せる家道を恢復せんとする努力と、之が手段を否認する世間の道德との衝突の爲に蹉跌相次ぎ、遂に飜然志を世に絕ち山に遁るといふを脚色となし、心理の描寫前者に劣る所あるも文章精錬情景並び至れりと稱せらる。次で三十一年「思ひざめ」「亂れ心」「白露」等の佳作を出し、多く心理の精微なる消息に描き入る。

宙外の作概して平正淡雅、春野分け行く流水の如し。心理の機微を捉へんとして、好んで神經質の人物を描き、又好んで自殺や情死などの結末を取る事、或は柳浪の如く、或は鏡花の如くなるも、心理を描いては柳浪一葉の如く刻劃ならず。神經質の人物を寫しては鏡花柳浪の如く甚しからず。自殺情死を筆にしては柳浪の如く悲慘ならず。然れども人情の委曲を盡して精緻老熟群を拔き、所謂心理小說の陣頭に立ちて一葉柳浪に接踵し、新作家としては、鏡花の觀念小說と共に斯界の二潮流を代表せり。唯其の缺點は、描寫精細に過きて煩瑣冗漫に流るゝに在り。

蓋し宙外一方に於ては戯謔滑脱と注意周到との資質を逍遙より受け、他の一方に於ては深刻悲慘と葛藤煩悶との趣味を新思潮より受け、二者融合して此の折衷の風を生せしなり。故に彼れの作は客觀的寫實の門より出でゝ而も純然たる其の者ならず。むしろ主觀的心理的ならんとす。是彼が特質の第一なり。次に宙外の特質と認むべきは田園的色彩と家庭的趣味と是なり。田園的色彩は當時の小說にはむしろ缺乏せる處、知名の作家概ね東京の人たるを以て、取材の範圍都會を出です。會々田園を寫すも觀察皮相に止まりて情景眞に入らず。宙外は此の點に於て確に孤尊の價あり。此の事實に附帶して考ふべきは叙景の筆力なり。そ

も小說中の自然の描寫は、逍遙紅葉等より甚しく疎外せられ、露伴一葉に至りて稍注目せられしも未た宙外入神の筆に及はず。「ありのすさび」の萩の湖の曉色を敍せる條、「闇のうつゝ」の末段野中の荒祠を寫せるあたり妙趣眞に掬すべし。家庭的趣味の饒多なるは彼の特徵として總ての作に亘り、從て敎訓的なる點少からず。思ふに彼や靑年新進と稱せらるゝも、年齡既に長ず。其作の平淡にして老熟せる、啻に其の資質と敎育とのみに因るに非さるか如し。

水谷不倒

不倒の現れしは少しく後れたり。二十九年「枯野の眞葛」等を『早稻田文學』に載せ、『新小說』發刊に際し、第一號に「鑄刀」「薄唇」二篇を掲ぐるに及び、作家としての目定まり、續て『新著月刊』等に數篇の作品を掲けたり。總して之を言へば、其の想に神韻なく、其の筆に精彩なく、爲に往々陳腐平凡などの酷評を受くと雖、平淡自然の境地に一脈人生の機微を寓せる所亦趣なしとせず。蓋し不倒素と江戶文學の研鑽家にして、深く巢林子八文字屋に私淑し、逍遙よりも長せる齒を以て始めて小說壇に現はれ、後進作家なれども、もはや靑年に非ず。故に其の趣向往々江戶文學の面影を存し、「鑄刀」の如きは多少近松の某戲曲を想起せらるゝ所あり。其の文章の深刻なる事象を寫すに適せずして、むしろ輕快諧謔の作に宜しきは、亦私淑する所に出つるか。かの靑春激越の調に乏しきか如きは、思ふに宙外と轍を同うする者なるべし。

島村抱月

二子に踵を接して起りしを抱月となす。三十年作「女をと浪」、翌年作「月暈日暈」共に哀深き夫婦心中の物語なり。着想筆力特に目を側てしむる者なしと雖、布置整然、細心なる注意全篇に行き亘りて弛廢する所なきを取るべしとなす。同年の「墨繪草紙」も亦此の特長を發揮して佳作ならずとせず。蓋し抱月は同門作家中最學識ある者、特に美學及美辭學を以て本領となし、最理論的の頭腦を有し、從て批評家としては夙に儕輩に拔んで、穩健中正を以て名あり。是を以て彼か創作おのづから此事實を反映し、甚しき光なき代りに甚しき瑕なく、哀れに情深き所あれど、奔放激越の趣なく、唯其の結構布置の劃然として整へるに驚く。

三木天遊　繁野天來　伊原青々園

天遊と天來とはむしろ新體詩家として知られ、小說の作は甚多からずと雖、共に詩的空想に富めるを珍となす。青々園は滑稽の作に富む。而して滑稽の存する所、言語形式の皮相に非ずして、意義內容の裡に立入り、おのづから大人を笑はしむるに足り、文章亦圓熟せり。

要するに彼等の創作は、概ね着想穩健、筆意平淡にして、其の長所は細心周到なるに在り。短所は熱烈なる情緒を缺くに在り。之を硯友社の新作家に比するに、同じく寫實の海に生ひ立ち、新潮流に養はれし者なから、硯友社派は宛も逆捲く瀧津瀨の如く、逸氣奔放想像の馳するに從ひ、情熱の之くに任すの趣あり。早稻田派は淀みなき野川水の如く、温雅自然の姿態を盡さんとす。而も一身を創作に献じ、終生小說家として立たんとするに至つては、早稻田派は遂に硯友派に一步を輸せざるべからず。思ふに後者は批評家たり學者たる能はざる人々なるに反し、前者は兩方面を兼ぬるを以て、會一方に專なるを得ざりしか。果然抱月美學者となり、宙外『新小說』の批評家となり、不倒江戶時代文學史家となり、靑々園劇評家となり、他諸人亦漸く創作壇に遠ざかりぬ。

新進の心理小說家は略之を說き盡しぬ。乃ち去りて先進作家の心理小說を述へんとするに當り、新進中の別味たる小杉天外の諷刺小說を附記せんとす。而も天外を說かんには先づ其の前驅者にして且師たる綠雨より叙ぶるを便となす。

齋藤綠雨

前期の批評家諷刺家として「小說評註」「刑鞭」の筆者として其の名高かりし正直正

太夫は、此の期に入りて綠雨の名を以て諷刺の才を小說に試みたり。二十八年『國民の友』に出し〻「覿面」「翌年」『太陽』に出し〻「雨蛙」の如き即是なり。前者は意志薄弱の書生、世間の所謂女房等を譏刺し、後者は自惚と沒常識との化身ともいふへき所謂文學者輩を嘲罵せる者にして、諷世嘲俗、冷笑骨を穿ち、熱罵髓に入り、筆鋒銳利警句應酬に暇あらず、其の文章も亦奇絕妙絕、特に前者の如きは一氣奔放の走り書、文體修辭共に珍奇類なく、而も辭句洗練、當代に卓越せり。げに此の二篇は、綠雨の特質を最よく表彰せる者にして、諷刺小說中の珍品たり。

小杉天外

天外は綠雨の門に入り、鬼才が諷諧の筆を傳へて夙に文壇に現はれたり。二十四年『國會』新聞に「改良若旦那」の短篇を掲けし以來、二十八年「奇病」二十九年「卒都婆記」「改良若殿」三十年「ひとり者」「珈琲店」其他數多の創作を出し、宙外等と共に新作家の名を恣にせり。就中「奇病」は國會議員を刺り、「卒都婆記」は所謂社會主義論者を諷し、「改良若殿」は痴愚の華族を中心として世上百般の俗物を罵倒し、總て筆路輕妙、譏刺奇峭にして共に當代の佳作たり。

げに天外の作は深刻沈痛の域に遠く、性格心理の描寫亦其の能に非ず。加ふる

に筆意頗る同情を缺く。然れども從來諷刺といへば魯文一流の淺薄幼稚なる者のみ行はれしに方り、事象を平坦自然の境に取り、人物と社會との所有缺陷に向つて銳利なる諷嘲を投する所、靈犀奇警人を魅するあるか如きは、洵に斯壇の進步といふべし。げに彼か滑稽は、動もすれば審美上何等の價値なき所謂落ち。に近からんとす。然れども、從來滑稽といへば、瓜生政和南新二等の如く、強て笑を求め、道化を盡し、以て匹夫匹婦を笑はしむるに過ぎさるに方り、社會や人物を觀察するに常に皮一重の裏に及び、美しく實しき外觀の裏に潛める汚く愚かなる好笑的材料を求め、之を暴露し來りて乃ち哄然大笑するか如きは、以て識者の頤を解くに足り、多少諷滑の體を得たりといふべし。彼は文才の縱橫なると諷嘲の奇棘なるとの點に於て、到底綠雨の敵に非ず。然れとも天外の筆、綠雨の神經質なるに比して甚鷹揚に、綠雨の腥氣毒焰を吹くか如くなるに反して溫藉輕妙の致あり、綠雨の世上一切の者を嘲り盡さんとするに反し、專ら諷刺の筆鋒を虛誕と醜陋と愚劣とに向けたり。要するに天外は新文壇寫實の園に生ひ立ちし一種の異草にして、滑稽諷刺の花は此時始めて新粧を凝し出てたりといふべく、綠雨の尙舊文學の面影を存して

幸田露伴

過渡の地位に立てるに異なり全く明治の新時代に入れりといふべきなり。

後進作家の擧くべき者には尙遲塚麗水、三宅靑軒、松居松葉、堀江松華、前田曙山、太田玉茗、藤本藤蔭、有本樵水、緒方流水、黑田天外、半井桃水等あり。多少の新作を發せり。

紅葉門下の才筆濟々たるに對し、露伴門下は甚多からず。中谷無涯は二十九年始めて現はれ少しく後れて田村松魚藤本夕飈の二人現はれ、多少狂熱を帶べる彩筆を揮ひしも、惜いかな、鏡花風葉の如き發展をなさゞりき。

三　先進作家の心理小説

旣に後進作家の勃興するや、其の直接の刺擊に勵まされ、又評壇後進を揚けて先進を抑ふる者あるに激せられ前期に名を爲しゝ先進作家復び振ひ立てり。而も其の作風大に前期と面目を異にし、悉く心理的寫實小説の新彩を帶びて現れたり。露伴以下紅葉に至るまで、一として然らさるはなし。

『五重塔』以來暫く雌伏したりし露伴は、二十六年『風流微塵藏』の大篇に着手し、初篇「笹舟」を『國會』に掲け初め、爾來連載二十九年に及び、「菊の濱松」「獨寐」及「雲の袖」の諸篇を

「風流微塵藏」

出し、無前の大篇として文壇の呼び物となりぬ。然れども『微塵藏』は未だ其の局を結ばず、且つ局面廣大事象複雜なれども、既出の分のみを以てすれば各篇唯一二人物の連鎖あるのみにて、全く別の舞臺を現じ、其の間に有機的結合の見るべきなきを以て、大局の歸趣茫として知るべからず。唯其の部分的に現れたる巧妙なる描寫に至りては、さすがに天來の趣あり、人事の表裏を寫して痛切に、人情の秘奧を描破して靈犀なりといふべし。

此の篇出でゝ褒貶の聲交々起りたりと雖、大體に於て『五重塔』以來、現實の觀察に入りて一段の進歩をなせりといふに一致せるか如し。思ふに露伴の作風は明に一變せり。然れとも彼が本領たる散文抒情詩の幽玄を離れて現實描寫の精緻に入りし者、果して彼れか爲に慶すべきか。之を人物に見るに、人夫れ夫れの性格を描いて躍動の趣あり、心理變化洵に自然的發展の妙を盡せり。然れども是等の人物詮すれは皆同一性格にして、悉く作者自身に粉本を取れる者なるに似たり。彼等は概ね酸いも甘いも嚙み分け、人情世態を洞觀するに過ぎ、動もすれば作者の人生觀を時所に應じて述べ出すべき傀儡とならんとす。されは人生の奧秘人情の機微、多くは說明に過ぎて讀者想像の餘地を奪ふ。作中人物か滔々數千言、人情哲學を論ずる所、此の作者に非されは望む事能はさるも、其の間又讀者をして嫌厭せしむる者なきに非ず。蓋し此の篇或は作者胸中の蘊蓄を披瀝せる人生哲學たるを得べしと雖、美術品としての成功はかの抒情詩的高調に達せる『五重塔』等に比して未だ優れりと言ふを得ず。故に本期に於て露伴の露伴たる所以の作を求むべくんば、『微塵藏』よりはむしろ『新浦島』を取らんのみ。

「新浦島」

『新浦島』は二十八年『國會』に連載せる者にして、浦島傳說の上に想を構へたる一部の抒情詩的小說なり。後纒めて三十五年刋の『露伴叢書』に收む。浦島太郎龍宮に趣きてより、其の家を承けし同次郎の子孫相傳へて百世、明治の聖代に至りて一個俊秀の詩才浦島次郎を生じぬ。少時鄕を去りて京に遊び、天成の詩才忽に當世の寵兒となり、邊海の漁子榮華と戀愛とに身を沒して鄕を忘るゝ事數十年。偶々戀に敗れ榮達に敗れて玆に悵然望鄕の念を生じ、飄然として悟れば漁夫の生活なつかしく、二十五歲の壯年復父母の膝下に歸りぬ。歸れは老親世を讓らんとて傳來の玉手箱を渡しゝに、異寶奇瑞を現じて父母一夜に登仙せしかば、次郎始めて仙緣

あるを知り、天界俄にゆかしく、九轉の大丹を煉りて仙道を得んとの大願を起しぬ。而も仙道成らず、憤りて魔道を修し、一向專念大地震動して遂に通力を得、或は驪山の靈泉に浴し或は蘭陵の美酒を味ひ飛行自在の身となりしが、一夜終に化石して靜に生死の外にありきといふ。是れ新浦島の梗概なり。通觀すれば前半は現實の分子多きを占むるも、後半は全然超絶界に入り、詩情段一段昂進して最後の大發揚に至る。此の結搆は「對髑髏」以來作者固有の手法なり。

此の篇の骨子は浦島傳說に唐土神仙譚の附會して構成せられたる悟道の寓話より得來りし者にて、斯道に入るべき三階段を示せる寓話を取りて直に理想的生活に進むべき四階段を表せしに似たり。物質的榮華の生活は清淡自然の生活に若かず。清淡自然の生活は超絶的神仙の生活に若かざるを說けるは、かの寓意的仙譚なり。學と詩と富と戀とは未た以て人を解脫せしむるに足らず。一切世間の欲を絕ちて身を一竿に托するも亦然り。凡界を離れて神仙の間に遊ぶも亦然り。生死の外なる寂靜の境に入るに至つて始めて眞の解脫を得べしとなせるは即ち、露伴の「新浦島」なり。兩者の間多少傳說の發展あり、形式に大差なきも意義は全く更新して時代の色彩を帶べり。思ふに浦島傳說は本邦の傳說中最發展せる者の一にして、萬葉集風土記の古より「新浦島」に至るまでの發展は他傳說に見さる所なり

之を小說として見るに、其の超絶的なるは遙に從來の作に過ぎ、理想的なるは更に甚し。されど其は現實を超絶せる一場の仙譚的空想に出で、著しく冷靜の調を帶びたり。『五重塔』以前の作を以て之に比するに、彼には人生に執着する熱情あり。此には人生を達觀せる理性あり。現實以外奔放なる空想の行く所を恣にせる態度、兩者其の軌を一にすと雖、通篇の趣味傾向に著しき差あり。此の新傾向は疑もなく『微塵藏』以來の變象にして、篇中各人物の人生觀、人情觀、女性觀、はた社會觀等滔々揮灑し去る所、一に作者か凡百の人事に對する平生の達觀悟入に出でたり。

「髯男」

「新浦島」を以て作者の本色を現はしゝ者とすれば、二十九年『讀賣』に揭けし『髯男』は彼が作中の異色として注目するに足るべし。武田勝賴の家臣笠井高英といへる髯男が覆滅せる主家を擁護せんとする苦衷を描き、義あり情ある甲州武士の面目を發揮せる歷史小說にして、文章瑰麗奔放『風流佛』以後の名文と稱せられたり。

既に述べしか如く、露伴の作には常に作家の影を宿せり。彼か小說を讀む毎に其の人格の道裡に躍動するを覺ゆ。蓋し露伴は江戸兒の粹。覇氣稜々たると共に又よく物に凝る。而も藝術に對する熱愛未だ嘗て衰ふる事なく、從つて讀書の嗜好極めて高く、其の造詣蘊蓄常に創作に表はる。此の點に於ては其の風尙頗る紅葉と相似たり。然れども露伴は固と深く人生を洞觀し、冥想沈思其の眞諦に觸れんとする人なり。此の性格は彼を驅つて深く佛典に參せしめ、老莊に入らしめ延て悟道の人たらしめんとす。且つ彼は神祕を認め、神仙を究め、佛力を信じ神籤易卜を拒まず。總て信念の固き道念の高き、當代作家に多く見る能はず。淺薄なる寫實の風天下を吹き荒める時、獨り高遠なる詩的哲學的理想を小說に寓せたりしは一に此の性格より來る。此の點に於てはいたく紅葉と趣を異にす。且つ露伴の文を行る、逸氣奔放千言立ろに成り、而も絢爛瑰麗の致を極むる事頗る紅葉の遲筆刻劃に反す。彼が作は忠實なる實世間の描寫、乃至奇警深刻なる實社會の觀察に出つるよりも、むしろ人生に對する沈思冥想より來る。されは露伴の如きは、憬仰すべき人にして模倣すべき人に非ず。時流に超然たるべき人にして門下を養ふべき人に非ず。是れ紅葉門下の多士濟々たるに反し、露伴の門逐に俊髦を見る能はさる所以なり。

言文一致體の主唱者として、「夏木立」「胡蝶」の作者として、盛名一時に鳴りし美妙齋は、二十四年以來消息を小說壇に立ち、新體詩の作家としてのみ聞えたりしが、此の頃に至り再起つて小說壇に現はれ、前の盛名固とより望むべからすと雖、尙健筆多作、當年の意氣を存し文界をして此の才人の健在を慶せしめぬ。

二十八年の「お千代」「鰻旦那」翌年の「若白髮」は、趣向の平凡なるに係らず、獨得の言文一致、當年の嫌味を脫して瀟洒圓熟の境に入る。此の三篇は、共に評壇の一問題たりし狹斜小說にして、寫實の手腕益精妙に、進んで心理の細寫に及べり。此の點に於て美妙亦新潮流の影響を受け、柳浪の深刻なる者なしと雖、穿細或は之に過きたり。爾來數篇の歷史小說及狹斜小說を經て、三十年「閻魔地藏」「可憐狂」を出すに及んで、或は寫實の筆力を以て、或は文章の妙を以て多少文壇を動かし、特に「可憐狂」は律義一徹の老父が至誠、自墮落の娘を悔悟せしむる筋を描き、評壇佳作の目ありき。

げに美妙の作は筆力を以て優る。惜むらくは同情を缺き、小說家として願はし

き熱血と性靈とを具へず。故に筆鋒愈銳利にして觀察愈皮相に走り、描寫益巧にして讀者の肺腑に入る事益少し。好んで狹斜の巷を描き、特殊の通と穿ちとを衒うて脂粉の氣輕佻の風厭ふへき者あるは、彼か第一の缺點にして、所謂內容のいや味は總ての作物に滿ちたり。加ふるに當時多作に過ぎしかは、筆漸く荒み、想亦漸く型に入り、好作家遂に唯文章家の名を止めしのみ。

硯友社の小說家にして少年文學に名を得たりし漣山人は『日本昔噺』『日本御伽噺』『幼年讀本』等を編し、雜誌『幼年世界』『少年世界』等を發行して益其の本領を進むる傍、時に小說を出して特長なる輕快の筆を揮へり。二十八年、小說界の潮流か人生の深刻なる方面に向ふや、山人『昭君怨』を作し、淸淨無垢の華族の處女が、破產せる父子爵の犧牲となりて高利貸の新平民に嫁く悲慘の運命を寫し、續いて出でし『燒火箸』等も亦現社會に對する諷刺的筆致を見るべし。然れとも山人の本色は飽くまで平易圓熟なる文藻を以て無邪氣なる情緖を描くに在り。二十八年『國民の友』に出し、「臺日記」の如きは、正に其の代表的作物なるべし。「臺日記」は鷗外の「舞姬」に似て、獨逸留學中の一學生と薄命可憐なる金髮少女との情事に關する詩趣橫溢の着想を

自敍日記體にものせる短篇にして、文情淸高塵俗の氣なく、詞章亦言文一致の妙を盡せり。

前期の寫實小說家にして、文學一轉の今日、多少の述作を出して世人の記憶を新にせる者には、嵯峨の屋、抱一庵、篁村、採菊、思案、忍月、湖處子、三昧、雪後(花痩)、乙羽等あり。就中嵯峨の屋は例の言文一致益圓熟し、短篇集『文の庫』『古反古』を始め各雜誌に揭けし作少からず。抱一庵は思軒と共に『報知新聞』に在り、曾文學の飜譯に名ありしが、創作に於ても多少の績を殘せり。篁村は老練妥平の筆致例の如く、三昧は傳奇小說の外世話物に筆を染め、文章は漢文流の奇氣を帶びたり。雪後と乙羽とは硯友社員にして、共に短篇を諸雜誌に揭け、才筆の譽ありしが不幸にして早世せり。

上來先進作家を列敍して今や一紅葉を餘すのみとなりぬ。紅葉は今期に入りて速りに外國文學の飜案物を出し、創作に用ゐし圓熟渾成の彩筆を以て之を飜案に試みたり。之より先、紅葉は「朧舟」『夏小袖』等既に此種の者に指を染めたりしが、二十七年以後に至りて著しく之に傾き、創作却て兩三篇に止まるに至りぬ。即ち二十七年の『隣の女』二十八年の『不言不語』二十九年の『冷熱』の如き、當時有名の作は、皆飜

「不言不語」

案に屬せり。

就中「不言不語」は紅葉が傑作の一にして、又是等飜案の代表たる者なり。『讀賣』に出づ。新參の小間使環が、目見えの當時より疑團晴れざりし笠原夫人の憔悴煩悶嗟嘆の原因、不言不語の胸中を探求せんと苦慮する筋を經となし、主人の弟民之介が環に對する戀語りを緯となし、遂に事變の偶發より一家に潜める秘密が隱約の間に推測せらるゝに至る始末を環の自叙體に描ける小說にして、一篇の生命は、讀者が此の秘密の伏在せる家庭に對する不安の念と探求の心とを繫いで最後の大破綻に導く所に存す。されば其秘密の闡明せらるゝに及びて感興頓に去るは亦免れ難き缺點なるべし。唯末段夫人が懺悔の爲罪滅しの爲、病兒を救うて自ら犧牲となる所、慘憺たる悲劇的結局なから尙一道の光明を見る。民之介環の情話は素と一挿話に過ぎずと雖、陰森の氣充滿ちたる大筋に對照して、其の凄慘に過ぐるを調攝し、兩々發展步趨を共にして團圓に向ひ、悲劇の終結を彩るに愛の成立を以てするなど、有機的結合の頗る周密なる者あり。然れども、全體の趣向及人物は、到底本邦の者に非ず。又紅葉の筆致に適應せる者に非ず。而も尙多數の愛讀者を有ちしは、其の探偵的趣向の人の好奇心を繫げると、其の文章の銑練完璧に近きとの致す所なり。

「多情多恨」

然れども文運興隆文學一轉の盛時に際し、紅葉の製作はかゝる飜案物に止まり、然らざるも『四の緒』の如き飜譯物、『片癡』『名曲クレーツェロワ』『笛吹川』等の合作物に過ぎざりしかば、批評家は漸く彼が健在を疑ひ、中には想泉涸れたりとまで罵る者あるに至りぬ。偶々『讀賣』に載せし創作「靑葡萄」は、門人某か靑葡萄を味うて不測の大病に罹りし一夜の出來事を叙へしに過ぎざりしかば、悲觀的批評益其の度を高めたり。是に於てか紅葉奮然と立ち、二十九年「多情多恨」を『讀賣』に載するに方り、宣して曰く、是れ俳諧に非ず、雜報に非ず、飜案に非ず、合作に非ず。實に快腕一揮の創作なりと。乃ち連載數月に亘り、前後兩篇五百五十頁の長篇をものせり。

「多情多恨」は甚しき神經質の男が最愛の妻を失ひて追慕の情に堪へず、懊惱日を重ねて薄らがず。寂寥の感壓身を襲ふ狀態を描き、以て失戀者の情緒を委曲に精寫せし者にて、打見たる所波瀾なく奇巧なく變化なし。其人物を以てすれば、重なるは主人公鷲見と親友葉山、其の妻お種との三人に止まり、舞臺を以てすれば鷲見

葉山二家の間を出でず。事件を以てすれば鷲見が悲歎懊惱を反覆するに過ぎず。時日を以てすれば百五十日にだも滿たず。人物の寡少と脚色の單純とは、明治小説の新傾向なりと雖、かくの如く甚しき者未だ多からず。而も四十六回五百頁の長編をなせるなれば、從來の小説の刺激强烈なるに慣れたる人をして、或は冗漫と感せしめ、或は無趣味と感せしめ、或は鷲見の如き性格は國民に存せずとさへ斷せしめぬ。然れとも「多情多恨」の描かんとする所は、依戀の情緒其物なり。寫さんとする所は、此の情緒の最微妙なる作用なり。粗大なる想像、淺薄なる同情を以てしは、往々看過せらるべき最微極細の消息をも隈なく具象化するは、即ち此小説の極意なり。吾人は既に粗大なる感情の描寫、强烈なるそれ、及深刻なるそれを見たり。未だ此の小説が描けるか如き平淡微妙なる者を見さるなり。又人物の性格に就ても、吾人は既に幾多の英雄を見、幾多の才子佳人を見、はた夥多の片輪者を見たり。未た此の小説の人物の如く平凡にして而も面目躍如たる者を見さるなり。變人と言はれし理化敎師鷲見の性格固より善く、温良貞淑の家妻お種も亦よく、洒脱にして俠氣あり怜悧にして情理具はる實業家葉山最善し。若し夫れ一篇の結末の何等段落を劃すべき事件なく、唯怏々の思を殘して之を閉づるが如きは、新派傾向の一要素にして、其妙趣を解せんには多少の新敎養あるを要す。之を要するに、「多情多恨」は平淡自然寫實小説家としての紅葉の特質を最明瞭に發揮せる者なり。觀念小説以來、新進作家競うて深刻の想を凝し先進諸家亦之に動さるゝに際し獨り平淡の境地を選びしは頗る彼が立脚地を見るに足る。彼が此小説を草するや、曰く、世間の小説は珍味なり。我家の小説は米の飯なりと。斯間の消息を道破して餘ありといふべし。

「金色夜叉」

斯の小説は精練なる言文一致體にて書かれたり。是より先、美妙齋か盛に此體を用ゐし頃は未た之に倣はさりしが、一たび「隣の女」に成功するや、「青葡萄」「冷熱」等にも之を取り、遂に「多情多恨」の大篇に之を用ゐぬ。さすがは詞章の大家、一たび振へば優に美妙嵯峨の屋の諸先輩を凌駕し、恰も雅俗折衷體に一流を出しゝか如く、言文一致の最醇化せられたる一體を創め、洗練平淡、よく斯文の儀表となり、第一期以來の言文一致體も玆に始めて稚氣を脱し、街氣を離れし文章となりぬ。

「多情多恨」の終を告くるや、紅葉は更に他の雄篇「金色夜叉」に着手し、三十年一月よ

り『讀賣』に連載せり。高等中學の秀才間貫一、已が寄寓せる鴫澤家の一女お宮に婿たるべく定められ、相愛して歡樂の未來を夢想せしに、美色に誇り富貴を冀ふ婦女通有の缺點はお宮をして富貴の奴隷となりて貫一を棄てしめぬ、貫一、憤怨深く骨髓に徹し、決然宮と袂を分ちぬ。之を此小說の序幕たる前編の梗概となす。斯くて傷心の貫一は絕望の餘りに自殺すべきか、はた白刄を宮の胸に擬すべきか。あらず。彼が金に見易へられたる無念は、空しく自殺せんには餘りに强烈なり。彼か怨恨は平凡なる復讎を敢てせんには餘りに深刻なり。彼は人の賴むべからず世の依るべからざるを悟り、乃ち總身の欲を金に集めて世と戰はんと思ひ定め、遂に彼の極惡非道の高利貸と爲り了りぬ。かくて貫一は男らしき復讎を加へ、前の失望と怨恨とを雪し得て、然る後正に死ぬべしと慰めたりしも、其の情を矯め己を枉けて魔道を行ふ痛苦と、之よりも遙に大なる失戀の痛苦とは交々身を責めて、肉瘦せ色疲れ、形神共に破れて面を蔽へる陰日に黯きを加へぬ。中編は即ち此始末を敍す。宮は貫一に別れてより始めて心の奥に潛める切なる戀を覺りぬ。げに宮は胸中最奥の眞要求を知らざりき。彼女の心裡には二個の要求ありき。愛と富と是なり。而して二者の一致せざるに臨みてや一時盲進して富に就きぬ。而も其富を得了りし時始めて自己の眞要求は其戀人と共に此富を樂むに在りしを悟りぬ。今にして悔いぬ。二者共に得ん事の難き時、其の孰れを取るべきかを知るの晚かりしを。別れて四年、會々貫一に邂逅して心火洞然と燃え上り、赤繩一度斷せしも又繫かるべき時のなからずやはと感じ、遂には彼人の恨解くべくんば此富棄つるに惜しからずと思ひなりぬ。斯る間に貫一は蝟集せる所有誘惑を却け、初一念を徹せずんば止まじと決せり。是後編の大概なり。顧れば起稿以來正に三年を經、三編四百五十頁に上り、而も尙完結に遠し。貫一の痛苦と宮の煩悶とは如何に發展せんとすらん。

吾人をして紀年の都合上茲に暫く梗概敍述を中止し顧みて之が評論に移らしめよ。「金色夜叉」の出づるや、着想に空前の異彩あると、脚色の劇的變化と活動とを具ふると、主人公が敎養と地位とありて而も靑春の情に滿ちたると、詞章の精練絢爛なる時文體なるとは、敎育ある中等社會に於ける靑年男女の讀者をして悉く之に心醉せしめぬ。先づ著想に就て言はんか。新思潮起りてより露伴鏡花等の作

世に行はれしも、露伴の理想小説は膏粱の美味却て重ぬるに厭き、鏡花柳浪等は事物を極端の場合、暗黒の一面に取れるを以て、好奇一時の念を釣り得べきも、永く同情を繋き難かりき。況やかの狹斜小説に於てをや。是に於てか、小説の内容は益深かれ、理想は實の上に立てる者なれ、取材は中等社會に於てせよ、舞臺と人物とは尚少しく高潔なれとの要求は讀書社會に沓かりき。「金色夜叉」は即ちこの幾分を滿さんと試みし者なりき。貫一と宮との戀愛、淸き事花袋の小説に見るが如くにして、而も斯くの如く幼稚ならず。貫一か痛憤と無念との反動として夜叉の家業に身を墮しゝは多少一葉の「われから」に似たりと雖、而もかくの如く單純ならず。特に宮か罪の自覺によりて激烈なる煩悶に陷るが如きは從來の小説に多く見さる處なり。思ふに紅葉の才藻よく世運と推移し、泰西小説に於ける造詣亦漸く深く、其の影響の創作に現はるゝ事少からず。罪の自覺に懊む宮と、之を恕宥せざる貫一とは「不言不語」の笠原夫婦に淵源を求むべく、貫一か境遇の大變化は正しく泰西大家の作に其の粉本を求むべきなり。

次に脚色を見んか、この小説ば啻に情操を描けるのみならず、尚事件を寫せり。「多情多恨」の徹頭徹尾情操の小説なりしに反し、頗る劇的變化と活動とに富み、波瀾の起伏遙に從來の作品に超えたり。後年小説の戯曲化の流行するや、紅葉の小説にして舞臺に上りしは、實に之を以て嚆矢となす。進んで其の文章を見んか前期以來の西鶴流雅俗折衷體に非ず、「多情多恨」に光彩を放ちし言文一致體に非ず、純然たる一種の時文體にして、字句烹煉、細寫委曲を極む。

斯の如きは「金色夜叉」か新敎育の下に立てる靑年男女にもてはやされし所以なり。之を「多情多恨」に比するに、總ての點に於て著しき對照を見る。瀟洒に對する濃艶、平淡に對する絢爛、單調に對する變化、沈靜に對する活動、皆是全體に亘る差異なり。二者各得る所あり、軒輊容易にすべきに非されども、苦心の度を以てすれば「多情多恨」恐らくは「金色夜叉」の上にあらん。蓋し前者に在りて成功の域に達せんは、凡筆の能くすべきに非ずと雖、紅葉の才筆を以てすれば、後者の成功難きに非ざるべし前者を以て紅葉の所謂米の飯とすれば、後者は所謂滋味なるを免れず。作者自身も亦、後者は苦心の作に非ずと稱す。且つ其の文章に於ても、作者自身之を『頴才新誌』的なりとして擯け、言文一致を倚んで之を理想的の地位に進めんと企て

たりといふ。要するに「金色夜叉」は紅葉の傑作なりと雖、決して其の本領に非ず。得意の作はむしろ「多情多恨」にあらん。

第二節　新體詩

「國民の友」及「文學界」の詩人が、七五調の短篇を以て新體詩界を領せし時に方りては、斯道の發展は小說界に比して甚しく遜色ありしが明治二十八年以來俄然として長足の進歩をなし、面目頓に一變するに至れり。

是より先き、國家的大戰爭ありしや、事に文筆に從ふ者競うて之を謳ひ、「拔刀隊の歌」以來絕えて久しき軍歌再び世に出で、戰爭中の事物を詠める新體詩は斯道にたづさはる所有文人に試みられたり。然れども、是等戰爭詩歌は例の如く一時的傾向を帶び、逸作亦遂に出づる事なく、影響從つて殘る事なくして其の跡を絕ち、七五調の擬古的短詩再び詩界を領しぬ。思ふに此潮流の來るや實に久し。遠くは新聲社の詩人より「國民の友」の詩人を經て「梅花詩集」「文學界」の諸詩人に至るまで、古語の智識の深淺之を驅使するの巧拙措辭の手腕の熟否に多少の等差ありと雖、概して用語聲調に於ける擬古派たるを失はざりき。今や此の作風益發展して詩壇の大勢力となり、遂に「帝國文學」に現はれたる文科大學の詩人に繼承せられ、詩想の淸新を加へ、詩形の長大を致すと共に、用語の雅醇なる聲調の流麗なる、遙に湖處子殘花等從來詩人の作に抽んでたり。

外山ゝ山

此時に方り、十四年前新體詩創始の運動をなしゝ外山ゝ山仙士は、再び一新體を提出して一世の耳目を聳動しぬ。二十八年二月「帝國文學」に揭げし「旅順口の英雄可兒大尉」は、實に此の新運動の第一着手にして、續いて「輪卒」「忘るゝな此日を」「我は喇叭手なり」等を出し、尙之に關する意見及其の朗讀法をも發表せり。而して是等の詩篇たるや、いたく從來のと趣を異にし、先づ七五又は五七一聯の詩形を打破して最自由なる無律沒韻の散文的句節を採り、次に典雅流麗にのみ傾ける古語を棄てゝ漢語と現代語とを交へたる日常普通の言語を用ゐ、次に作者の創意に出でし獨得の表情的朗讀法を試みて其詩形と用語との散文的渣滓を除かんと勉め、名けて朗讀體と言へり。

「開闢以來未曾て今日の如く我邦人の名譽の高大なるはなし。

良運なり。幸福なり。此の時期に遭遇せるの日本人は。『可見大尉』

「新體詩歌集」

右はたゞ冒頭の二行を出しゝのみなりと雖、以て其一般を推すに足るべし。此の體一たび出でゝ評壇の排擊盛なりしも、作者は之に屈せず、多少意見を同うする人々と共に『新體詩歌集』を編み、同年秋之を世に問へり。收むる所、ゝ山仙士作十一篇上田萬年中村秋香阪正臣作長短七十九篇。中數首を除けば、悉く七五の舊調を脫し、而も大多數は「可見大尉」の型式に依る。

井上巽軒

比沼山の歌

此に於てか、評壇詩形論の沸騰を來し、律語詩非律語詩の論議甚盛なりき。然れども、此論爭は遂に何等の效果を殘す事なく、創作界は依然として律語詩に適き、七五調に歸しぬ。されば彼の井上巽軒が長詩「比沼山の歌」を出すや、亦七五の舊調を襲ひ、革新の範圍を用語の種類と思想の規模とに限れり。「比沼山の歌」は二十九年初『帝國文學』及『太陽』に掲けたる叙事詩にして、丹後風土記なる羽衣傳說を骨子となし竹取物語を血肉となし、天人の志は信を本とすといへる思想を一篇の理想となしたる者。完結を見ずして止みしも篇章節句形式整齊、空前の長詩なり。作者の詩論を見るに、大體「可見大尉」の作者に同じと雖、未だ一言七五調の非難に及はず、又律語拘束の害を說かず。唯用語の豐富遒勁なると旨意の明瞭なるとを以て、擬古派に對する優勝の理由とせるのみ。

外山井上二家の運動は、詮する所、擬古派に對する反動なりき。而して其の成果を見るに、前者の朗讀體ははやく失敗に歸し、後者の古語漢語俗語の混用も、著しき不調和の爲に、同じく失敗に終りぬ。蓋し、前者は廣義の詩即ち科學に對立する詩の意義を取り來りて、直に新體詩に附屬し、以て散文詩と韻文詩との差別を棄却したりき。否、口演法の如何によりて諧調自ら生ずと信じ、一定の律語種々に結合して万人の心律に共鳴する者即ち詩の韻律なりとはせざりき。此を以て、世の律語詩を主張する人、七五律を以て邦語韻律の主なる者となす人、詩歌は必しも謡ひ物に非ざればお自から格律を形體に求めさるへからさるを知る人、萬邦の詩歌皆一定の韻律と句節とを有するを思ふ人等、總て此の體を取らず。次に後者は、結構の壯大なる、洵に文壇の珍たりと雖長詩の價値たる内容の優秀と詞章の精美とに至りては缺陷なきを得ず。和漢雅俗の言語を混用するか如きは。選擇なく醇化なくして成功する事難し。

然らば其の內容、即詩想は如何。前者題材の狹隘なる、常に現實の事件に拘泥し而も概ね戰爭中の事象に屬するを以て、多く恒久の價値なし。彼は人事及自然の種々相を諷詠せず。幽遠の情感高邁の冥想等に至りては全然之を缺く。後者の著想はむしろ奇拔なり。神話を題材とするは、本邦詩人に取りては好箇の暗示なり。唯其の構想理に偏し、且其の根本思想を倫理的功利主義に置けるを憾むべしとす。

要するに二家の作品は、遂に大なる成功なかりき。唯彼の長大の詩形を推稱せると、用語に勁健の分子を加へ、聲調に剛强の風趣を添ふるに至りしとは、此運動が齎しゝ二個の賜なり。

斯かる間に擬古派一派は、用語の古雅なると、題材の概ね抒情的なると、作風の餘韻を尙べるとよりして、詩壇に朦朧體の名を得たりしも、其の詩想は深く主觀界にも入り、詩形は整齊、詩語は醇粹、加ふるに泰西詩歌を味ひ、總て詩的非散文的なる事遂に前二家に超え、擬古派其の物の爲に、大に光焔を擧げたり。武島羽衣は是等詩人の白眉にして、二十八年初「墨染櫻」の一篇を帝國文學に掲げて始めて斯壇に現はれ、同年「小夜砧」を出すに及んで、新詩人としての價値文壇に認められたり。「小夜砧」は西詩飜案の敍事的抒情詩にして、秋夜征人を思ふ少婦の心惱亂して夢幻の境に入り、既に戰沒せる夫の靈に伴はれて廢寺の塚中に陷るを敍して、幽婉幻怪の趣に富む。此類の思想は本邦從來の詩歌には絕て有るなく、寧ろ國民の情想に遠き者なりと雖、清新温藉縹渺として幽韻掬すべく、從來の擬古者流が、徒に詞藻の富麗を以て內容の空虛を飾る者に比較して其の間超ゆべからざる畛域あるを覺ゆ。加ふるに、詞章の典雅精練にして雅言を驅使するの自在なるは詩壇稀に見る所にして、七五四句一節をなせる者、總て四十三を以て成れる長詩讀み去りて些の澁滯を見ず、泰西語脈の混用も自然にして調和を失はず。總て新詩壇に寄與せる一新作風として推稱せらるべき者たり。爾來「詩神」「草刈笛」「月」「人生」等數多の創作皆温藉の詩思を發揮して悠容の姿致を凝らし、時に渾然として天衣無縫の慨ある者あり。此の如きは羽衣の獨壇にして、當代及ふ者無かりきと雖、長所はやがて短所の潜む所、彼の詩は情感の激越なる者、情熱の强烈なる者なく、其の調往々散文的の弊に陷り、單調の失を免れざらんとす。

鹽井雨江

鹽井雨江は二十八年『帝國文學』の初刊に「深山の美人」と題する抒情的敍事の長詩を出して名を江湖に馳せ、其より「深山の花」「故鄉の花」「磯の笛竹」等長短數篇の創作あり。之を羽衣に比するに、吟什の少きだけ題材も少く、詩想亦純王朝的にして、西詩の面影を傳ふる所少し。形式に於ても古語古格の分量多きに過ぎ、粉飾の痕少からずして、高雅悠容の姿致に乏し。唯詩形の散文的ならんとするを避くるに於て多少の苦心と成功とあり。「磯の笛竹」の如き、句節の配置、措辭の選擇に於て、各種の修辭的技巧を用ゐ、荒磯岩の松陰に夜每に憧れ出でゝ思を笛竹に吹きすます海人が子を詠じて、情緒の昂揚遙に羽衣等に超え、想髓の舊きに係はらず、一種清新の詩調に入る。雨江の特長茲に在り。大町桂月次で現はる。彼は寧ろ文章家と稱すべけれど、新體詩に於ても、純主觀の短篇、情感の激越、詩調の昂揚を以て遙に前二家に絕す。桂月の特長は詩形に非ずして、詩思の純眞情熱の强烈に在り。其の他杉烏山等二三の作家あり。皆擬古調を取りて王朝の麗藻を學べり。

以上は『帝國文學』の詩人の主たる者なり。顧みて之を概觀するに、純主觀の作甚稀にして概ね敍事的色彩を帶び、小說的趣向を取りて之を律語に述べしか如き者少からず。地の文と詞とを分ち、詞は對白獨白並に之を用ゐるか如き手法は、最普通なりき。蓋し彼等か專ら用ゐし雅語の性質として、最近の思潮に觸れたる主觀界を表現するに足らず。事を敍し景を描くには大なる欠陷を感せずと雖、一旦內觀の深きに入り冥想の幽なるに至らば到底適切明快なる表彰を得る事能はず、從つて卓逸なる抒情詩を見る事難し。かくの如きは擬古派の發展に對する致命的缺點なれば、羽衣雨江を頂點として其の發達は長へに阻止せられぬ。

然れども擬古派の努力は、非律語論に對する律語論の勝利を確實ならしめ、爾來崛起せる新詩人は悉く律語の門に出でぬ。二十八年より三十一年に至る四年間特に二十九年は斯道勃興の機にして、新詩人は輩出し舊詩人は奮起し、各種の文學雜誌に現はるゝ創作甚盛なりき。以下次を追うて之を列敍せん。

與謝野鐵幹

用語及聲調に於て擬古派に反對の態度を取る者を歌人與謝野鐵幹となす。鐵幹は二十九年短歌と共に『東西南北』の一集を公にして始めて詩壇に上りぬ。集中の作は韓山羈旅に關する者多ければ、概して風雲の氣ありて神往の詩趣なし。三十年再び詩集『天地玄黃』を出し、豪語奇句一段の進境を示しぬ。「山中の石」「乾坤寥廓」

正岡子規

「海嘯」「人鬼」等集中の主たる者、概ね理想的怪奇を弄す。就中「山中の石」は深山の白雲に獨り寢ねたる太古の石の述懷に托して「星の都に在りと聞く、一百五絃の玉の琴、嵐の神の音につれて、一時に裂くの慨あらむ」詩人の胸懷を詠出す。總じて彼の詩、勁健を求め豪壯を好み、客氣橫溢して却て淺俗に陷る事其の和歌に同じ。所謂男子の歌なるべけれど、固より高遠の詩想あるに非されば、擬古派の未だ開拓せさる抒情の好詩境に足を入れながら、世上一時の事象に拘して永遠の姿致に乏し。唯漢語を交へ漢語脉を採りし一事は尙生硬を免れずと雖、擬古派の平弱單調を救ふに多大の効果ありき。

歌人鐵幹に續きて俳人子規も亦新體詩に指を染め、二十九年竹の里人と名のりて『日本人』に現はれぬ。「鹿笛」「父の墓」「小蟲」「四季」「洪水」等獨特の俳詩想を長詩に托し、中には全く俳句を新體詩にしたるか如きあり。されば詩人としての子規の得喪は一に此點に歸す。總じて彼の作意洒脫にして語緊密措辭弛廢なくして聲調常に張り、好んで自然を詠じ、多く客觀叙法を採り、觀察微にして且新なり。故に想に陳套なる少く形に散文的なる弊なし。然れども規模狹小なる者多く、著想即興的に偏し、最冥想を缺く。三十年に入りて押韻論を稱へ、其の作例をも示したりしが其は十五年の昔、『新體詩抄』に試みられし阿行五音の脚韻に過ぎさりしかば、幾もなくして事止みぬ。

美妙齋

前期以來の作家にして餘勢を今日に振ふ者を美妙齋及『國民の友』の詩人となす。美妙齋は「韻文論」以來逸作なかりしが、二十九年雜誌『大和琴』に現れ、翌年「魔界天女」を連載して詩壇に異彩を放ちぬ、數回に亘る長篇精緻の措辭凄婉の情思、當年の意氣を偲ばしむ。『國民の友』の諸詩人は湖處子を始として、客將湯淺半月嵯峨の山人等前期に比して進步著しからず。抒情の短篇、平淡にして規模小に、情感女性的にして想像亦稚氣を脫せず。詩形に於ても優雅の辭を操れども『帝國文學』一派の絢爛に及ふべくも非ず。詩調平弱散文的の弊最甚し。唯可憐の感情を和平の言辭に寫すを以て其特長となす。三十年夏、湖處子嵯峨の屋は、國木田獨步、松岡國男、田山花袋、太田玉茗と共に詩集『抒情詩』を出版しぬ。

「抒情詩」

三木天遊
繁野天來

詩風に於て『國民の友』一派と正反對に立つ者を『早稻田文學』の詩人、即ち三木天遊及繁野天來となす。共に小說家として二三の作ありし者。夙く新體詩に入り二

「鈴虫松虫」

十八年以來、天來は「笛の音」「雨聲鳥語錄」等を、天遊は「紫姬」「月の國」等を出し三十年夏遂に合集『鈴虫松蟲』を公にせり。收むる所、天遊十九章、天來二十章。概して詩思情熱に富み、靑春の客氣に滿ちたり。初めは當時の流風に從ひ、抒情的敍事の長詩に傾きしが、後漸く主觀抒情を主とするに至れり。詩形は五七の韻律を好み、渾成の詩品に遠けれども、概ね調强くして弛廢なし。用語に於ては最自由なる意見を有し、漢語俗語併せ之を用ゐんとする事鉄幹に似たり。

『文學界』の詩人は、由來詩風の淸高を以て知らる。情操淸婉詩品高潔、地の濁穢に在りて天の淨界を憧憬するが如きは、即ち其の特色なり。星野天知、島崎藤村、平田禿木、戸川秋骨、樋口一葉、田山花袋、松岡國男、馬場孤蝶、太田玉茗等、皆悲痛哀絕の調を以て自然を語り、聖愛を歌ふ。就中詩人として知られし者は、藤村花袋國男孤蝶玉茗等にして、花袋國男玉茗は『國民の友』にも出で『抒情詩』に收めらる。其中にも國男は詞藻穩健にして想像亦温藉『抒情詩』の白眉なり。孤蝶は未だ特筆すべき無く、藤村此の間に立ちて恰も鷄群の孤鶴たり。

島崎藤村

藤村の詩を『文學界』に試みしは、當期初頭以來の事なれども、其名を斯壇に現せしは、二十九年後半に屬し、「一葉舟」「秋の夢」と題せる數篇の抒情詩に、一新聲調を出して時人を驚かしゝよりなり。就中詩人中野逍遙を悼める「哀歌」「朝と暮」とを詠じたる「三つの聲」「戀さま〴〵」の姿を歌ひし「こひぐさ」「星影」「水の如き夏の朝」「匂ふあやめの邊り」に、妻鳥を得んと鬪ふ二の雄雞を詠じたる「鷄」の如きは、詩壇曾て見し事なき淸新の格調思想なりき。爾來「薄氷」に六人の女性を詠じて各性情を描き分け、三十年春「天馬」の傑作を『文學界』に出しぬ。「天馬」は序、雄馬、雌馬の三章、二百三十句に亘る長詩にして、星影夜な〳〵動き奇瑞箱根の山に現はれて、蘆の湖の邊り村の南北に賤か屋の片庇をかりて人の世に生れ出てたる雄雌の天馬の詠せる者。序に於て此の由來を敍し、「雄馬」の章にては、朝に富士の雪を蹈み夕に御嶽の岩を超ゆ、靑雲に嘶きて電影を追ふべき天馬の身を以て、暫く櫪に委して主人に伴はれ、今し箱根を下りて遠く近江の湖畔花橘の蔭を行くを詠じ、次に「雌馬」の章にては、靑毛優しき牝馬が蘆の湖を去りて遠く陸奥の野に下り、四時の勞役、冷く情なき人間に驅使せられて頻りに天の靈泉を戀ひわぶるあはれの姿を歌ふ。想像雄偉、詞章淸新、當代詩界の通弊たる纖弱弛廢の想調を擺脫し、理想幽遠詩境高潔、抒情詩壇の一大進運を劃せ

「若菜集」

り。しかも彼は更に進んで「深林の逍遙」を『帝國文學』に寄せたり。陽春花深く霞かをる頃斧鉞未た入らさる深林の緑を分け、悠遊自適、静に自然懐裡に同化し去るか如き詩境を寫す。深林の中山精と木精とありて相呼び相應へ、到る處春の徳を頌し、春の意を語る一誦先づ幽韻人を襲ふ。

花の紫葉の緑、うら若草の野べの糸、工を盡す大機の梭の林に來れかし。

古き落葉を柔き青葉の蔭に葬れよ、冬の夢路を覺め出でゝ春の林に來れかし。

山風たび渡れば、簫管お自ら鳴り、白妙の雲峯を分れて樹々に棚引く。巖を攀づれば脚下忽ち激湍喧嗒の聲あり。既にして彩雲見る〳〵色變る夕まぐれ、林中の湖邊に出つれは、春日水に沈みて殘紅紫に交り、遊子自ら暮色一樣の彩りに沐し去らる。斯の如きは詩の大要にして總て二百餘句、自然を描きて悉く生命を賦與し高韻清致人をして神往せしむ。「天馬」の奔放と崇高と無けれども、沈静と幽遠とは遙に之に優り、詞章の圓熟亦遠く之に過ぐ。蓋し新體詩創始以來の名篇にして、詩人としての藤村の名嶄然として卓出しぬ。同年秋一集を結て『若菜集』と題し、長短五十一篇を收む。形式多樣にして句節の構成單調ならず。用語は概ね雅醇なるを選びしも特に平易なるを用ゐて耳遠きを取らす。但し其の修辭に新工夫あるを以て清新の聲調獨特の妙あり。歌ふ所の題材は自然と戀愛との二方面ありて、自然を詠せる者は、「深林の逍遙」を始として、「秋風の歌」「明星」等、最誦すべく、特に「明星」は清高無比短詩中の珠玉にして渾成の詩域に近し。戀愛を詠せる者は、熱情熾烈、從來の詩人の如く怠慢なる戀に非す。「たくめ」「四つの袖」等は其の代表と見るべく、總て英國近代のラファエル前派の面影を傳ふ。思ふに藤村の作は、詩壇最も西洋趣味に富める者なるべし。

薄田泣菫

藤村起りて幾もなく、又一個の藤村現はれぬ。三十年『新著月刊』に「花密藏難見」と題して短詩數篇を公にし、清婉の調を以て可憐の情操を歌ひ出でたる薄田泣菫是なり。其の特色は「紅絹袖」「夕」等に見ゆる如く、自然懷裡に戀愛の慰藉を求むるに在り。此の點に於て確に藤村の一面を傳ふ。唯夫れ泣菫は藤村に比して情操一層可憐なるだけ熱烈の度低く、形式の變化措辭の技巧を求むる事多きだけ、神韻に乏しく、嶄新の譬喩を用ゐ各種の語彙を取らんとするだけ聲調を傷くる事多かりき。獨り彼か試驗に成りし八六の調は一種蒼涼の趣を具へて幽婉の詩思を傳ふる所

土井晩翠

なしとせず。尚後の發達に徵すべし。

之と相前後して出でしは土井晩翠なり。二十九年の末「紅葉青山水急流」及「枯柳」を『帝國文學』に掲けて夙に一種の新調を示しゝが、三十年より三十一年にかけて「希望」「造化妙工」「破鐘の響」「山たろし」「萬有と詩人」「荒笛餘韻」等、頻りに冥想的抒情詩を出し世評嘖々たりき。是より先き『帝國文學』の詩人相次て潜み、羽衣等二三の作家、僅に擬古派の名殘をとむるのみなりしが、茲に又新作家を興し、而も其の作風全く異にして、前者の擬古的にして動もすれば朦朧の嫌あるに反し後者は泰西詩想を咀嚼して之を清高の大和文字に寫し、思想用語共に明晰爽亮なり。又前者の抒情は淺近平板にして、深刻の煩悶も向上の憧憬も無かりしに反し、後者の抒情は高く理想界に入り、常に憧憬の眼を天の一方に注ぎ、進んで冥想思索の哲學的風趣を求む。且つ漢語漢文脈を操つる事頗る巧妙にして、詩調爲めに遒勁、前者の女性的なるに反して男性的光彩を帶ぶ。蓋し晩翠深く泰西文學を愛し日夕名家の詩篇に親しみ、而も又漢詩國歌を誦するを怠らず。冥想思索の結果を詩篇に構成するに當りて、要する所の抽象語は、概ね漢語に求め、更に洋語を以て之を補ふ。斯の如きは曾に『帝國文學』の詩人の中に異彩を放つのみならず。所有新體詩人の儁逸たり。

晩翠の特色は冥想思索に在り。觸目万象の中、常に一種神秘の意を觀せずんば止まず。彼自然を詠じ、人生を歌ふ。而も其の描寫に止らずして或意義を其の後景に探る。彼は美神を謳歌せんよりは寧ろ造化の幽を闡かんとするなり。「希望」「造化妙工」「雲の歌」「星と花」「夏の夜」「墓上の花」「登高」「鷲」等に見はれたる自然觀、「夕の思」「光」等に見はれたる人生觀、及「詩人」「万有と詩人」に見えたる詩人觀を窺はん者、何人も晩翠の理想的傾向の一班を知了すべし。若し夫れ「暮鐘」の一篇に至りては、詩人としての作家の特色を名殘なく發揮せる者、落想文辭聲調一として具らさるなく、沈痛雄渾晩翠が作中の絕唱なり。此詩は三十一年春『帝國文學』に掲けし長篇にして、十七節百三十句に及ぶ。暮色降り來りて世上千萬の思を一様の暗に包まんとする時、一打の鐘聲に群がり起る詩人の思は何ぞ。鯨音一過餘韻浮世の耳に絕ゆるとも知るや無象の天の外、下界の夢のうは言を、名殘の鐘に聞きとらん、高き尊き靈あり」と。靈よはた何とか之を聞く「下界の暗は厚うして、聖者の愛絕えずとか、浮世の花は脆うして、詩人の涙涸れずとか」。げに此の鐘聲は、濁世の福音靈應檄槪の法の聲

なり。願くは理想實現の曉に至るまで、絶えずも響け長へに、天籟地籟身に兼ねたる夕入相の鐘の聲よ。斯くの如きは「暮鐘」の神髓にして、又晩翠の詩想の精粹なり。思ふに彼の詩、底を敲けば必ず厭世の響あり。曰く「自然は笑ひ人は泣く」。曰く「人は死と疑との子のみ」。而も詩人の向上的憧憬は茲に起るなり。思へらく、かゝる人生を厭離して何所に適くべき。戀愛の花園に逍遙せんか。世に不變の戀なきを如何せん。現實以外永劫不變の大理想に向つて精進せんか。其の容易に企及すべからざるを如何せん。賴に人に想像の力あり。想像に成り出でし詩歌あり。即ち之を以て理想實現の機至るまでの慰藉となし、暫く想像の翼を張つて光明の天國に神往し美妙の詩歌を玩賞して永劫の樂土に逍遙せんと。是れ晩翠の作品に通ずる根本思想なるに似たり。

以上晩翠の詩想を說きて其の明側を盡しぬ。然れども暗側の之に伴ふ者亦少からず。夫れ晩翠の詩は勉めて哲學的宗敎的ならん事を求めたるか故に、多くは理智に走り、描寫せずして說明し、謳歌せずして論述す。されば其調常に冷靜にして情火の熱烈なる者絕て無し。而も彼の思索は單純なるを以て、究竟詩想一たび定まるや、千篇唯同一の思想を繰り返すに過ぎず。且其の文辭も、明澄の極、餘韻を欠き、聲調も奇拔の利あると共に圓熟を缺くの害あり。然れども新體詩有つて以來始めて得たる冥想詩人なるを以て、彼が詩壇に於ける地位甚輕からずと言ふべし。

顧れは我新體詩も、三年か間に長足の進步をなしけり。湖處子殘花より藤村晩翠に至るまでの想形の進步洵に驚くべし。而も其の間躍出せし詩人、概して壽命長からず。自然陶汰の鐵鞭に驅られて相次て斯壇の外に逸し去り、殘る所は健鬪の勇士藤村晩翠の二家となりぬ。今や二家の詩風、江湖に布き、青年壘の文學雜誌たる『文庫』『青年文』及『新聲』等に見えたる年少の作品は、壘に羽衣の麗藻を挿ふや、靡然として之に趨きしも、今は即ち藤村調晩翠調となるに至りぬ。要するに、新體詩は草創日尚淺く、正に試驗時代に屬し、從て試み、從て驗す。一として恒久の威力ある事なし。唯藤晩二家のみ望を未來に屬せしむる者あり。請ふ。其の後の發達を見ん。

藤村か三十年以後の作は纂めて翌年刊行の『一葉舟』と『夏草』とに在り。彼の詩想

は『若菜集』に比して著しく面目を改めぬ。『一葉舟』卷頭の『白磁花瓶の賦』は、失戀の恨綿々として盡きざる若き藝術家が、萬斛の悲涙を一技にこめて作り出てし純白の花瓶を詠じ、情緒清婉楚々として人を動かす者なるが、一方失戀の恨を抒べて他方藝術の歎美に及ぶ所、頗從來と趣を異にす、從來の藤村は戀を謳ひ愛に憧るゝ者なりしが、玆に至りて戀の破れ易きを恨み、却て永劫の美常世の献たる藝術に憧る。爾來彼は藝術愛慕の詩人となり、歌ふ所常に其の風韻を帶ぶ。勿論『鷲の歌』の如きは、千里の蒼溟、忽黒雲湧き疾風起り、怒濤紫瀾を捲いて白沫四散する所、磯際の岩角に暫し身を寄する老若二羽の鷲が、健翼一搏烈風に逆うて萬里の雲を追ふ光景を叙して、崇高雄渾、『天馬』と併び立つて圓熟は之に勝り、晩翠の諸什と拮抗して迂餘曲折は之に優り、其風趣を察すれば、正に『若菜集』の遺韻を傳ふ。然れども『晩春の別離』『曉の誕生』『月光』等に至りては、何れも藝術に對する無限の愛慕を表はして一種の特色を帶ぶ。試みに『晩春の別離』に詠ぜる詩人を以て晩翠の『萬有と詩人』に於ける詩人に比し、『曉の誕生』に於ける嬰兒を以て晩翠の『小兒』に比すれば、藤村の面目愈明なるべし。かの皎月千里の清光を歌ふにも、一樣の彩りを以て萬物を理想化する神秘の色を謳はずして、百代易らぬ月影に藝術の永劫を觀じ、深夜の月光に藝術國の靜寂を思へるか如き、以て其の本色を見るに足るべし。

「落梅集」

此時に方りて彼の詩風は再び轉じ初め、空想的藝術的の世界より出でゝ實際的自然的の生活に入れりぬ。『夏草』收むる所の『新潮』と『農夫』とは明に之を示す。『新潮』は漁夫の生活に托して人生の行路を描き、最後に處生の方針を示せる者。幼稚なりと雖、作者の新傾向を見るに足る。『農夫』は序、及上下二卷、八章より成り、一千句に垂んとする叙事的抒情詩にして、新詩壇空前の長篇なり。利根河畔の農夫鍛工の女と相思ひ、征淸の役に召されて征途に上り、三年軍終へて歸れば少女が離恨に悶死せしを聞き、絕望の餘り、身を雲水に托せんと決せしが、會鍛工が愛子を失へる悲愁を勞働に慰めて奮勵するを見て飜然昨非を悔ひ、再び利根川邊に己か生業を勵まんと思ひなるを叙し、前者より更らに一歩を進めたり。時恰も『文學界』の倒るゝに際し、藤村亦信州に入りて實際的生活を營むに至りしかば、其の『新小說』に寄せし吟詠益實際的自然的となり、『文學界』時代の面影復見るべからず。當時の詩集たる『落梅集』を見るに、感情生活よりも意志生活を尙び、藝術戀愛を歌はずして汗額の事業

を說き空想の、叙述よりも現實の描寫を取り、仰いて翹望せずして俯して慰藉す。戀て感興の湧くがまヽに任せずして考察反省するを其の特徴となし、通篇著しく沈靜の調を帶ぶ。「壯年の歌」及「勞働雜詠」は此集の代表と見るべし。されば偶戀愛を歌へる「胸より胸に」の如きありと雖、戀愛其物は、もはや『若菜集』の其れに非ずして、人生の戰線に立てる者の唯一の慰藉となれり。茲に至りて藤村の詩想の中心は事業の謳歌となり、生命の戰鬪は其の套語となり、明澄透徹、昔日の朦朧なく、靜平なる觀察頗る客觀的に入る。從つて其文辭の如きも青春の心情を踴らしむる詩的魅力なく、絢爛の賦彩既に見るべからず。唯彼が胸奧に潛める沈靜の詩思を抒べし者は、淡彩の中、大雅の光あり。「小諸なる古城のほとり」及「寂寥」など、清楚の賦彩奕々たるを見る。三十四年秋『落梅集』を公にして後、復歌はず。

「天地有情」

晩翠は三十二年春、詩集『天地有情』を刊しぬ。收むる所、長短四十篇、『帝國文學』『反省雜誌』等に揭けし從來の作の全部なり。中に、「馬前の夢」『星落秋風五丈原』の二長篇あり。彼の主題及作風の一變せんとするを示す事、藤村の「新潮」と「農夫」との如し。

「馬前の夢」は、不能の文字を笑ひし蓋世の英雄も「玉樓の春短くて、魚龍淋しき秋の水」「其の常勝の劍折れて、獨り小島の波枕」、疾風暴雨の夜更けて、終焉の床に橫はる拿破崙を歌ひ、「星落秋風五丈原」は集中の最長篇、六章三百五十句に上り南陽の臥龍草廬を出で、天下を三分して王者の師を學びしも、成敗遂に天の命、一代の希望未成らずして祁山の陣營、大星俄に落ちし諸葛亮を詠じ、共に偉人の歎美と運命の哀傷とを抒べて、悲壯沈痛を極む。其の形式に於ても共に三段に分れ、最初終焉の床に在る偉人を描き、中段作者得意の叙事的技巧を以て一代の功業を叙べ、結ぶに詠歎と憑弔とを以てす。結構雄偉、詞藻壯麗、抒情叙事併せ得て手腕頗る見るべし。之を從前の作に比するに、厭世懷疑の遺韻尚響きて、而も理想を戀ひ光明に憧れし面影、復見るべからず。彼は理想の實にし難く、不朽の求むへからさるを史上の事實に見て、俯仰今昔、遂に感傷の悲音を洩せり。爾來晩翠は破られたる理想を悼む詩人となり、第二詩集『曉鐘』「三十四年刋」の各篇、概ね哀絕の調を帶ぶ。

「曉鐘」

「萬里長城の歌」「秋興八首」「惆悵吟」「黑龍江上の悲劇」等是か代表者たるべし「萬里長城の歌」は秦皇の覇圖空しく消えて獨り史上の名を殘すのみなるを傷み、二十朝の興廢を閲せる古壁、今既に淸室の運命を語るを哀しみ、「秋興八首」は悲風蕭殺の夕、詩人自身を歎き、故鄉を偲び

母國の詩運を憖へ、海外の詩國を慕ひ、友を惜み、昔を戀ひて、痛切なる哀傷の聲を放ち、「黑龍江上の悲劇」は、三十三年北清戰役中、滿州國境に於て演せられたる悲劇に憤を發し、文明の理想の爲に泣き、人道の大義の爲に悼みて熱烈奔放を極む。共に集中の長詩にして、措辭益圓熟に、詩形益整齊、修辭上の進步著しと雖、青春の翹望を披瀝したる頃の如き豪華の風調なし。

「弔吉國樟堂歌」「富嶽の歌」「登高賦」は集中の絶唱なり。前者は、芳蘭花脆く運命の神に嫉まれて萬古の恨を殘せる故友を弔ひ、孤燈の下、「靜寂」と「暗」との中に、冥想の眼を閉ぢし一夜の思を叙し、淸怨綿々至情切實、加ふるに詞藻の富贍を以てし、洵に好哀歌なり。「富嶽の歌」は渾沌の世に湧き出で、太古の雪の肅淸く暗を照して立てる姿不變の富士の高嶺に、天上の星永遠の光を送りて露を凝らしめ、其の星の精銀漢と共に下りて嶺上の明水となり、餘滴靜かに谷あひに流れて花を誘ひ香を浮け、幽泉細流集りて大河となり、滔々東海の波に注ぎ、南溟の風北溟の雲翔る友を呼びて靈山に集る處詩神降りて不朽の調を奏づるを叙し、玲瓏の想像、崇高の風趣、莊麗の詞藻、集中に異彩を放つ。「登高賦」は吹き去り吹き來る無限の秋風に對して、十九世紀の禍惡悉く吹き拂ひ、新に來らん二十世紀の世をして光と愛と詩との世ならしめん事を祈りし者にして、沈靜の想、莊嚴の辭、老熟の域に入る。而して「弔吉國樟堂歌」は流轉の相を觀じて懷疑に陷り、哲學を彈じ宗教を劾する處、依然として感傷の詩なりと雖、末段に至りて、靈の光を蓋ふ僧俗の聲を棄てゝ沈思冥想すれば、有象世界の遙あなた美妙圓滿の無象世界ありと說いて從來嘗て有らざる慰藉を含めり。爾來理想實現の時あるべきを信ずるに至り、「富嶽の歌」にては、靈山の曙光を見て萬邦比類なき理想國を我邦に現出せん事を信じ、「登高賦」にては、更に進んで理想界の實現を渾球上に見ん事を無窮の靈に祈り、「愛の神進化の神詩人の神、……願くは爾の呼吸、天の果てより地の隅に吹き來る無限の風となりて禍惡盡く吹き拂ひ、光と愛と詩とをして永く此地を掩はしめよ。」と呼べり。即ち昔日理想の悩みは化して現實の悩みとなり、無象淨土の希望は變じて現象淨土の希望となりぬ。

上述諸篇は何れも「曉鐘」集中の長詩にして、其の短詩は思想修辭共に比較的精彩なし。詩形に於ては七五二句を連ねて一行をなせる一體を始め種々苦心の痕を止め「萬里長城」以下勉めて變化ある詩調を得んと試みぬ。七五二句一行の詩形は

「暮笛集」

夙く二十八年羽衣の「月」に現はれ、藤村亦「鷲の歌」に之を試みし者なれば、晩翠の新案に非されども、最多く之を用ゐしは彼なり。「登高賦」に至りては全く七五の單調を脱出し、前條抽出の斷片に見えしか如き新形式を試み、以て一種蒼涼の調を出せり。而も藤村の『落梅集』に於けるが如く『曉鐘』以後暫く高遠の聲を收めぬ。

二家の盛なるや、「花密藏難見」の作者泣菫も亦『新著月刊』誌上一種の聲調を以て、可憐の情操を歌ひ、頗る江湖の囑目を得、三十二年末、遂に一集を公にして『暮笛集』と言へり。試みに其の詩想を覗ふに、彼も亦他の詩人の如く、最初に、現世に對する不滿、俗人に對する嫌厭より、懊惱懷疑の雲に閉されて茲に一種の翹望を生じぬ。晩翠は斯る時、仰いで天上雲のあなたに無窮を戀ひ、未來の世に樂土を夢想して心を遣りぬ。然れとも泣菫に在りては、所謂現世とは趣味なき世、所謂俗人とは趣味なき人にして、彼の懊惱は主として趣味なき人生に對する嫌惡の情より起るに過ぎず。されば彼の翹望は甚簡素にして、單に趣味ある人生を實現せんと冀ふに止まる。然らば即ち人生の趣味とは何ぞや愛と詩と、是のみ。彼か憧憬の歸着點は即ち此の二者に外ならず。卷頭「詩のなやみ」既に此の思想を體現し、次ては「星」「鐘」「蟋蟀」等に詩の憧れを示し、「琥珀」「玉腕」「紅絹袖」「夕」等に戀の憧れを示し、更に其の後の什に於て此の思想を明白ならしめたり。就中「兄と妹」一篇、詩歌の人なる兄と才敏く情切なる妹とを描きて最よく彼の詩想を代表す。「尼が紅」は四行節百五を重ねたる集中の最長篇にして、浮世ゆかしと思ひそめし若き沙尼が、寺を遁れて、若き戀に惱む綿々の恨を叙して精細を極め、少しく冗漫の弊ありと雖、想形共に集中一方の代表者たり。

泣菫の戀を語るや、熱情時に奔逸して頗る藤村の『若菜集』に似たり。さはれ、彼の特徴は熱烈なる感情に非ずして可憐なる情操に在り。かの「村娘」「鶺鴒」などに現はれし同情、「古鏡賦」「盃賦」なとに現はれし想像、「秋の歌」「燕の賦」に見ゆる自然感情等、其の著しき者なり。就中「燕賦」は、此の點に於ける代表作品にして「圓き頭は葉隱れに、かゝる葡萄を見る如く、胸の和毛の白妙は、女子の恥づる肌に似て、咽の色のらうたさは、潮に澄める一つ星、上毛の艶の紫は、朱冠に彫れる雲母」の如く、やがて八重の潮路を越えぬべき力ある翼を打ち、霞める青柳に新月を呼び出づる清き音に歌ひ出でたる燕子に寄懷せし者、恣態文辭最よく整ひ、集中の佳作なり。

『新著月刊』倒れて泣菫は『新小説』『明星』『小天地』等に其詩を掲げしが『落梅集』『曉鐘』の刊行と同じ年に第二詩集『行く春』を出しぬ。詩想は前集と大差なしと雖、其の懊惱は空想より來る事少くして、現實の上に存する事多くなりしは『暮笛集』に見さる所、頗る晩藤二家の傾向に似たり。特に時事問題に憤を發して「遺憤」と「あゝ杜國」とを爲しゝは、彼の現實的傾向の極端に走りし者なるべし。爾來作者の翹望せる「新たなる日」は、愛と詩との滿足せられたる華やかなる若々しき趣味の世より、轉じて平和の世特に平和の田園生活となれり。「牧笛」より始めて「夕暮海邊に立ちて」「夕の歌」「小鼠に與ふ」「郭公賦」「金絲鳥を放つ歌」等は、即ち平和の理想を謳ひし者。「野に立ちて」及「南畝の人」に至りては、全然農民生活の讃美にして、藤村の「勞働雜詠」と歸趣を一にす。

以上述ぶる所を通覽するに、泣菫の詩風は、大體に於て藤村の後影を追ふに似たり。而も其可憐なる情操を抒ぶる一面のみを傳へて、「天馬」「鷲の歌」「深林の逍遙」の高渾なる情調に及はず。唯「石彫獅子の賦」の一篇、長鬣背に卷き、廣胸强く張りて、夏の日盛り光を浴びて立ち、威風百獸を慴伏すべき石彫獅子の雄姿を寫し、進んで藝術の不死無窮を叙べて、雄偉壯麗、彼れの作に始めて見る所、宛然藤村が『一葉舟』の詩想なり。

詩形に關して、作者は諸般の試驗をなし『暮笛集』の八六調以外、種々變化ある格律を用ゐぬ。但し一句一行概ね短く、晩翠の漸く長からんとするに反し、漸々短からんとする傾あり。之を學ぶ者、青年の間に少からざりき。

當代の詩壇、三家を除けば他は皆振はず。從來の作家にては、鉄幹新詩社を起し『明星』を發刊して短歌及新體詩に勉むるあり。三十四年其詩歌合集『紫』を公にせり。後進にては、高安月郊、蒲原有明、兒玉花外、岩野泡鳴、今村敬天等あり。月郊は、三十三年小説詩歌合集『金字塔』及『夜濤集』を出し特有の聲調を以て勁健の詩想を歌ひ、有明は『帝國文學』『明星』『文庫』等に現はれしが、三十四年『片袖』に掲げし「高潮」最稱せらる。花外は集『風月萬象』(三十二年)を出し、泡鳴は『露霜』(三十四年)を公にし、敬天は同じ頃『短笛長鞭』を出せり。又かの『文庫』の詩家酔茗は『無弦弓』を刊行せり。三十四年には詩集の出づる事盛なりしも、皆前年の作を編みし者に過ぎず。實際に於ては、詩壇沈降、新興の氣運一段落を告ぐるに至れり。

坪内逍遙

第三節　戯曲

明治二十年前後に方り、文學界の新潮として其勢を逞うしたる寫實主義が、戯曲演劇界に入りて誤つて邪徑に走り、性格寫實精神寫實の旨を離れて、徒に事件寫實衣裝道具の寫實に流れたりし由は既に述べぬ。又かの歐化主義の反動として起りし國粹運動と同樣の原因より來れる保守主義の運動が、從來の夢幻史劇を推奨して斯界の前途を妨遏せるをも說きぬ。二十六七年に至る劇壇の形勢は、要するに此の二流の消長に外ならさりしなり。然れども少數の識者は、之に滿足する能はず、去つて新戯曲を求むるの念甚切なりき。前期劇界を叙し終るに臨み、一言云ひ及びし坪内逍遙の評論は、即ち此の少數者を代表する者と言ふべし。

二十六年秋逍遙は『早稻田文學』の論壇に立ちて「我國の史劇」を論じ初めぬ。彼は先づ本邦古來の史劇作者を擧けて其作品を批判し、併せて自家の史劇に對する見解を述べたり。曰く、巣林子の史劇は一種の夢幻劇にして、單に眼に悅る技術としては、巧妙驚くべきも、嚴密に言ふ史劇としては、事件荒唐、人物單純、到底今の觀客をして歴史的幻影を起さしむるを得ず。唯、人情を描寫せんか爲に、時所と人名を過去歴史に藉りしに過きず。默阿彌の史劇は其の作意過去の事相人物の再現に在るを以て、多少歴史的寫實に近つけりと雖、彼や素と天稟の世話物作者にして、其の學殖識見共に、時代物英雄物作者たるに足らず。彼は僅かに野史俗說を典據として、史實人物を想像し、而も其直覺は現在以外に及はさるを以て、時勢境遇地位器度人情及風俗を異にせる過去の事相人物を寫して正鵠を得ん事到底望むべからず。況んや治亂興亡の理を繹ねて英雄の心事を描出するをや。學海の史劇に至りては、過去再現の主義を極端に解釋して單に正史の事實を其儘に取り、道具衣裝臺詞等悉く之に依り、言はゞ非劇的非詩的の考古博覽會なり。蓋し脚本の精髓は個々人物の性格を因となし、境遇を緣となし、此の因緣によりて、成れる著大なる業果を描き、以て人事の眞相を現はすに在り。從つて史劇は件の人物を過去の特殊なる境遇の中に立たしめ、以て人事の眞相を過去事實の中に表現せんと力むる者のみ。さればかの史上の事相と人物とを寫實的に舞臺上に現はすか如きは抑も末なり。史劇の過去相は普通の觀者をして過去の幻影を起さしむれば則足る。學海の如

きは此本末を顚倒せる者なり。櫻痴の改作史劇は言ふに足らず、其の新作史劇は唯史的人物を取り來りて之に當代俳優の個性を與へたるのみ。作者の筆に上りし史上幾多の英雄は、盡く之を演ずる一俳優の儀型になり了らずんば止まず。加ふるに作者自身の影子を帶びて、俗智世間智に長け、明察機微に通ずる人物ならざるなし。彼等は現在を洞觀し、未來を先見し、奇禍偶福、忽其の由來を察し、他人心事の隱微忽之を忖度し、事の成敗は一に此の世間智の優劣によりて決すとなす。斯くの如きは獨り史上の人物と異なるのみならず、所有人間の通有性を失ふと。次に逍遙は新史劇に反動して起りし夢幻劇崇拜の潮勢を摧かんと勉め、夢幻劇の形式美は近松當時の時勢に在りて始めて發揮すべき者なりと論じ最後に將來の改良策に及び從來の劇の根本的缺點は、第一敍事詩の體と劇詩の體との混淆、第二性格を無視して事件を主とせる事に存するを以て、先づ此點に改良を加ふべしと說き大に泰西式の性格劇を主張せり。

逍遙か史劇論は、げに斯壇の新聲にして、性格劇の發展を皷吹せる點に於ては全然斯道の『小說神髓』なり。文學革新の著手せられて玆に十年、演劇革新の合理的に近き論議は始めて世に出でぬ。是より先き『柵草紙』の鷗外、穩健の思想と妥當の見解とを以て斯界を警醒せしも、彼れの態度は冷靜なる批評的にして、逍遙の如く熱烈なる皷吹的に非ず。從つて其の江湖に對する影響遂に此の如くなる能はざりき。逍遙は、其の著眼の卓拔嶄新なる、其行動の華やかにして皷吹的なる、假令多少の缺陷誤謬あるを免れずと雖、文壇の先覺評界の明星として、卒先の功沒すべからさる者あり。

然れども、史劇論の評壇に與へし影響の大なりしに反し、作劇乃至劇場文人に及ぼしゝ感化は、不幸にして甚小なりき。『小說神髓』ありて小說界の作風一變せしが如くなる能はざりき。蓋し劇界の革新は、脚本劇場俳優の革新以外、觀客の思想を一新するに非ざれは得て望むべからず。而も當時の觀客は概ね敎養なき舊世界の遺物なり。其水新七の徒、尙よく梨園作者として其の餘喘を保つは、即ち此の惰力の恩のみ。斯くて爛熟せる舊劇、模倣陋劣の新作は、依然として活氣なき劇界を支配し、活歷流行以來、兎に角舊劇の羈絆を脱せんとせし寫實史劇すら、櫻痴一たび蹉跌して、復起らずなりぬ。

此時に方りて、日清戰爭起り、戰爭文學の流行は所有方面を侵して演劇界にも入りぬ。此勢に乘じ、戰爭劇を標榜し、俄然として頭を擡けし者を所謂壯士芝居となす。壯士芝居は二十四年西鳥越中村座に始めて政治的世話物を演せし川上音次郎一派の劇を指す。此の粗放露骨なる芝居も、二十七年『又意外』等の新作を演するに及びて、不思議にも江湖の喝采を博し、『戰爭見聞誌』以下の戰爭劇を出すや、一時舊劇の壘を摩し、眇たる貧書生の一團、都下の大劇場に據り、積年の大勢力たる歌舞伎俳優をして後に瞠著たらしむるに至り、劇評家は驚きて劇界革新の機運と稱し、之を呼ぶに新演劇を以てし彼等を名つくるに新俳優を以てしたり。此影響は延て大阪に及び、成美團等の壯士役者團を起し、四方に傳播して、少からざる團體を見るに至れり。

此の運動は總ての點に於て美術の域に遠きに係らず、演劇史上甚重要なる事件なるべし。然れども之を詳説するは本論の主旨に非ず。茲には唯脚本の方面より觀察するを以て足れりとなす。抑も劇界革新の事あるや、其の鋒先は先づ史劇に向けられ、世話物の天地は風靜なる別世界なりき。思ふに世話物に在りては、稀世の名作家默阿彌の存するありて、寫實的世話劇必しも貧少ならず。然るに、二十六年默阿彌沒して、凡庸作者獨り存し、且其作る處、明治の假面を著けたる舊幕物に過ぎざりしかば、新時代の新世話物としての價値終に空し。新演劇の勃興は、即ち此の虛を衝けるに外ならず。彼等の脚本は拙劣を極むれども、其水新七よりは明治の現實に近し。即ち此運動の事效は、舊きに史劇に施されし寫實主義を新に世話物に導きし點に存す。換言すれば、世話物に於ける活歷主義の擴充に在り。

然れども、是史上の價値のみ。之を脚本の側より見れば、筋の支離滅裂なる、寫實の皮相なる學海櫻痴の作よりも甚しく、明治の世話物としての價値は全然缺けたりといふべし。顧みて劇壇の狀態を見れば、舊夢幻劇の精粹復びもて囃され、活歷物、川上物の總てを壓倒しつゝ無前の繁榮を致し、斯壇の刷新、脚本の改良は、前途亡羊の歎なき能はざりき。或は敢て新作をものして梨園の關門を打破せんと試みし者なきに非ざりしも時運は未だ至らず。新作家にして上場するを得る者、依然櫻痴居士に止まり、其すら改作の俗劇のみ用ゐられて『豐島嵐』の如き比較的好新脚本は遂に容れられざりき。

「桐一葉」

此の時に方りて史劇論の記者逍遙は嘗つて創作壇に立ち、二十七年末より、春の屋主人の名を以て史劇「桐一葉」を『早稲田文學』に連載し、二十九年の初より同「牧の方」を同誌に連載し、完結するや、共に之を刊行して廣く世に問へり。蓋し是れ著者か理想とせる脚本に非さるべきも、亦以て多年の所論の具體的發表の第一着歩と見るを得べし。

「桐一葉」は豐臣家遺托の重任を負へる片桐市正且元を主人公とする悲劇にして且元が駿府に使して大御所の難題を受け、已むを得ず淀君關東下向の儀を承諾なし、別に苦計を胸に秘めて大阪に歸りしに、讒者の爲に關東に內通せりと稱せられ烈しく淀殿の不興を蒙るに端を發し、奸臣の阻格偶發の錯誤の爲に、胸中の秘計遂に施すべからず、乃ち望を大阪に絕ち居城攝州茨木へ退かんとして、曉霧の中長良堤の上に木村長門守と訣別し、後事を托して悄々と落ち行くに至りて終結す。之を本筋として、且元の一女蜻蛉が長門守に對する戀物語を織り込み、淀君が夢幻妄想の狂態を以て之を彩り、總て七幕十五場に分る。其の材料は概ね正史に取りたるも、作者は素と、正史の事實が單に段幕に按排せられたる者を以て劇と見なさゞるが故に、事件の進行を助け、人物の性格を活現すべき幾多の醇化を加へたりき。作者は此の悲劇の葛藤は、一時關東に屈して大御所百年の後を待たんとする且元の秘計を知らざる淀君の猜疑憤怨と、且元を退けんとする大野父子の野心と、相依り相助けて且元の苦忠を破却し去らんとする所に存すとなし、遂に且元をして退身の已むを得ざるに至らしめたり。故に其の終結は、普通の悲劇の如く悲壯の死に非ずして慘苦の生なり。事件の取捨按排は總て此の著想より來る。作者は又、筋の統一を求むるが故に、挿話の爲に離裂する弊を避けて、一道の本流全篇を貫かしめぬ。作者は又、人物に作家の影子を宿し、劇に作家の觀念を寓するを忌むが故に個々の人物各特殊の性格を具へて、其の間に褒貶を挿まず、學海櫻痴の弊套を擺脫して、最自然的なる描寫を勉め、特に且元淀君に於て其の著しきを見る。作者は又俳優の爲に人物を作るの非を知るか故に、舞臺上の注意周到なるを期しながら、强て當時の梨園に媚びて團菊翫の藝風に迎合せん事を勉めず。而して其文字に於ては、從來戲曲の修辭たる七五調、掛詞、緣語等を用ゐたる叙事詩的分子尙少からずと雖、概して精練暢達、一代の才筆沒すべからざる者あり。

曙光は暗黒を破れり。曉鐘は寂寞を破りぬ。默阿彌以下過渡時代の史劇を超出して近世思想に成りたる新戲曲は、其の頭角を露はしぬ。百千の群議は一人の實行に若かず。脚本改良の聲起りて、所謂評論家の囂々は其聲徒に大にして、功果一物をも殘さゞる事數年、茲に至りて、漸く劇壇渇望の一端を充たしぬ。

然ども、此劇を讀む者、主人公の苦忠に同情を表すると共に、其性格の明確を缺けるを覺ゆ。思ふに且元は主君の面前に奸臣と激爭し、乾坤一擲悲壯の最後を遂ぐるが如き老忠臣に非ず。遠謀深慮、內忠奸を操縱し、外老猾を控制し、以て主家百年の安寧を致すか如き智者に非ず。壯烈の意氣は重成に及ばず、老熟の智略は家康に若かず。誤りて誤り、誤りて斷せず。因循姑息、一日を緩うせる者。斯かる概括的性格は稍明なりと雖、其云爲常に含糊にして直截ならず。或は故主の恩に感じて孤忠盡瘁するが如く、或は首鼠兩端、自家の安きを計るが如く、悲劇的境遇に處して煩悶の痛烈なる者表はれず。壯烈なる大破綻なくして、早く身を退くなど、往々吾人の同情を冷却せしむる事あり。要するに性格悲劇に非ずして境遇悲劇なるべし。蓋し「桐一葉」は、完結せる戲曲に非ず。且元の悲劇的最後は、別に續篇ありて之を詳悉すべかりしなり。作者は三十年「沓手鳥孤城落月」を『新小說』に揭け以て此の脚本の局を結べり。

「孤城落月」

「沓手鳥孤城落月」は大阪落城の一刹那を舞臺として、且元の最後を描ける悲曲にして、落城の早朝、生命旦夕に逼れる重病を推して家康の陣營に候し、秀頼母子助命と共に、禮を以て出城を迎へん事を請ひ、且自ら其の使節たらん事を求め、十年の苦心、鬢髮霜の如き老武士、籠を急がせて城に向ふに始まり本多正信の計略に阻まれ、自己の重病に時機を失ひ、遺恨千秋、本丸炎上して母子生害となり、乃ち悲憤の涙を揮つて城門の前に瞑目するに終る。總て三幕七場を以て成る。通篇悲愴の調を以て被はれ、糒庫階上淀君の狂亂秀頼の愁歎人の腸を斷たしむるは勿論、末段且元落命の一場、卷を掩うて痛憤せしむ。而して曩に模稜含糊の趣ありし且元の面目此の一場に至りて漸く明かにせられぬ。彼や素と、石田三成の所業を以て猿才覺となし、機の熟するに時方ありと中心竊に戰を期しながら、大御所存命の中は平和を陽に一時を欺き、徐に計を運らすを以て唯一の希望、畢生の事業となせる者。彼の苦心經營せるも、卑怯と罵られ不忠と認められしも、總て此に出づ。彼をして悲

劇的最後を遂げしめし者は、主として、大勢を達觀すべき神智なく、因循姑息一時の小策を弄して機微の動くを悟らざる彼自身の性格なりといふべし。「孤城落月」を「桐一葉」と共に二部曲と見るを得ば、始めて性格悲劇の面影を彷彿すべきなり。

「牧の方」

此の曲は幾多の瑕瑾ありと雖、とにかく明治文學の一記念にして戯曲史上期を劃すべき著作なり。小説史上空前の事業を成しゝ春の屋主人は、茲に再戯曲史上の大業を成せるなりき。而も其活動は之に止まらず、更に『牧の方』を創作せり。『牧の方』は、鎌倉執權北條時政の後妻牧の方を主人公とする悲劇にして、牧の方が所出政範の愛に溺れ、之を將軍職に就かしめて尼御臺の榮華を學ばんとし、乃ち千幡將軍尼御臺及義時を除かん大陰謀を企て、事現はれて義時の前に自盡するに至る筋總て六段十七節、北條時代初頭の罪惡史中特に著しき一女丈夫の末路を描けり。然れども、此曲は之を以て完結せるに非ず。續きて出つべき『源實朝』及『左京兆』と三部曲の形式をなし、以て義時を主人公とする一史劇を爲すべかりしなり。故に此曲は女性牧の方を主人公とする獨立の曲に非ず。隱謀家牧の方を中心として、更に大なる隱謀家義時の前半生を描けるに過ぎず。唯惜らくは作者續稿を出ださずして止みぬ。されば單獨に之を評論せんは、頗る當を失するも試みに其の脚色を窺ふに、政範を擁して籠中の權を振はんとする牧の方、牧の方を擁して全權を握らんとする稻毛父子、稻毛父子を使嗾して政範に代らんと巧む平賀朝雅、是等總てを自滅せしめ、將軍を擁して執權の天下を謳はんとする義時、巴の如く相追うて、一起一伏、野心は野心と戰ひ、隱謀は隱謀と相銜き、所有罪惡を盡す。故に場面變化に富み、事件參差として常に讀者の注意力を緊張せしむ。然れども、一部の主動たるべき牧の方の隱謀が、常に黑幕に潛める義時の爲に操縱せらるゝ傀儡に過ぎざる趣あるか故に、時々之に對する感興を破らる。且此の曲には、幾多の豫想せられたる事實を含み、讀者の歴史上の智識に委ねて其の叙述を省略せる者多きを以て、讀者をして、此の曲は甚だ大なる史劇の中間に位する一小部に過ぎざる感を起さしむ。牧の方の性格の如きも、直截明晰なるに係はらず、悲劇の勇者として讀者の注意を一身に集むべき偉大の資質を缺く。其の隱謀もお自ら所動的にして、所有外敵と戰ひて壯烈なる沒落を遂ぐるか如き大觀は遂に見る事能はず。之を『桐一葉』に比するに其の目的が、歴史の發展の隱微なる消息を描破するに在

る事兩者相同じ。『桐一葉』は豊臣家滅亡史の裏面に潜める隱微を描くを主とせし如く、『牧の方』は鎌倉三代將軍時代の罪惡史の隱微を寫すを主とせるに似たり。唯取材の時代及史料の選擇に於ては、『牧の方』の取りし所は、古今罪惡史の頂點にして、史的研究の鋤未だ入らざる荒野なれば、作劇家が想像を逞うして一大悲劇を編み出すべき餘地を存する點に於て、大に『桐一葉』に優れたり。蓋し作者は先づこの神秘なる罪惡史に著眼し、其黑幕の陰に立てる義時を認め、之を中心として此時代の史實を網羅せる三部曲を作らんと企てしなるべし。然れども、局面宏濶事端繁瑣に過ぎて劇の進行に餘裕なく、且事件の全部が陰謀の連續なれば、総て秋霜逼促の趣ありて、詩興お自ら乏しきを免れず。此の點に於ては『桐一葉』に一籌を輸せざるを得ざるなり。

逍遙は上掲三曲の外、尚「二葉楠」の一篇を『新著月刊』に掲げたり。小楠公を主人公とせる抒情詩的小戲曲なり。三十一年「孤城落月」と共に『菊と桐』と題して出版せり。

逍遙か作は何れも場に上らざりき。然れども、聰明なる評論の大部は嘖々之を稱揚し、新作劇家の之に倣ふ者漸く現はれぬ。高安月郊は、二十九年『重盛』をものし、翌年「眞田幸村」を『早稲田文學』に掲げ、其他磐田綠堂、土居春曙、松居松葉、及水蔭漣山人柳浪等、各戲曲の才を一二の創作に試みたりき。

福地櫻痴

三十年夏、櫻痴居士、俳優團十郎、芝居師森田勘彌の應援を得、從來の立作者、舊劇の殘類たる新七、其水を排斥して、自ら歌舞伎座の立作者となりぬ。是より先き櫻痴の作の演せられし者少からざりしも、舊慣の關門固うして未た立作者たるを得ざりしなり。されは此事あるや江湖の嘱望一方ならず。往々斯界の形勢一變して新作大に行はるゝに至らんと夢想する者さへありき。然れども、彼が入座以來の作は『俠客春雨傘』を始め、舞臺面の變化面白く、役々善く俳優に適ふのみにて材料着想に些の新彩なく、脚色主旨に何等の統一なくして、全然舊劇の後塵を拜するが如き者なれば、到底新時代の要求に應すべき者に非す。要するに新舊過渡の作家たるを免れず。

松居松葉

純乎たる新文士にして梨園の關門を打破せるは、蓋し松葉を嚆矢となす。三十二年松葉、史劇『惡源太』を草し、左團次に附して上場す。俳優を標的として人物を作りし舊式の者なるが上に、脚本としても失敗の作なりと雖、幼稚なる梨園は、先づ此種の新作を以て啓發せらるべきなり。

右の事件を一小波瀾として、劇壇の狀況は不活潑を極めたり。往年の脚本改良會の再興とも見るべき青葉會起りしも、何等の功なく、新演劇は一敗地に塗れてより、僅かに、知名の小說、例へは思軒譯の『瞽使者』紅葉作の『心の闇』『冷熱』等を脚色上塲して、一時の人氣に投せんと試るのみ。元來小說の脚本化は、大阪の劇壇にては通例の事なれども、脚本化其事既に不合理なるか上に、脚色者概ね無識の輩なれば、脚本としての價値問ふに足らず。總て劇界の進歩は、いたく小說界に後れ、唯一の機關雜誌『歌舞伎新報』も一たび倒れ、三十三年に至りて、漸く復興して『歌舞伎』となれる者あるに止まる。

飜つて作劇界を通觀するに、史劇の盛行に比して世話劇は甚貧しく、悲劇の發達に較して喜劇(滑稽劇)は皆無に近し。前期末紅葉がモリエールを飜案せる『夏小袖』『戀の病』に似たる者すら當時の喜劇界に現はれざりき。

戯曲の飜譯は二十九年の初『早稻田文學』に掲げし逍遙の「ハムレット」最注目すべく、苦心精棟の好評なりしが、惜いかな中絶す。三十二年『太陽』に出でし戸澤姑射の「オセロ」當時出色の擧あり。三十四年月郊か譯出せる『イブセンの社會劇』は、北歐現代の名家の作「社會の敵」「人形の家」二篇を收め、獨得の詩筆を以て、最新思潮に觸れたる傑作を紹介せり。其他二三の譯述特に擧くべきなし。

「イブセンの社會劇」

第四節　小說　其の二

心理解剖、性格描寫、乃至情操細叙の小說が文壇を風靡するに方り、其の超世間的傾向の極端に趣かんとするに不滿を懐き、社會的傾向、即ち實世間と小說との深密なる交渉を旨とする傾向の盛ならん事を望む者漸多く、實業小說、宗教小說、諷刺小說政治小說、家庭小說、社會小說等、種々の形式を以て其の新要求を表せり。此の風潮は、夙くに二十九年に其の萠芽を發し、二三の論者か、或は活動を叙せる實業小說、或は道念高き宗敎小說を求めたりしが、民友社が社會小說の名を掲けて之を募集するに及び、此論漸く盛なり。然れども、社會小說の意義に至りては、頗不明にして、或は所謂社會主義の小說となし、或は戀愛を以て唯一の材料とせる從來の小說に對し、政治宗敎等社會の所有部面に廣く材を取る小說に附せる名稱となし、或は個人を描き、心理を寫せる小說に對し、社會を描き其實相を寫せる小說を指して言ふと

なし、遣語解釋各區々たりき。而も實世間に觸れよ。社會に相渉る作を出せと勸むるに至りては即ち一なり。

論壇の風潮斯くの如くなるに際し、創作壇に於ても一新潮を揚げたり。社會的諷刺小説の續出即ち是なり。風葉の「失戀詩人」柳浪が「非國民」は、共に當世文壇の一部を諷刺し、思案外史が「五濁惡世」は宗教界の葛藤を諷し、漣山人が「從五位」は華族を刺り、美妙齋が飛影の名にて出しゝ「白日鬼」は元老排斥の鋒鋩を見はし、某作家の「初霞」は某内閣を暗刺し、何れも實世間の現象に向つて諷嘲の矢を放てり。斯かる一時的性質を帶べる作品は、小説の理想より見て決して推奬すべきに非ざれど、其觀察及諷刺の著しく實世間に密接し來りしは、注目すべき現象ならずとせず。

抑も此の社會的ならん事を求むる主義は、藝術獨立主義と共に、文藝に於ける二大主義にして其の消長は小説史上悠久の事實に屬す。前者は之を人生相關主義と稱すべく、教訓主義道徳主義諷刺主義等を包括し、後者は文藝獨立主義と稱すべく性格主義心理主義寫實主義等を包括す。前者は人生と密接なる交渉を有するを利となし、實用主義差別主義に流れて永遠の生命を失ふに至るを弊となし、後者は平等無私百世に通じて誤らざるを利となし、出世間主義非國民主義に流れて人生と相關するなきに至るを弊となす。曲亭馬琴、勸懲の旗幟を飜して教訓小説を出すや、人生相關主義は一大潮流をなして明治以前の文學を貫流し、末流弊を生じて世益主義實用主義に走りぬ。此に於てか藝術獨立主義の反動は、逍遙の「小説神髓」となりて現はれ、寫實の大旆を擁して勸懲の舊主義を打破し、明治新小説は此間に生れて赫々たる功績を文學史に殘しぬ。然れども末流遂に實世間と離れ、國民の性情に遠かり、偏に小主觀に出でたる情操小説、異邦民性に出でたる飜案小説を作るに至る。此に於てか反動は再び人生相關主義の側より起らざるべからず。方今小説の新傾向は、即ち是なり。

内田魯庵

げに此の事實は、既に社會的諷刺小説に現れぬ。三十一年に入りては、更に内田魯庵の宗教小説となりて現れたり。抑も江戸時代儒教及武士道の人心を支配せし以來、宗教思想が文學の根本思想となる事、其跡を絶ちぬ。明治の作家に在りて佛教思想の片影を小説に寄せしは、獨り露伴あるのみ。基教の如きは、未だ文學の思想となるべき地位に達せざりき。魯庵は即ち此の棄てられたる基教の思想を

「暮の二十八日」

取り來りて之を小說に寄せしなり。魯庵は不知庵の名を以て前期の批評家たり。後專ら力を飜譯に注ぎしが、此の年轉じて筆を創作に染め先づ「暮の二十八日」を出し、大望を抱き事業に憧るゝ青年が、事志と違ひ、煩悶遣る方なきに際し、宗敎的光明に接して迷夢忽ち覺め、終に靜平なる家庭生活に適歸すといふ筋を描いて一種淸高の趣を帶び、從來陰慘の小說の間に一新面目を開けり。爾來『太陽』『新小說』『文藝俱樂部』等に揭げし短篇皆宗敎趣味を帶ぶると共に、社會の諷刺を含む。就中「今樣厭世男」は執拗優柔なる自稱薄命詩人を描き、「浮き枕」は上流社會が權勢と富みとを濫用して橫暴を逞うする當世の社會現象を寫し、「片鶉」は失戀の令孃が悲慘の運命を藉りて、官人と商人との間の情弊を暗刺し、其他の作概ね之に類す。

此の時に方りて、時代精神の論、文壇に起り、時代の精神を顧みず、之と相關る事なき文學は價値なき者なり、大文學は常に時代精神を代表し、當代國民の感情に最明瞭なる發聲を與ふる者なりと唱へて、益々文學の社會的傾向を皷吹する者ありき。『太陽』の高山樗牛先づ之を唱へ此の精神を表はせる文學を稱して近代主義の文學と言ひ、近代主義の文學は藝術獨立主義の文學に非ずして、十九世紀末の日本文明社會の眞精神を描破せる文學なりと言へり。『新小說』の魯庵次て之を說き、方今の小說、徒に戀愛に狂して社會と相關するなきは、是れ作家が明治思想の異相を解せざるが爲ならずやと言へり。就中魯庵は、啻に論議するのみならず、創作界に立ちて之を實現せんと勉め、三十二年「落紅」「霜くづれ」「血櫻」「電影」「靑理想」等を連出せり。不幸にして筆力其の抱負に伴はず描寫冗漫に流れ、此種作物の成功の要素たるべき沈痛の風趣を缺き、其の着想に至りても、新舊思想、信仰、道德の衝突に關する觀察必しも、神に入らず。然れども、其諷刺や批評や眞摯切實にして從來作家の如く冷嘲的ならず。勉めて時代の實相に觸れんと試みたる態度は、亦以て異彩とすべきなり。

此氣運は延いて新進作家の間にめぐり、宙外の「腐肉團」（『時事新報』）、風葉の「政黨」（『新小說』）、秋聲の「惰けもの」（同）等社會的傾向の者少からず。三者は共に當今の政黨員を主題とせる政治小說にして、就中「政黨」に、政黨員の家庭を寫せる所最讀むべし。然れども、是等も亦、魯庵の如く觀察の皮相にして、時代政治界の神に入らさるの弊を免れず。却て作家從前の作なる心理小說に劣れり。其他前田曙山は『東京朝日』

に「濁り水」「千枚張」「腕くらべ」等を連載し、當世の暗黒面社會の裏面に於ける種々の現象を暴露せしも、固より社會的小說の成功せる者に非ず。斯くして、三十二年の社會小說は、何等の著しき痕跡を殘さずして止み、爾後復發展せざりき。

さはれ、實世間に觸接せよとの要求は、磨すべからざる眞理を含み、理想派の泰斗として知られたる露伴すら尙之を唱ふるに至り、心理小說の作家も人を精寫するを主眼とする從來の着想以外、社會を寫さんと試みる者、漸く多く、個人の研究以外社會に近接せんとする傾向漸次現はれたり。所謂新寫實的傾向是なり。

後藤宙外

小說の新寫實的傾向とは、從來の寫實よりは一層廣潤なる意義を有し、個人より進んで、個人對社會の實相に入らんとする者なり。即ち從來の心理的傾向が新に興れる社會的傾向の影響を受けて成立せる一變形に外ならず。此の傾向は夙く『多情多恨』より『金色夜叉』に移りし場合に現れしが、三十二年頃より宙外、柳浪、天外、風葉等の新作家の製作概ね此の流風を追ふに至れり。宙外の「新機軸」「綠 不 綠」先づ彼が以前の作に對して新彩を加へしが、論壇に文士生活問題起るや、田園生活論を主唱して、悲觀說を寬和せんと勉めしより、此のかた、其の論旨製作の上にも現はれ三十五年の「還る光」「乳母が家」『新小說』を始め、總て精細穩健の筆、田園の情景を寫し來つて獨擅の妙あり。「ありのすさび」以後の作者の特徵は最もよく、此の和平自然、波瀾なく奇巧なき田園小說に發揮せられたり。

廣津柳浪

「縺れ糸」

「骨ぬすみ」

柳浪は多作第一の目あれども、佳作多からず。「羽拔鳥」以後三十五年迄の間に、擧ぐべきは「縺れ糸」「骨ぬすみ」「紫被布」「二人やもめ」「亂菊物語」「雨」等の數篇に止まる。「縺れ糸」と「骨ぬすみ」とは、三十二年初に『新小說』と『文藝倶樂部』とに出で、前後連鬪せる者、「紫被布」と「二人やもめ」とは亦、同年『文藝倶樂部』に分載せし前後連續の小說、「亂菊物語」は長篇の新聞物、「雨」は可憐の小品なり。何れも機智縱橫、地の文は粗笨なるも、對話の巧妙なるを以て之を補ひ、優に戲曲的活動を示すに足る。一篇の情趣、恍惚として觀照するか如き美感を催起するなきも、痛切人の肺腑を衝くの實感を誘起す。總て曩日の特徵依然として存すれども、唯其の着想、往年の如き陰慘の事相、病的戀愛はた變畸の人物に向ふ事なくして、事相人物自然に出で、戀愛亦純眞となり、「紫被布」の如きは多少當年の俤を存すと雖、尙「二人やもめ」に於て之を調攝せり。特に「縺

れ糸』『骨ぬすみ』は、着想筆力共に新發展の先頭に立ち、「河内屋」以後の佳作と稱せらる。惜むらくは作者の遂筆、一氣呵成に過ぎ、從つて濫作の弊あり、量に於て一世に超出するに係らず、明治文學の傑作として傳ふべき者甚多からず。

小栗風葉「戀慕流し」

新寫實主義は、風葉天外に至りて自然主義的傾向を取るに至れり。抑も此の主義は近代思想界の一潮流にして、文藝に在りては、美の極致を發揮するよりは、むしろ實際生活を描寫せん事を求め、總ての思辨冥想を排して、唯自然のまゝを體現せんとするなり。故に此主義に成れる文學は美醜を識別して詩材を選擇するを要とせず、自然世界百般の人事、其儘に寫せるもの、やがて詩篇たるべしとなす。されば罪惡必しも避けず、卑猥必しも去らず、悲慘必しも却けずして、社會に存する程の事相は一毫の微も之を網羅せんとす。是素より其の極端なる者に就て言へるなれども風葉天外の作風多少之に類する所あり。

風葉は曩に「寢白粉」を作り、社會暗黑の一面に筆を着けて評壇の問題となりしが、三十一年より次年に亘りて、「戀慕流」「籠下地」等を出して再注目を惹きぬ。前者は『讀賣』に連載せし者にて、一管の吹奏斯界の天才と囑目せられし青年樂師と、洋樂界多望の秀才と稱せられし少女とが、近親を棄て名譽を棄てゝ多感の情緒に殉せしが彼等が藝術の誇りと共に懷きし未來の空想、夢の如く破れ、情に脆く意に弱き彼等は社會の劣敗者となりて暗黑の裡に葬られ、はては辱められ汚され、赤縄遂に完きを得ずして『埋れ木』の樂師と少女との如き結末を告げし薄倖の譚を叙し、尙此の本筋に編み込むに、暗黑界裡の消息を少からず綴れる傍筋を以てしたり。此の篇實に風葉の名を重からしめし傑作にして、又當時の彼を代表すべき總ての性質を具備す。後者も亦薄倖の藝人を主人公となし、戀と子の愛と捩み纏れて遂に狂ひ初むるに至れるを寫し、文章の雅文を學べるを瑕とすべきも、前者と同じく葛藤の深刻なる戀譚りを綴り、當時社會の一部に存する思想煩悶を描き出でゝ妙趣なきに非ず。凡て作者の文辭凄艶にして滑脫、精緻にして婉曲、紅葉門下、最も師の衣鉢を傳ふと稱せらる。其の詩趣饒かにして一種の光彩あるは柳浪天外の遠く及はさる所、獨り鏡花に一籌を輸するのみ。且其の結構の緊密にして戯曲的開闔に富む事實に柳浪に接踵すべし。然れども、其着想の餘りに現實的なるや、時に不倫の行爲を寫して顧みず。絢爛なる詩筆も遂に其の醜を蔽ふ事能はさるを憾む。三十

小杉天外「初姿」

四年以後に於ける「醒めたる女」『黑裝束』「心中くらべ」「沼の女」等は皆此作風を追へる者にして、就中「醒めたる女」は、所謂本能滿足主義乃至個人主義の思想を含み、當代思潮に關聯する者あり。

天外は此の風潮の最極端なる代表者と見るを得べし。彼は從來諷刺小說家として知られしが、三十三年『初姿』を公にするや、揚言して曰く、小說作家は唯實世間に在るが如き人物を描き、其の人物の當然爲すべき行爲を正直に丁寧に筆記するを勉むべし。小說は其事相の如何を問はず、作家の空想せる世界に讀者の空想を遊ばしむれば足る。要は、讀者をして實世間の事に感するが如く感せしむるに在りと。即ちかの十九世紀後半の佛國自然派の主張を以て信條となすに似たり。爾來公にせし幾多の小說必ず寫實小說の標榜を冠し、勉めて敍事を省き獨語を斥け、對話と動作とのみを以て一切を描き去らんとす。蓋し此傾向は突然『初姿』に始まりしに非ず。既に三十二年の作「肱枕」『亂れ髮』「蛇いちご」「娘心」「後に「左褄」と改む」等皆作意なく、結構なく、日常囑目の人情世態を實寫するを主として、其の由つて來る因果の關係を追求する事をなさず、概ね斷片的にして有機的の一個體を形成せざりき。

「はやり唄」

『初姿』は此の傾向の益明かに益意識的になれるに過ぎず。之を其の後篇「戀と戀」及後れて出でたる續篇「にせ紫」と併せ見るに人物事件の出入偶發的にして、讀者の同情を集中し、其感興を昂上せしむべき中心の人物事件なく、唯或る性格の人が或る境遇の下に正に爲すべき行動を實寫せる者なれば、之を斷片的に見るに、個々自然の姿を寫して美醜共に嫌ふ所なし。爾來「女夫星」「新學士」等の作、皆此の作風に從ひ、客觀寫實の筆淡々として他奇なく、唯事件の變化進行に興味を感ずるのみ。

天外が自然主義は『はやり唄』に至りて代表的製作を出せり。啻に『初姿』以來の寫實の筆力漸く蔗境に入り、巧妙ならざりし對話も漸く圓熟し來りしのみならず、佛國自然派の好題目たる遺傳と境遇とを以て總ての行爲を說明せんと擬し、且つ其の題材を下層社會に取りて不倫の醜事をも避けざりし事など、所有方面に於て作家の特質を發揮したりしなり。筋は淫亂の血統を享けし女性が、夫に他の女あるを知りて嫉妬の末不和となり、次て姦通をなし「狂ふ仇花親の種」と流行唄に唄はるゝに至る始末を寫し、自然の模寫を以て藝術の要義と觀じ、善惡美醜の取捨をなし、又は醇化理想化を加ふるを欲せざる作者の實驗小說の標本と見るべく、此の見地

よりすれば、彼が一代の傑作なり。　大體に就て言へば、女主人公の行爲の因て來る所、第一遺傳、第二境遇に存する事、おぼろげながら認められ、總ての動作をば是より演繹し得へきに似たり。　然れども、各個に就て見れば、云爲唐突に失して因果の關係模稜に過ぐ、蓋し作者は其の主義よりして敍事の細きを望まず、心理描寫の主觀的筆法を用ゐず。　只管外面に現はれたる對話と動作とによりて其の進行を示さんとす。　斯る客觀的描法は、常に感覺を本とするを以て、時としては冷々淡々、同情の温きを缺き、想像の貧少と詩趣の缺乏と、亦之に伴ふ。　特に下層社會の病的現象を寫すや、風葉と同一對境を取りながら、詩筆遙かに及はさるを以て、益々感覺的に流れんとす。

。　。　・　。　。

泉鏡花

自然主義的傾向に對立してロマンチック傾向を代表する作家を鏡花となす。　彼は現實界よりも虛靈界を重んじ、自然界よりも神秘界に傾き、其の空想は人間寰を超越して夢幻境に入り、其の空想を載せたる詩筆は、幽玄の高闕を帶びて空靈の域に上る。　彼は現實自然の境地を描きて寫實小說と呼ふべき者を作らさるに非す然れとも、之を作るに方り、常に一種の神秘なる着想と幽玄なる筆致とを交へ、或は實世間の裡に超自然超人間の或物を覓め、然らされば、現實界と神靈界との間に或交渉を發見せんとす。　唯其の想像の飄逸なる、往々常軌の外に顚脫するを以て世或は妖怪小說の名を以て其神秘的美點をも沒し去らんとす。　然れども、人生何の時か神怪を絕えたる。　社會に光明的半面と暗黑的半面とあるか如く、人間に凡と聖とあるか如く、人生亦尋常知見の及ぶ半面に、不可思議なる神秘界を藏せすんばあらず。　天外は即ち、かの平凡なる人生の半面に就き、其下層社會暗黑界を寫せる者にして、鏡花は即ちその神秘なる人生の他の半面に就き、下層社會暗黑界を描ける者なり。

『梟物語』以後、三十二年に入りて益々幽怪を逞うし「錦帶記」「通夜物語」「黑百合」「湯島詣」「五の君」より「三枚續」「高野聖」「註文帳」「袖屛風」等を經て、三十五年「女仙前記」「起請文」等に至るまで、一として瑰奇の想を凝さゝるなし。　中に往々材を尋常の境地に取りし、所謂寫實小說に近き者、例へば「通夜物語」「湯島詣」「三枚續」等の如きあれども、其は神秘的分子の量の多寡によりて分るゝ皮相的差異にして、根本的性質に至りては即一なり。

故に其構想概ね或特徴を帶べる人物、或特種の神秘的事實を中心として、全篇の動作之に向つて集中するか如き型式を取る。例へば「錦帶記」は月夜五色の彩暈の出現に、妖女お禮の運命を附會し、「通夜物語」は吉原のお職丁山といふ傳法肌の女性を中心とし、

「湯島詣」

「湯島詣」は憂世に辛酸を嘗め盡したる勝氣の少女蝶吉を中心となし、「三枚續」は我儘育ちの氣象者の柳屋お夏を中心となして、三者共に數奇の運命を叙し、

「黑百合」

「黑百合」は古來人跡至らず魑魅魍魎の巣窟と傳へられし石瀧の奥深く、稀世の珍草黑百合の咲けりといふ事實を中心となし、之を採取せんとて此の神秘境に足を入れたる花賣少女と、之を救はんか爲に悴窟を搜りし少年華族とを點出し來つて一篇幽玄の曲を作り、「女仙前記」は轉生といふ靈界の現象を取りて貴族の奥方の前身を描きしか如き、即ち是なり。

「高野聖」

就中「湯島詣」「黑百合」「高野聖」等は當時の傑作として傳ふべく、前者は神秘的分子の少き方の作を代表すべく、後二者は神秘的幻境を寫せる好標本とすべし。

鏡花は人生の下層暗黑の一面に詩眼を注けり。社會凡俗の間に薄遇せられ、壓伏せられて孤弱伸ふるに處なく、而も先天の氣象鬱結して反抗の氣焰を揚け、進んで凡俗界を飜弄せんとする者、即ち彼が創作せる人物なり。其の凡俗反抗の一面より見れば、飽くまで意力の人の如くなれども、底を叩けば熱情の暗涙を湛ふ。故に其の敵に對するや猛然として破壞の暴腕を振ふと雖、其の知己の懷に在りては赤子の如く可憐に、半生の薄命を泥々たる涕涙に渾ひ盡さんとす。斯かる境界に同情せる作家は曩に一葉女史あり。然れども一葉の人物は飽くまで人間なりしに異なり、鏡花の人物は、常に一種神秘の色に包れて獨得の怪氣を現はし、遂には縹渺として超人間の幻境に入らんとするなり。若し夫れ彼の文章に至ては、洵に當代の雋逸にして、詩韻饒かに幽味掬すべく、省筆一過すれば簡淨警拔餘情言外に在り、精描細寫すれば愼密委曲錙銖を分つ。二方面を兼具して何れも短句短文錯落して變化の妙を極む。其の一たび瑰奇の想像を載せて奔逸するや、或は深山晝寂かなる「高野聖」の夢幻境となり、或は天麗かに氣澄み深林幽水咽んで滿地のうつぎ花雪の如く、闃として一鳥鳴くなき「黑百合」の別乾坤となり、其の對話の形を以て人物の口を出づるや、熱罵怒喇、紙面に躍動する所、紅葉風葉か濃艶妖冶の方面に於けると同じく、斯壇之に接踵する者を見さるなり。

以上は明側より見し鏡花の一班なり。然れども、彼の作品は必しも至醇の藝術に非ず。其の傾向の極端に走するや、暗側乃ち現れずんば止まず。彼れの缺點は牲奇を弄び怪奇を衒ふに在り。筆端の凄愴脚色の幻怪を以て想髓の淺薄を蔽はんとするに在り。彼が多數の作、此の弊に陥らさる者甚多からさるを憾とす。

・　・　・　・　・　・

文學轉進の運に乘して發達せし小說は略之を說きぬ。翻つて小說界の他の半面、即ち歷史小說傳奇小說の消息を覗ふに、時運の影響極めて少く、又新進の名手出づるなく、依然として舊態を存せり。蓋し斯道の大家は、數百年にして僅に存する者、學識筆力準備、共に尋常にして足らず。馬琴の大才を以てして、其の歷史小說は事件と人物とを史上に求むるのみにて、其內部生命は純乎たる江戸時代の者たるを免れず。況んや過渡の空氣中に呼吸する明治文壇に於てをや。今の世に在りて歷史小說の逸作を得んは殆ど不可能に屬す。されば前期以來唯新聞物に生命を維ぎ、俗衆に投じて文壇の一隅を占有するのみ。但し讀者の數を以てすれば、必しも心理小說に劣らず。特に弦齋の如きは、版圖の大なる事當代恐らくは匹なからん。玆に少しく此種の作家を取り、總て寫實小說心理小說、はた社會的小說等の範圍に入らさる小說類を叙せんとす。皆文學の進運に洩れし者なり。

村上浪六

浪六は、二十八年『たそや行燈』を出し、次て『大阪城』『當世五人男』『原田甲斐』等をものし、皆例の遊俠氣質を寫せり。就中『五人男』は二十九年より『朝日新聞』に連載せし作者什中の長篇にして、一屋の破窻に苦學を共にせし五人の書生が風雲を見て世に立つに至れる消息を描ける者。舞臺は明治なるも精神は依然として水滸傳的なり。

村井弦齋

弦齋は、世話小說をも作れども、觀念的心理的傾向は全く之を缺き、唯新聞紙上其の日〳〵を面白く讀ませ、間々婦幼の敎訓を含めたる實用小說なるに過きす。『衣笠城』『日出島』『小猫』『深山の美人』等、作甚多く、當時健筆第一と稱す。就中『日出島』は、其量を以てすれば、明治文壇の大作にして、二十九年より三十五年に亘りて『報知』に連載し、卷を重ねて十二に至る。百般の社會事象を取りて悉く材料となし、總て之を作中人物の閱歷として表出す。以て明治世態の皮相をも知るべく、無學者の學問にもなるべし。

黑岩淚香

淚香は、近時迄りに西洋通俗小說の飜譯又は飜案を『萬朝報』に揭けて依然時好を維きつゝあり。以上三者は當時の通俗小說家、新聞小說家とし

て知られ、文章平易、取材多面最俗耳に入り易し。大阪にては『朝日』の南翠此の時好小說を代表す。二十八年頃の『荒海貫一』最世に知らる。

塚原澁柿

澁柿園の歷史小說は多少の進步を見る。二十八年の『最上川』『北條早雲』等より『伊達政宗』『島左近』『五月女阪』『脫走兵』に至るまで、或は浪六を模せる痕ある者もありしが、後お自ら一家をなし、主に戰國時代の戰爭譚を綴り、美人勇士を點出して、因果應報の結末を描けり。大體に於て依然舊樣を脫せされとも、文章豪健にして內容に適應せるは、讀みて心地よし。多くは『日々新聞』に出で、新聞小說家として讀者の多き、弦齋浪六に次ぐ。

遲塚麗水

麗水は文章家なり。「不二の高根」『首陽山一帶の風光』等紀行美文に在りては、麗藻美辭有數の地位を占むるも、小說に在りては內容貧少なるか爲に、文辭誇張の弊に陷る。二十八年の『半月城』を始め、『さんざ時雨』『照日松』等皆此の頃にて、總て澁柿園の後影を踏めり。其他松葉、靑軒、『大阪朝日』の加藤紫芳、渡邊霞亭等、皆多少の作あり。就中紫芳の『臺灣陣』(二十八年)は鄭成功の事蹟を描いて當時に名ありき。

終に臨んで殘存せる舊作家中、諷刺滑稽の一面を記さん。南新二は舊文學戲作界か殘し、最巧妙なる滑稽作者にして、前期中『新作十二番』に出し「鎌倉武士」及現期に入りて『太陽』に掲けし「滑稽道中雙六」の如きは、輕妙洒脫、現代の傑作と稱せられしが、二十八年末遂に沒しぬ。幸堂得知は、黃表紙の系統を引ける戲作者にして、亦輕妙なる滑稽の筆を弄し、篁村と共に斯道の殿たり。元來滑稽の名作は、明治の文壇に乏しく、僅かに是等舊時代作家の什を以て其の面影を偲ぶのみ。

。　。　。　。　。

吾人は既に此期の小說を說き了りぬ。飜つて當時飜譯界の趨勢を窺ふに、其の進步亦著しき者あり。抑も明治文學の一進轉步をなせしは、一般學術の進步と文藝趣味の發達とに因る事論を俟たすと雖、之か原動力となりし文學者評論家を棘成して此事業を爲すに至らしめし者は、即ち泰西の思想、文學ならすんはあらす。今や國民の外國語を解する智識亦往時の比に非す、新著新作の舶來する者、古來の名著傑作と共に日に多きを加ふ。されば我文學者は、啻に之を玩味して自家の著作に資するのみならす、之を飜譯して江湖に紹介する者益盛になれり。此に於て

か、飜譯文學は文壇の一勢力となりて絕えず創作壇を刺擊し、兼て國民をして泰西文學の面影を偲はしめぬ。而も此の活動は小說に於て最も著しきを見る。

森田思軒

曩に思軒鷗外等の飜譯界に立つや、飜譯家未多からず、紹介せらるゝ泰西作家作品の範圍甚狹く、且つ其の譯出紹介、多くは抄譯梗概譯若くは飜案に過ぎずして、謹嚴忠實なる譯述は極めて寥々たりき。然るに今期初頭に入りては、文科大學、早稻田專門學校、明治學院等は、數多の新進飜譯家を出し、從つて飜譯紹介の範圍もリットン、ユーゴーに限らず、古今東西に亘りて廣く之を勉め、且つ其技倆精力も著しく進みて、飜案に非ず、抄譯にも非さる完全譯を出すに及べり。今次を追うて少しく之を述べん。

內田不知庵

思軒居士は、當初『報知新聞』に據り、其の「報知叢談」に抱一庵等を率ゐて譯筆を揮ひしが後轉じて『國會』に入り『萬朝報』に移り、老熟の手腕を以てユーゴー、ポー、ベルヌ等を譯し、三十年末沒するに至るまで、斯壇を啓發して怠らざりき。不知庵も亦斯界の先輩にして二十九年以後に於ては、ゾラを譯せる「戰塵」、コンウェイを譯せる「彫像師」を始め譯述少からず、文辭暢達を缺くと雖、譯風誠實の稱あり。彼が創作壇に活動

小金井喜美子

せし素地をなせりと見ゆ。鷗外は前期に引きかへて譯筆寥々たりと雖、妹女史喜美子、レルモントフの「浴泉記」(二十七年)ピンデルマンの「名譽夫人」(二十八年)ハイゼの浮世のさが(同年)等數篇の譯あり。皆幽婉なる雅文を以て之を綴り、活動の趣なき代りに氣品高尙なるは鷗外に似たり。三十年二人の譯稿を集めて『かけ草』を公に

「かけ草」

若松賤子

しぬ。若松賤子は亦女流飜譯家にして、英語の素養文藻の才力斯壇の異彩と目せらる。『女學雜誌』及『閨秀小說』に收めし「忘れ形見」はミス、プロクトルの韻文を散文

「小公子」

に譯せる者、三十年(沒後)遺稿として出版せられし『小公子』は有名なるバーネット女史の作を譯せる者、共に明治飜譯界の珍として永く滅びさるべき名作なり。其の他飯田旗軒、卯花庵、抱一庵、嵯峨の屋等、皆二三の譯あり。斯壇繁榮の序幕は開かれぬ。

長谷川四迷

三十年に入りて、飜譯界は局面を開展しぬ。『第二閨秀小說』なる喜美子の「心つくし」桂香の「初戀」故賤子の「ローレンス」「小品なりと雖、幽味掬すべく、今野愚公がコッルを譯せし「結婚」及「小說家」、共に筆力見るべし。此の時に方り、文壇に跡を晦す事十年なりし二葉亭四迷は、再び當年の詩筆を揮うて斯界の進運を鼓舞しぬ。二十九年

「片戀」

末『片戀』を出してより、『肖像畫』『浮草』を『太陽』に、『夢語』『親心』『腐れ縁』『酒袋』を『文藝俱樂部』に掲げ、獨得の言文一致を以て暢達渾熟の逸品を作せり。就中『片戀』はツルゲネーフの原作にして、ライン河畔の自然美を背景として詩情清婉の片戀物語を編める者。『浮き草』『親心』亦同作家の名品にして、特に後者は、母親の至情に感激して墮落娘の悔悟する筋を叙せる者。共に長大ならずと雖、內容の神韻に富めると譯筆の精嚴遒勁殆ど渾成に近きとにより、嶄然として當代に傑出し、二葉亭をして斯壇の第一流として鷗外と對峙するに至らしめぬ。其の他『文學界』の星野天知、馬場孤蝶、戶川秋骨等、逝りに南歐文學を唱へ、飄逸優婉の詩想を皷吹して、其の斷片を紹介するに勉め、『帝國文學』の上田柳村、之に呼應して近代佛英のロマンチック派文學を說き、主として小品の飜譯に力を用ゐぬ。長田秋濤は、梗概抄譯の傾あれども『浮かれ蝶』『戀のナポレオン』『王冠』等、比較的長篇を出して、斯壇に貢献する所ありき。

斯る間に譯風漸く謹嚴に趣き、抄譯梗概譯に非ず、又飜案にも非さる完全譯の出つる者漸く多く、而も小品短篇に止まらずして比較的長篇を首尾悉く譯出する風漸く盛になりぬ。先づ淺野憑虛は、三十四年『スケチ、ブック』を公にせし以來、翌年には

森鷗外

「即興詩人」

『クリスマス、カロル』、翌々年には『ヴィカー物語』を出し、皆譯文の清爽、譯風の着實を以て知られたり。次に從來飜案物を以て名ありし『萬朝報』の涙香も、亦眞面目の態度を以て、『レ、ミゼラブル』を譯し、『噫無情』と題して、三十五年の紙上に連載せり。此の時に方り、嚢に、二十七年の頃『柵草子』に譯載し初め、一時草子の中絕と共に中止し、三十年再び『めさまし草』に稿を續けし鷗外の『即興詩人』は、起稿以來、八年を經て完結刊行せられぬ。原著はアンデルセンの傑作『インプロヴィザルトル』にして、カムパニヤ生れの即興詩人がローマの歌妓と相愛して而も相悟らず、流浪落魄、幾多の轉變を經て、中心の愛嘗て渝らず、遂に歌姬か邊隙に窮死するに及び、其の遺書を得て始めて濃情熱愛十年衰へさりし眞相を知り、感謝と追悼との悲涙を尼院の新墓に濺ぐと言ふ筋を詩人が自叙の體にものし、ローマ及其附近の自然と人事とを背景として清婉の戀物語を綴りし者なり。想像饒かに叙述微に入り、詩趣縹渺として清楚の情掬すべく、譯筆亦優雅圓熟、例の擬古文なから『埋れ木』に比して一層の洗練を加へたり。且此篇、從來紹介せられさりし北歐文學の一名什なるを珍とすべきのみならず、堅實の意志不斷の精進を以て完成せし譯者の意氣を貴むべしとなす。

原抱一庵
長田秋濤
「椿姫」

三十六年に至りては、飜譯文學の機運頓に動きぬ。是より先き、歐洲近代の文學者、特に現代新思潮を代表すべき作家の思想製作迹りに我文壇に入り、或はニイチエを鼓吹し、ハウプトマンズーデルマンを紹介し、ワグネルを論じ、シェンキーウイッチを説き、或はゴルキーの浮浪思想を唱へマーテルリンクの神秘思想を道ひ、一代の思潮將に一變せんとする兆あり。從つて紹介飜譯雜然として群起し、小説に在りても富永番江の『緋文字』(ホーソーン)吉田狄洲の『走馬燈』(ドーデー)、本多增次郎の『驪語』(セウエル)、抱水庵の『聖人歟盜賊歟』(リットン)『巴里の秘密』(シュー)秋濤の『椿姫』(デューマ)、紅葉の『鐘樓守』(ユーゴー)等を始め、長短各種の作甚多く、韻文戲曲の譯と共に無前の盛觀を呈しぬ。就中抱一庵は、一時文壇に忘れられし者、再ひ往年の譯筆を揮ひ、絢爛の致なしと雖、瘦勁にして一種の趣あり『椿姫』は二十八年の頃雜誌『白百合』に揭け初められしのみにて、久しく中止せられ、八年後の今日一部となりて出てし者なり。原作は所謂十九世紀五大作の一にして、愛すべき人にして世に愛せさりし薄命の人に洪大なる同情を灑き、愛すへき人を愛せさる社會に攻擊の矢を放ちし者。譯筆は此同情を傳へんには華飾に過き、妖艶の中純淸の韻ある一篇の風趣を失へりと雖、五

尾崎紅葉
鐘樓守

百頁の長篇、暢達なる口語體を以て揮灑せる所、亦斯界の珍となすに足る。『鐘樓守』に至りては、五大作の隨一、『ノートル、ダム、ド、パリ』の譯にして、文筆の烹煉に苦心する紅葉が、多年の心血を傾注して其の繡腸を絞り、中途病魔に侵されて倚筆を絕たず、稿漸く成りて忽ち永眠に就き、遺稿空しく絕世の才筆を偲はしむるに至りし貴重なる長篇なり。げに量に於ても質に於ても文壇稀に見る曠世の鉅作をば、病軀衰餘の筆を驅りて完成せし者なれば、其成就の由來にれいて既に少からぬ價値あり。況や其文と其神と共に原作に渾融脗合するに於てをや。此小説は、巴里城內赫耀たる文明の花と、其裏面に潜む暗澹たる魔魅の風とを背景となし、ノートル、ダム鐘樓守を主人公とし、薄命の少美女を之に配して綴りなせる史的小説にして、中世の大遺物たるノートル、ダムの大伽藍を叙せるあたり、精微神に入り、之を中心にして百般の事象を編み出し、十五世紀文明の首都巴里の面目を躍如たらしめし不朽の名作なり。

第七章　文學一轉の機

明治文學も齡漸く長けて今や三十に餘れり。顧れば二十年前後、文學革新の事ありて以來、思潮變遷文運進步の急速なる、宛ら走馬燈の回るか如く、昨の新は今の陳、今の新は又明の舊たらんとす。所謂過渡文學といふ名稱は、獨り十年代の文學に與ふべきに非ず。大局の上より見ば三十年間の文學は畢竟過渡文學の連續たるの觀あらん。十八九年の交、文壇を聳動せし春の屋及其他の小說家の述作は、二十八九年に至りては、夙く陳套に屬し、之に代りて起りし觀念小說、心理小說、社會的小說の新作家が滔天の勢を以て其の清新を誇りし述作も、三十五六年の交に至りては、是亦新時代の人心を繋ぐに足らずなりぬ。獨り小說のみならんや。二十七八年に起りし和歌俳句の新彩も、茲に至りては沈滯して進まず。新體詩も亦晩翠藤村に底止して後久しく、戲曲は逍遙の試驗的述作の外、又論壇を驚かす者なし。而も之を刺衝し鞭撻して新文學を起す大動力となり來れる世界の思潮は、駸々として進む事暫くも止まず。國民の之に參する事日に月に密接の度を增したれば、文壇永く現狀に安んずべきに非ず。早晩一轉して更に新しき大文學を生せざるべからざる機運に際會せり。

當時の文學は恰も五里霧中に彷徨するか如し。舊に慊らず、新を得ず。疇昔謳歌熱中せし文學も今日既に興趣を感せず。今日興趣を感せざる文學を後來如何に發すべきかを知らず。懊惱煩悶の容、文界に普く、二十九年より三十一年に亘れる活氣疾く去りて沈滯の空氣斯壇を覆へり。此の時に方り二十年以來の文學者にして時勢の犧牲となりて影を潜め姿を隱す者漸く多く、或は筆を燒きて他に轉じ、或は轗軻落魄世に埋もれ或は筆を案じて病に仆る。矢田部尙今外山丶山相次て沒し、井上巽軒復歌はず。逍遙身を敎育に抛ち、四迷復び隱れ、賤子、稻舟、一葉、薄氷積いて仆れ、思軒及硯友社の二三子同じく世を辭し、美妙嵯峨の屋遂に當年の勇なく、湖處子忍月各他方面に轉じ、鷗外稀に筆を取ると雖、雜誌『萬年草』は、遂に『めざまし草』の如く盛なる能はず。露伴は江畔の悠遊に龍蛇の氣を沒了し、紅葉は硯友社の諸傑と共に俳道に耽らんとす。三十五年より六年にかけては、文星落つる者連りに、子規樗牛先づ沒し、紅葉萩の家之に次ぎ綠雨抱一庵少しく遲れて三十七年亦

之を追ふ。斯くの如きは皆時勢の一大旋轉をなすべき現象にして、正に新陳代謝の樞軸に當れる者なり。今次を追うて此の時代の狀勢を覗はん。

第一節　俳句和歌及新體詩

「春夏秋冬」

俳句界の形勢は既に三十一年に定まり、日本派の趣味作風全國に瀰漫して、新教養あり新趣味を懷ける青年俳家皆之に赴き、競うて俳會を結び俳誌を起し、日に月に隆盛に向うて又蹉跌する事なかりき。然れども內容の進步は到底勃興當時の如く目覺しきを得ず、其の變化も亦當時の如く根本的なるを得ず。概して單簡より複雜に赴き、瑰奇より平淡に向ひ、天然より人事に進み、敍景より抒情に移り、純客觀より主觀に及ばんとするに過ぎず。三十四年の句集『春夏秋冬』を以て『新俳句』に比する時は、容易に此の間の消息を窺ふを得べし。されば此の前後の俳句は、日本派創業時代に播種せし所の者を收穫したるにて、三十五年に於ける『獺祭書屋俳句帖抄』『增補獺祭書屋俳話』の出版、及び子規の病沒は恰も此の事業の大成を告ぐる標章の如くなりき。

鳳晶子

「亂れ髮」

和歌壇に於ては『明星』に據れる新詩社一派『心の花』に據れる竹柏園の門流『馬醉木』を刊行せる根岸の一派、新詩社より別れて『白百合』(三十六年)を發刊せる青年歌人の一團、及び萩の家の門流、金子薰園尾上柴舟等、作家益多きを加へ、作品の數量遙に前年に超ゆ。然れども其の思想聲調の一代文運の進步に伴ふに至りては俳句と等しく未だ容易に許すべからず。獨り『明星』に於ける女作家鳳晶子、放縱なる感情を歌ひ富瞻なる想像を逞うして一種の詩調を出し、詰屈奇峭、措辭は大膽に句法は奇拔に、複雜斬新なる譬喩擬人を敢てして歌壇の面目を一新しぬ。假令其の極端に走る所、或は嶮怪の譏り晦澁の嫌ひなきに非ざりきと雖、詩才の縱橫情熱の熾盛、斯界希に見る所なりき。詩題は概ね當時の新體詩と趣を同うし、主として戀愛を歌ひ、然らずんば小說的趣向の人事、神秘的空想を逞うせる情景を詠ず。而も其の思想に當時青年の間を流れたるロマンチック傾向を帶べるものあり、能く青年一部の感情を表出して最新の思潮に觸れたり。これを以て此の作風一時青年歌人を風靡し『明星』一派の特色となりて斯壇に重きをなせり。晶子の歌集『亂れ髮』(三十四年)『小扇』(三十七年)は啻に此作家を說明する好箇の標本たるのみならず、當代

「舞姫」
「夢の華」

歌壇の新潮を翫ふべき代表的歌集なり。明治の和歌が思想形式共に舊觀を改めしは、直文鐵幹の時に非ず、信綱子規の時にも非ずして、實に晶子等の當時に在るなり。爾來晶子の歌漸く圓熟を加へ、當年の純主觀的傾向を離れて著しく客觀的事象の吟詠を增し、一誦すれば自然の風物が人間に對して渾然融合するを感ずる者あり。『舞姫』(三十九年)『夢の華』(同年)二集は正に其の高調に達せる者にして、『亂れ髮』に比ぶれば跌宕博大の別趣を加へたり。然れども盛觀茲に底止して又發展の餘地なきが如く、短歌革新の事業は既に其の終を告げたるに似たり。新代の文運に對する交涉は著しく疎くなりしを覺ゆ。

轉じて新體詩界に移らんに、三十五年以後の形勢は俳歌兩界に比して遙かに活氣に富めり。藤村筆を此の方面に絕ちて小說界に移りしも、晩翠、泣菫、月郊、有明、花外、泡鳴、醉茗の徒『帝國文學』『明星』『新小說』『太陽』『文庫』等に奮ひ、平木白星前田林外相馬御風山崎紫紅等亦次て起り、『小天地』『白百合』等に據りて一時斯壇に光焰を擧げたり。

今次初頭の新體詩は一般に懷古的色彩の著しきものあり。二十九年以後の可

「藤村詩集」
「東海遊子吟」

憐なる戀愛詩に倦み、卅四年前後の所謂星。菫。戀愛詩に饜きたる韻詩社會は、新なる詩材を覓めて端なく過去の生活に眼を集め、回顧憑弔の意は一たび現はれて古典的詩歌集の刋行となり、『半月集』(半月)『霓裳微吟』(羽衣)『藤村詩集』(藤村)新に世に行はれ、二だび現はれて古蹟古詩人の憑弔過去藝術の讚美を試みたる晩翠の『東海遊子吟』(三十九年刋)月郊の『春雪集』(三十六年刋)となり、三たび現はれて古英雄を賦したる鐵幹等『明星』の史詩敍事詩となり、四たび現はれて古語復活神話傳說の復現を試みたる泣菫の譚歌となり、五たび現はれて史實傳說等を脚色したる白星等の劇詩となり、以て四十年に至り、斯界別味の一系をなせり。

晩翠

晩翠の吟詠は多く泰西羈旅の作にして、仰て過去の藝術を想ひ俯して現代の文明を觀たる詩人感傷の聲なり。正に是れ『チャイルドハロルド』の流風遺韻を汲める者、歷史の國藝術の國なる南歐の風物を歌ふに於て特に精采を見る。嘗て『曉鐘』に現れし淨樂界の翹望益々著しく、遂に此の理想實現の世を我日東帝國の未來に求め、新文明新文藝の出現を望んで國民新に歌あれと祝福するに至りぬ。

泣菫

泣菫の神話的譚歌は斯壇に一新生面を開きたるものにして、三十六年の「雷神の賦」『明星』

「天馳使の歌」（『新小説』）三十九年の「葛城の神」（『早稻田文學』）等、陳套の傳説を復現して光彩ある一新藝術品となせる績歎賞に價す。「雷神の賦」は朔風怒濤吹雪雷鳴を覩じて一條の神話的構想をなし、「天馳使」は伊弉諾黄泉行の神話と比治山羽衣天女の傳説とを結合し、諾冊二尊長へに別れてより子孫女性の慈悲を知らざりしに、眞名井の翁天女「慈悲」を下界に抑留してより人の世に絶えたりし女性の慈悲再び現はれ、下界之より新代の歡樂に浴するに至れりといふを想髓として趣味ある一篇を成せり。而して泣菫の詩語を洗練するや嘔心を極め、特に古語を復活する運用の才遙に前年の擬古派詩人に優り、紀記萬葉の語彙を驅使して窈窕の態なし。流風延いて當時の詩界を吹き靡け、鐵幹有明以下青年詩人等皆其の轍に倣ひ、爭うて耳遠き古語を羅列するに至れり。されば其の極まる所弊も亦伴ひ、晦澁に陷り無意義に終る事少しとせず。

新詩社一派の敍事詩は純然たる史詩譚歌に非ずと雖、新體詩創始以來斯界に缺如せる一面を充せる者にして、三十六年鐵幹紫紅白星泡鳴等が「源九郎義經」「日本武尊」をものして研究を試みしを始め、泡鳴は「嗚門姫」「豊太閤」を出し、紫紅は「日蓮上人」を出し、白星は「心中おさよ新七」及劇詩「老西郷」「耶蘇の戀」「釋迦」を出し、以て一時詩壇の單調を破りぬ。就中白星は別に『日本國歌』と題して『曉鐘』の後半『行春』の一部に見えたる如き時事に關する感慨の詩、時事に對する主張の詩をも公にせり。

然れども此の敍事詩史詩の流行は空華一時の盛觀を殘すに止まり、文壇の中心若しくは詩界の本系に對して何等著しき影響を與へしを見ず。斯壇の中心勢力として次代の新潮に直接關係を有するは、むしろ神祕派空靈派の一流に存す。されば敍事的傾向の行くへを辿る事は暫く茲に止め、翻つて當時の神祕空靈の詩品を模索せんとす。唯筆を改むるに方り尚一事の述べざるべからざる者あり。從來詩系の外に立てる一詩星の突如として光鋩を放ちし事即是なり。

露伴「出廬」

三十七年小説家露伴「出廬」の一篇を『讀賣』に掲け、連載十ヶ月、詩壇無前の長篇として一時人目を眩耀せり。其の引に曰く、「出廬」一部四編、第一編は世の悦ふに足らぬを言ひ、第二編は詩の愛すべきを敍し、第三編に至つて空想に遊ぶも亦實在の累する所となるを免れざるを述べ、第四編に於て詩と世と共に悦び愛すべく、實在と空想と相即き相容るべきを詠じたり。こは予が將に世に出さんとする詩集『心の跡』

全卷の序として看るべしと。不幸にして『心の跡』は遂に世に出です。作家詩想の神髓如何を知るに由なしと雖、『出盧』のみを見るに理義透徹して情趣亦饒く、說論明晰にして詞藻亦豐麗、言はゞ作者多年の蘊蓄を傾倒して人生哲學を歌ひ出でし者、即ち人格の詩哲理の詩なり。而も此種の詩篇は動もすれば吟詠の境を出でゝ說論の界に入らんとするが故に、詩としての成功如何は直に表現の技巧に關す。『出盧』の結構整正に過ぎ、修辭縱橫を極めたるは、却て此の點に於ける不利となり、渾融の致に缺くる所少からず。吾人は唯時流の外に卓立せる一種雋逸なる詩想聲調を得、專門詩人以外の警拔なる修辭用語を得て、斯界の爲には有力なる刺擊となりしを喜ぶ。

顧つて思ふ。我か新體詩の本流は何所をか行ける。曩に空想的戀愛に醉ひ、中頃官能的戀愛に耽りしもの、急速なる文明の進步に伴ふ現代人の複雜なる心情に適合する事能はす。暫く理想の滿足を過去世界に求めて敍事詩史詩を試み、或は之を現在のまゝの娑婆世界に求めて逍遙の『新曲浦島』露伴の『出盧』に見えし如き理想即現實の思想を歌ひしも、强烈なる自意識の壓迫に苦める現代青年、最近西洋文學の新潮に知己を見出でたる現代讀詩社會にとりては、前者は美しき夢の世の如く、自己と相距る事餘りに遠く、後者は諦め過ぎ悟り了れる聖者の如く、自己と相背く事餘りに甚し。是に於てか、憧憬煩悶遂に靈を呼び神を呼び、一種の神祕的冥想的の詩風を形作るに至れり。『二十五絃』(三十八年)の作家泣菫、『獨絃哀歌』(三十六年)の作家有明、『夏花少女』(三十八年)の作家林外『夕潮』(三十七年)『悲戀悲歌』(三十八年)の作家泡鳴の如きはこの作風を代表せる者なり。

「二十五絃」

『二十五絃』は之を彼の藝術の悠久を歌ひし『行春』に比するに著しき詩想の變化あり。多くは自然を觀照して中に一種の靈を覓め、飄逸なる想像と曲折ある譬喩と相俟つて一脈神祕の薫りを浮動せしめたり。「虹の歌」には各種の生活と自然現象とを結合し、『公孫樹』には落葉を實在の證明と觀じ、『翡翠の賦』には小禽の生態を見て其の胸に包める祕密を思ひ、『金剛山の歌』には自然を人格化して高山の曙色を歌ひ、其他『霜月の一日』『神無月の一夜』等皆自然を靈化して幽玄の想像を馳せたり。

「獨絃哀歌」

次に『獨絃哀歌』は靜思の姿冥想の趣全篇にほのめき、前代の熱情的戀愛詩に對してよく當代の特色を現せり。門へは『靈鳥の歌』『佐太大神』等に空靈高渾の想像を凝し、『幻影』

有明　「夏花少女」　林外「夕潮」「悲戀悲歌」

「蓮華幻境」「光の歌」等に神祕淸遠の憧憬を披瀝し、「聖樂園」「頼るは愛よ」「君も過ぎぬ」等に靈氣に滿ちたる信念を吐露し、特に「幻影」の一篇、かの心に求むる所ありて求め得ず、捉へんとする影ありて未だ其の形を確め得ざる無限の哀愁を幽婉の詞章に寓せ、總て宗敎的神祕的の色彩を帶びたり。流風正しくロセッチに出で、前代の泣菫がキーツの遺韻を汲めると相對して詩風の變遷を適切に覺知すべし。要するに有明の詩想は情緖の靈化せられたる淨樂界を翹望し、「永世の脈精氣滿ちて時劫の進み老いせぬ愛のとかげ」の實現を見んと冀ふ者なり。而して此の夢幻の如き幽情を傳へて晦澁ならざらしめんか爲に修辭上多大の苦心をなし、或は譬喩を用ゐ、或は抽象を具象化し、觀念を感覺化するに努めたり。

『夏花少女』に在りては「魔怨」「妖魔の泉」「沙雲雀」「妖女」「魔障」「夏の夜の夢」等の諸篇、總て怪奇の空想を逞うして幽魔の境に入り、陸離たる麗藻を凝して技巧の堂に上る。彼は非情を人格化せんとする事泣菫に似て魔氣に富む事之に過ぐ。次に『夕潮』『悲戀悲歌』は同じく一味神祕的基趣を帶び、達し難き翹望の惱みを表せり。之を他作家に比ぶるに泡鳴の詩は理を以て邁り、他の唯美的の詩篇に對して著しく哲理

泡鳴

的に傾けり。唯其の措辭餘りに直截、語彙餘りに貧少、理路餘りに露骨なるを失とす。然れども當代詩界に缺如せる剛健重厚の作風に至りては、遂に之を泡鳴に求めざるべからず。『悲戀悲歌』の中なる戀愛詩が一樣に神祕的宗敎的色彩を帶べるは言ふも更なり、『夕潮』の中なる「あゝ世の歡樂」の如きは、かの心に求むる所ありて而も得られざる苦惱を詠じてよく當代の詩風を表せり。

詩想の傾向かくの如く變遷しつゝある間に、詩形に於ても幾多の新試驗はなされぬ。晩翠は必ずしも七五五七によらず、時に長短句を試み、泣菫は前の八六調の外種々長短句を混用し、有明は四七六の一句八行六行の二節より成れるソネット形を試み、林外は八七調四行八行二行の三節より成れるソネットを作し、泡鳴は八七、七六、六四、七七等各種の詩律に指を染め、其他苟も詩人にして詩形に關する多少の研究をなさゞるもの殆と無かりき。

當時詩界に於ける此の新潮の出て來る所は、勿論一代人心の傾向に在りと雖、新詩人を刺戟し暗示したるものは實に泰西詩人の作品なり。三十四年以來刊行せられたる『ハイネの詩』『ゲーテの詩』『ユーゴーの詩』『キーツの詩』『ヲルヅヲルスの

詩』『テニソンの詩』『セレーの詩』『バーンスの詩』等幾多の譯詩は、是等泰西詩人の作品が如何に當代人士に愛讀せられしかを證すると共に、孰れの詩人の作風が當代を動かしつゝあるかを明にせり。晏に情熱を歌ひ古典的の作風を追ひし時は前掲の英獨詩人に影響を受くる事少からざりしが、近時ロセッチスキンバーンに私淑して玆に有明等に見ゐたる空靈神祕の詩趣を喜ぶに至れり。斯かる間に三十八年前後に至り、更に佛國象徴詩派を紹述して一種の象徴詩を我詩壇に導き入れしにより、詩風一轉の機新に兆して斯界頗る色めきぬ。事は次章に詳悉すべし。

斯くの如くにして當時の形勢は藤村晩翠が一世を指導せし時に比して著しく變遷し、一代の詩人二家の境地より一歩を進めんとするに方り、右往左往各其の好む所に從ひて上來述ぶる如き諸種の詩風を起し、其の他醉茗の如き花外の如き亦一種の詩調を出し、或は泣菫の『白玉姫』(三十八年)の俗謠體となり、或は晩翠の律詩(同年)となり、或は露伴の四行詩(同年)となり、暗中模索動搖の態所在に現れぬ。而も中に一道の本流之を貫くあり、新代の思潮に應せんには早晩一回旋を試みざるべからざるに至りぬ。

第二節　小說及戲曲

三十四五年來、小說界の氣運著しく沈滯し來り、作品の量作家の數遙かに前代に超ゆるに係らず、新代の人心に添ふべき佳篇甚乏しく、舊作家は萎微し、新作家は未だ形を成さず、斯界暫く混沌の間に在り。其の間多少注目を價する者は、露伴の『二日物語』(三十一年)『天打つ浪』(三十六年)紅葉の『金色夜叉』續稿(三十五年)眉山の『石卷庄左衞門』(三十六年)天外の『魔風戀風』(同)風葉の『凉炎』(三十五年)鏡花の『白羽箭』(三十六年)『風流線』(同)及新進作家春葉、秋聲、德富蘆花、菊池幽芳、中村春雨、島崎藤村、山岸荷葉、田口掬汀、永井荷風、草村北星、生田葵山、三島霜川、木下尚江等の二三の作品に過ぎずして、未だ一世を指導すべき大勢力となれる者を見ず。左に少しく這般の消息を覗はん。

『金色夜叉』未だ完結に至らずして作者宿痾に惱み、起稿以來五ヶ年を經て一臥途に起たず、三十六年晩秋未完の大作、彫心鏤膓の迹を留めて詩魂長へに逝きぬ。文壇の先覺紅葉の文學的事業は斯くして終を告げぬ。吾人をして暫く彼を回顧せ

しめよ。彼は一身を以て詩神に献したりし天成の文學者なりき。文藝に對する趣味の廣きや、文學の所有種類を試みて倦まず。而も之が創作に從事するや、主題の研究周匝を極め文字の推敲慘憺を極む。其藝術的良心の旺盛なる文壇其の比を見ず。彼の將に死せんとするや、弟子を顧みて曰く、七回生れ更つて文章の爲に盡さんと。彼か生涯の事業は、一に此の抱負と覺悟とより來る。硯友社を結んで新文學興隆に盡しゝも、之が爲なり。門下俊才を養うて文學敎育家の典となりしも之が爲なり。文學者對社會の問題起る毎に、一身を以て文學者の長城となりしも之が爲なり。十千萬堂出版社(三十六年)を起して文學者に對する出版業者の迫害を防遏せんと勉めしも亦之が爲なりき。是等の點に於ては、彼は實に明治文學者の巨頭たり。唯其の作物の傾向に至りては、紅葉は未だ文學界全般の代表者たるに足らず。彼れの代表するは其の都市的半面に止まる。彼は純乎たる都市的詩人なり。其の小說俳句は都市の情に入るの深き、人事を穿つの犀利なる、口語對話を操るの巧妙なる、殆と天品に出で、之に反して田園の情を描き自然の景を寫せる者は、概ね皮相にして神に入らず。冥想靜思の趣致お自ら缺けたり。故に小說家にては馬琴よりも京傳を偸び、俳人にては芭蕉蕪村に赴かずして樫林江戸座に往き、紀行文『煙霞療養の』如きは、全然失敗に歸したり。此の對比は總ての都市文學者と田園文學者との間に存し、觀察着想文體技巧等兩者各其の特長を具ふと雖、殊に紅葉都市的特長の粹を集め、宛然東京詩人の代表者たり。故に其の特質の範圍內にては彼れの才は多面無礙行く所として可ならさるなく、特に其の本領たる小說は洵に明治文界の名珠にして、其の發展推移の迹を敍しなば、直に一部の明治小說史を成すべし。『我樂多文庫』の昔より『金色夜叉』に至るまで、二十年間の作、初は江戶戲作者の面影を帶びし者、漸く移りて泰西作家の思想聲調を傳ふるに至りし始末を見るに、彼れの小說は事實に於て新舊分子の混融する所、東西文學思潮の合流する所、敲かば何れ過渡の音を發せざるなし。思ふに三十年間の文學は、大局より見れば、畢竟過渡の產にして異日精華を開くべき新國文學の基礎を置ける者。紅葉の如きは正に此の遷轉期の偉人たるべし。

露伴「天打つ浪」

紅葉の逝去に先つ事少時、露伴は「天打つ浪」を『讀賣』に揭け初めぬ。爾來斷續遂に完成せざりきと雖、着想詞藻作者の特長を發揮し、小說界一般の潮流に關せず、獨り

其の本來の理想的傾向を進め、人生哲學の披瀝益、蘊奥に入り、且つ其の宗教的神祕的思想は新彩を帶びて益、幽玄の致を加へたり。其の文章に至りては雄健周匝、神來一揮の妙益、加はり、多年の蘊蓄、傾け來りて作家の面目を躍如たらしむ。思ふに露伴は、紅葉と等しく文學的修養を舊時代に得、舊文學を鑑識せる眼光を以て泰西の文學を見る。故に創作の内容外形、共に純然たる新文學なる能はず、言はゞ過渡時代文學者の粹たるに過ぎず。然れども彼が述作に臨むや、深邃なる研究と該博なる渉獵とをなし、準備既に成り材料既に集らば、乃ち神興を藉りて一氣揮灑、詩想混々として盡きず、詞章陸離として輝く。而も内に養ふ所の氣魄精神は、文字以外作風以外に卓立して容易に他の追蹤を許さず。露伴の如きは實に新舊文學遷轉の軸頭に立ちて過渡時代の精粹を集めたる明治文學史上の一大記念なり。

斯くて過去小説界を支配せる二巨人相繼て辭し去り、次代を形作るべき作家は各、自家の傾く所を盡くして特種の作風を發揮しつゝ暫く道途に迷へり。就中當時の讀者社會に比較的勢力を得て一時世に行はれしは、所謂家庭小説の一流なりとす。蓋し前代以來痛烈なる刺戟を要求せる人心に適應せんが爲めに、深刻悲慘なる作風の行はるゝを見しが、其の弊の極まる所、茲に沈滯し、萎微し、遂に反動を起し、人心一時新なる或者を需む。此の間の消息は夙く前章に説ける柳浪が作風の變遷に表れしが、茲に至りて明に其の體を露出せしなりき。蘆花幽芳春雨春葉掬汀柳浪等の最近の作風即是なり。

蘆花「不如歸」

蘆花は夙に民友社の紀傳家として知られしが、三十二年『不如歸』を『國民新聞』に掲げ、小説家としての名聲俄に揚りぬ。爾來三十四年『思出之記』翌年『黑潮』を公にし、最時流の歡迎を受けたり。著想結搆特に秀てたる事なく、描寫の技巧必しも精妙ならずと雖、一篇の骨子たるべき事象は健全なる家庭的趣味に富み、至醇の戀愛を以て肉つけられ、深切なる同情を以て衣つけられて一種道念の高潔なる作品を凝成せり。獨り『黑潮』は明治の文明明治の社會の側面觀を具現せし社會的小説とも見るべけれど、中に貫流する一道の情趣は亦前二者と同一に出づ。

幽芳

幽芳は新聞小説家としてむしろ俗流の嗜好に投せん事を勉むるものなるのみならず、作品多く飜案に似て本邦現代の生活と相渉る者少ければ、特に文壇に重きをなすに足らずと雖、一時讀書社會の人氣を得たるは、即ち『己が罪』『乳姉妹』等の家庭的趣味に負ふ事

掬汀　春雨　春葉

少からず。掬汀は其の地位傾向二つながら幽芳に似、『人の罪』『伯爵夫人』等新聞小説として著名なりしは皆此の潮勢に乗せるによる。春雨は新進の作家にして三十四年『花果』の作を以て知らる。着想純眞にして中に一貫の道念あり、最も宗教的色彩に富む。春葉は平靜温藉なる家庭小説を能くし、紅葉の絢爛風葉の妖艶なる代りに淸楚掬すべき旨味あり。既に『錦木』(三十四年)に其の傾向を示し『忘水』『いさゝ川』の短篇に漸く形をなし『母の心』(三十八年)『宿り木』(三十九年)『古驛』(同)に至りて明に家庭小説を標榜せり。柳浪は近時作風を變じて筆を家庭小説に著け『二筋道』『繪師の戀』等皆時尙に適應せんと努めしに似たり。

斯くて家庭小説は一時新聞小説を中心として盛に行はれしが、詳に其の内容を省察すれば其の案外に空虚なるに驚くべし。時代の社會道德に適應せんと企てたる態度は文藝其物の上より見て疑すべきか否かは俄に判すべからずと雖、之が爲に強て作爲の迹を殘すか如きは遂に高級藝術の事に非ず。不幸にして當時の家庭小説は結構描寫二つながらわざとらしき作爲の迹を存し、到底進步せる讀詩社會を滿足せしむるに足らざりき。蓋し當時の家庭小説は前述の如き反動の勢に成りしもの、固より確たる根柢あるに非ざりしなり。

秋聲　荷風　風葉　藤村　天外「魔風戀風」

されば當時の小説界には依然として相反せる潮流あり。秋聲は『雲の行くへ』(三十四年)『春光』(三十五)『桎梏』(三十六)等に沈痛の筆を揮つて敗れたる人生の或問題を解釋せんとし、荷風は『地獄の花』(三十五)『夜の心』(三十六)に於て人間の獸性に著想し、遺傳と境遇とに伴ふ小説的事件の開展を敍し、風葉は『凉炎』(三十五)に官能の刺戟によりて人間の道念と獸性とが迭に消長する契點を描き出て、藤村小説界に入りて『舊主人』(三十五)『水彩畫家』(三十七)に愛情なき家庭の主人が外圍の事狀に引かれて自然に落ち行く情塊の果てを寫し、皆前章述へたりし自然主義的傾向を帶びて而も一層深痛なる内省の迹あり。而して此の方面を代表して當時最盛名ありし者を天外の『魔風戀風』となす。三十六年春より『讀賣』に出でし長篇にして、作者が所謂寫實小說益々現實的となり、事件人物悉く現社會に粉本を求めて敢て醇化を加へず。之を主人公の性格に見るに、感情と理性との發達に比して意志甚しく薄弱、感情の盲動は直に理性の反抗を受けて煩悶を極むるに係らず、意志の力を以て之を斷ずる能はず。而も主我の念熾なるが故に、強て自ら辯じ自ら欺いて以て心

尚江
鏡花

裡の煩悶を壓伏せんとす。斯かる性格は正しく現代の教育ある青年の間に存し之より惹起せらるゝ種々の事件は正しく現世相の一端を表せり。唯其の描寫、世相の形に偏して其の神に入らず。教育ある青年學生を點出せるも其の頭腦を支配せる最新思想に及はさりしが故に、未だ適切に吾人が心胸に響應する事能はざりき。

述べて茲に至り、顧みて小說壇を通覽すれば、前述二潮流の外、尙ほ蘆花の『黑潮』と略其の性質を同うせる尙江の社會小說『火の柱』『良人の自白』あり。鏡花水蔭の如きロマンチックの作風を續くるあり。種々の試驗雜多の提唱、皆是暗中の模索ならざるはなく、混沌として大勢の何れに適歸すべきかを審にする能はざりき。

轉じて劇界に入らんか、不振の狀勢は依然たりと雖、裡に一道の暗流大變遷の前兆を爲す者あり。作劇の方面に在りては著しき活動を見すと雖劇場觀客俳優の方面に一新現象を呈しぬ。即ち第一、競うて新小說新脚本を演するに至り、第二、頻りに西洋物の飜譯飜案を歡迎するに至り、第三、新俳優は第二期の發展をなし、第四、舊俳優は屢新劇を取りて新俳優と競はんとするに至りき。時正に三十六年なり。

「玉匣兩浦島」
鷗外

小說の戲曲化は「心の闇」「將男」「己か罪」を始めとして、「不如歸」「金色夜叉」「高野聖」「畜生腹」「黑潮」「乳姉妹」等、小說として最讀者に歡迎せられたりし者には相次で行はれ、皆舞臺に上せられたり。此現象は純粹なる文學的見地よりは、素より推奬すべきに非すと雖、社會が舊劇に飽きて何か新しきを求めんとする過渡期の現象として必しも斥くべきに非ず。之か爲に作劇家を刺激して好新劇を產出するを得は、洵に文壇の慶事なり。『沓手鳥孤城落月』以來久しく消息を絕ちし脚本新作の事、三十六年復び新聲を傳へしは、多少此の間の關係に因れりといふべし。松葉が左團次の爲に書きし二三の新作は暫く措くも、鷗外『玉匣兩浦島』(三十六年)及『日蓮上人辻說法』(三十七年)を作り、月郊『大鹽平八郞』(三十六年)『江戶城明渡』(同)を公にし、風葉柳浪等亦一二の新作あり。『兩浦島』は浦島傳說に新意匠を寓したる二幕の小劇詩にして上編は、浦島太郎か龍宮歡樂の夢さめて仙界平和の空想に飽き、漸く世間の事業人間の活動を懷ふに至りしを敍し、下編は人界三百年を經たりし後の世、太郎が裔なる後の浦島、活動の事業に向つて努力せる者、仙界三年の歡樂を捨てゝ歸りし先祖の浦島に邂逅し、兩人手を執つて「思ふは祖先、行ふは子孫にこそあれ」と謳ふを大筋

月郊

となす。着想の存する所は批評家の見る所一ならずと雖、浦島傳説に一新生命を與へ、露伴の『新浦島』以外、一新發展を加へたるは爭ふべからざる功績なり。全體、歌劇風の劇詩にして白は總て七五律を以てし、典雅平正なる雅言體にて成る。されど此の大膽なる創意は形式の單調科白の緩漫の爲に、不幸にも舞臺上の失敗を免れざりき。『辻説法』は七五調によらず、雅言に拘せざりしが故に、此點に於て少からぬ利益ありき。中幕物の小篇なれども、鎌倉武士をあしらひて日蓮の英姿を寫し、雅醇森嚴の趣饒し。『大塔』と『江戸城明渡』とは在來脚本體の史劇にして、題材の選擇表現の技巧、共に『眞田幸村』の比に非ず。唯其奇拔なる着想と雄大なる結構とに伴ふべき事件の配置、科白の練成に缺くる所あるを憾とす。

新作歡迎の氣運は延いて飜譯飜案の悦ばるゝを致し、世俗迎合を事とする梨園は競うて此の種の劇を取れり。月郊の『闇と光』(キングリア)、水蔭の『オセロ』春曙の『ヱニースの商人』『ハムレット』漣山人の『瑞西義民傳』(ヰルヘルムテル)等は即ち此の要求に應じて出でし者なり。されど、皆唯輪廓を象りしに過ぎず、素より完全なる飜譯脚本に非ず。

以上各種の新劇は皆彼の新俳優によりて演せられし者にして、曩に夢幻劇一派に敗れて屛息したりし新俳優の一團は復び其面目を起しぬ。此の時に方り、舊劇の大立物として妙技斯道の精粹を蒐め、以て其の末路に大光明を放ちし菊五郎團十郎左團次の三者は、三十六年春以來相次で幽界に入りぬ。殘存の諸優は過去の遺物に據りて新時代の好尙を維ぐべき大手腕ある者に非ず。是に於てか相率ゐて新劇に入り、三十七年大阪の我當上京して芝翫高麗藏等と連合し始めて『桐一葉』を演じぬ。是れ斯界の一大旋轉機なり。蓋し垂死の舊劇が命脈を今日に維ぎたりしは、主として二三名優の斯壇に有せる惰力と、新派俳優に名手なきとに因る。今や此の惰力を失ふ。舊劇の殘壘危しといふべし。新派の徒が杜撰なる脚本と未熟なる演技とを以てして、尙舊派に優る人氣を得たるは、主に舊劇の世潮に合はざるに由る。されば舊派俳優にして演技を以て世に立たんとすれば勢新劇を取らざるべからず。而も新俳優の跡を追うて小説劇飜案劇を弄ばんは、徒に彼等の後塵を拜するに止まる。茲に至りて我當等が新劇を索めて『桐一葉』を取りしは獨り彼等の慶のみに非ざるなり。『桐一葉』は製作當時に論せられたりしが如く、

脚本として批難無きに非ずと雖、舊型に新想を盛りたる漸進的性質は、過渡期の劇として適切なる、素より飜案劇小說劇の比に非ず。況や上場の成績に徵するに、運命悲劇としての價値遺憾なく發揮せられたるをや。『桐一葉』世に出で、八星霜、今日始めて劇壇刷新の道程に上れり。爾來三十七年には『辻說法』三十八年には『牧の方』三十九年には『沓手鳥孤城落月』相次で舊派俳優に演せられ、作者の盛名と敎育ある新觀客の同情とによりて、全然舊劇を壓倒するに足る好評を得たり。

逍遙「新樂劇論」

三十七年秋久しく敎育界に隱れたりし逍遙は、再起つて『新樂劇論』を草し國劇將來の發展に關して多年研鑽の結果を公にせり。曰く今や國劇刷新の要迫れり。而も刷新の方針は國劇固有の要素の上に立てられざるべからず。飜つて想ふ、國劇は其の能。たると歌。舞。伎。たると、振。事。たるとを問はず悉く樂。劇。の要素を有す。故に刷新を計らん者は、須く樂劇たる性質を需要と好尙とに應じて發展し醇化し、以て二十世紀文明國の藝術たるに相當すべき一種の純樂劇たらしむべし。然らば從來の三種樂劇の中孰れを取りて將來國劇の基礎とすべきか。能劇は畢竟過去の美術にして將來の好尙に適せず。歌舞伎劇亦然り。唯常盤津長唄等の振事劇のみ醇化發展の希望あり。其の作意脚色樂曲科介扮裝等に存する缺點を除くを得ば、庶幾くは進步せる將來の好尙を維ぐに足らんかと。斯くの如きは本論の緖論に過ぎずと雖、純劇即科白劇を起して泰西の糟粕を嘗むるを避け、過去の國民生活を尊重して其の特質の上に立てられたる新樂劇を得んとする識見は、略之を覗ふを得。之を著者か『桐一葉』を公にせし頃の意見と比するに、劇の形式に關しては多大の徑庭あり。蓋し當時は從來の劇を導いて泰西の科白劇に近き者たらしめんとせしも、國劇の精神は樂劇的方面に在りて科白劇的方面に在らざるを悟るに及んで其の態度を一變せるなり。

「新曲浦島」

『新樂劇論』は洵に劇曲刷新の曉鐘にして、『小說神髓』と共に著者が文壇の先覺として常に豫言的創意を擅せる二大記念なり。而して『書生氣質』に相當すべき一新樂劇次で出でぬ。『新曲浦島』是なり。曲は浦島傳說に材を取り、三幕十二段に分る。序幕は丹後澄江浦に幻影を追うて心空なる浦島、父母に別れて失望自殺せんとするを乙姬に救はれ、歡喜して龍宮に赴く筋、中幕は龍宮三年の悅樂に人間を忘れたりし浦島、明月の夜遙に船歌を聞き、又父母の幻影を見て人間慕はしく、玉匣を形見

に乙姫と別れて立歸る筋、詰幕は三百年後の故郷の變遷を見て悔い恨む處、青年の男女來り慰るあり、匣を開けば、白氣立騰りて浦島忽ち老翁となる。時に天明け旭昇り老人青年光榮の未來を謳ふといふ筋。全部曲章と振事とにて現はし、補ふに少許の白と介とを以てし、曲人は歌ひ優人は舞ひ、樂人は三絃を主として他種々の樂器西洋のをも併せ用ゐ、曲は塲合によりて其曲節を異にし、從來の樂曲殆ど總てを包容す。斯くの如き型式が新樂劇として成功すべきか否かは之を當來の試驗に徵し、茲には單に其の内容思想を見んに、『雨浦島』以外更に一新發展をなし、先づ現實と空想との交渉の上に存する過渡時代の煩悶を寫し、進んで現實の上に立つて理想を忘れざるは即ち新時代の新理想たるべしとの意を寓したるに似たり。

「新曲赫哉姫」

翌年逍遙は又第二の見本として『新曲赫哉姫』を作しぬ。材を竹取物語の傳説に取り、二幕十五段に分ち、莊重典麗の歌詞を以て仙女上天の一新樂劇を組立てし者にて、之を『浦島』に比すれば、傳説の取扱に於て多少の差あり『浦島』に在りては一種の新寓意ありて傳説上の發展ありしも、此に在りては傳説其のまゝを繼承じて別に新意を加へず。且つ彼には舞踊を本位とせるに此には謡唱を本位とし、彼は俗曲を主腦とせるに此は寧ろ謠曲を根幹となし、多少新樂劇論を修正せるを見る。然れども過去の國民劇の特性の上に立てる樂劇たる根本的性質は『浦島』と異なる事なし。

劇界の狀態は斯くの如く動搖と變遷との渦中に在り。未だ其の間に系統ある活動の一定の針路を指すを見ず。而も其の裡、常に新しき或物を得んとする翹望と努力とあり、混沌の中一道の活氣の未來の光明を豫言するを認む。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上述ぶるが如く文壇當時の形勢は混沌なり動搖なりき。二十年來の各種の文學は新世紀の大思潮に伴ふ能はずして其の勢力を失ひ、其の間に努力せし先進、の諸家亦道を後進に讓りて去りぬ。而も之に代りて新代國民の新思潮に觸るゝ者未だ是あらず。左顧右眄所有試驗と提供とをなして懊惱煩悶の態を極む。獨り文學の内容の上のみならず、形式即文體の上に於ても作家悉く道途に迷へり。試みに小説に見んか、内容を明治世相の寫實に取り形式を言文一致體の文章に取りしは、疑もなく明治文學史上の一大事實なりしも、今や之に一新面目を與ふるに非

ざれば其の發展を望むべからず。之を新體詩に見んか、七五五七の詩律のなせる貢獻は、西詩の想形を移植せる功績と共に過去詩壇の一大紀念たりと雖、之に著しき工夫を加ふるに非ざれば將來の好尙を維ぐに足らず。更に戲曲に見んか、夢幻劇打破の運動は目覺しき限りなりきと雖、無意義なる飜案劇小說劇の外に、發達せる人心に適應する新型式を得るに非ざれば劇の前途必しも祝すべからず。從來の文人未だ茲に想到せざりしに、今や是等の大問題端なく其の意識に上り、乃ち動搖煩悶して暗中摸索す。天か時か。過去文學の大星續々落ちて新陳代謝の機正に迫り、一方に於て外征の大勝國民の自覺と國力の發展とを促し、我文學は早晚一變せざるべからざる機運に際會しぬ。正に是れ山雨至らんとして風樓に滿つる時なり。

第四期

第八章　新興文學の由來

第一節　舊文藝破壞の思潮

淸澤滿之

近時文壇の趨勢を見ん者、何人も其の冥想的思索的傾向の著しきに想到すべし。思ふに當時の思想界は主觀的思潮の滔天の勢を以て橫流せる所なりき。所謂人生問題心靈問題は到る處に論議せられ、學者文學家の此の問題に對する態度著しく痛切嚴肅となれり。世には此の問題の解決に煩悶して自殺せし文學者あり學生あり。然らざるも心靈上の此の消息に觸るゝ者多少の懊惱を懷かざるなし。淸澤滿之高山樗牛綱島梁川の如きは、正に此の氣運に鞭つて現はれたる好箇の代表者たり。其他近藤燕處姉崎嘲風等の言說、角田劍南島村抱月等の評論、多く內觀に傾き靜思に富み、進んで心靈の堂奧に入らんとす。三十四年淸澤滿之雜誌『精神界』を刊行し、所謂精神主義を主唱して自己の主觀的充足を說き、更に步を進めて曰

高山樗牛

綱島梁川

姉崎嘲風

く、宗教は主觀的事實なり、實なるが故に信ずるに非ず、信ずるが故に實なりと。而して教養ある靑年佛教徒翕然として之に靡く。同年又高山樗生『太陽』の論壇に立ちて主觀の權威を說き信仰の威力を叫びぬ。曰く人生は價値なり、而して價値は我自ら造る所なりと。彼の主張は有名なる「美的生活論」と共に一代靑年を動かし、彼等をして手の舞ひ足の踏む所を知らざらしめたり。翌年綱島梁川宗教的眞理を說きて神の主觀的創造は我が本性必至の要求の然らしむる所なりと唱ふ。其の思想界に對する影響は前二者の如く痛烈廣汎ならざりきと雖、爾來『新小說』誌上に連載せる「病間錄」は、眞摯なる心靈の叫びを漏して明治の思想史宗教史の上に磨すべからざる足跡を印しぬ。三十七年姉崎嘲風の『復活の曙光』に見えたる神祕論及同年發刊の『時代思潮』に見えたる信仰生活の皷吹、亦同じく此の系統に入るべく、國木田獨步が作品の上に現したる主張言說亦著しく懷疑主觀の色彩を帶べり。

思想界の主觀主義はかくの如くにして旺盛を極めたり。而も其の由て來る所は、洵に從來の客觀主義、啓蒙思潮、科學萬能の思想に對する反動たらずんばあらず。十九世紀物質的文明の洪波忽として絕東の洵美境を侵し來るや、舊物悉く破れて茲に一新境地を拓き、發して思想界の功利說となり、唯物論となり、無神論となり、澤翁と加藤博士とを中心とする客觀思潮は恣に斯界を橫流せりき。夫れども勢窮れば則變ず。二十七八年戰役の前後より幾分反動の現象を生じ來りぬ。夫れ人智の精を極むるや、萬象一として明ならざる無きが如しと雖、一步其の奧諦に入りて奧義を探ぐれば、何人かよく眞理の鍵を握り得るものぞ。維新當時の幼稚なる頭腦は一時其の絢爛の光彩に眩惑して科學萬能を信じたりけんも、今や三十年の修養を積みて從來の思想の餘りに空虛なるに驚きぬ。眞理を疑ひ人智を疑つて深く冥想思索の境に入り、所謂懷疑の思潮漸く其の芽を萠し來りしもの、自然の徑路なりといふべし。而も懷疑の結果は虛無なり。反動の第一步は破壞なり。思想界の所有方面に破壞運動起り、功利說を倒し唯物論を破り無神論を排し理論主義科學主義を斥け、所有舊信仰舊道德の權威を奪ひ盡さずんば已まざりき。而も之に代りて一世を指導すべき新思想確立せず、各其の行かん所に行き、趨らん所に趨り、其の間に一定の歸趨を見る事難かりき。唯其の新運動の根柢にはおのづから相通ずる一道の暗流あり。理論主義に對する實行主義、理想主義に對する現